

第五章 長安

広明元(八八〇)年十二月。

「覚えてろ。今度こそ火をつけて、皆殺しにしてやる」

わめきながら路地から飛び出してきた老女。

韋荘は危うくぶつかりそうになる。寒空に老女がまとうのは薄い襦袢。肩からむき出しの黒ずんだ皺だらけの細い腕をさかんに振り回し、指先が韋荘の胸元をかすめる。立派な身なりに気づいたか、老女は足を止め、腰を屈め斜めに見上げる。

「ははあ、あんた、この店の旦那の兄さんだろ。よく似ている。この年寄りめは、あんたの弟に、たったいま酷い目に遭わされてきた。寒さに凍える年寄りがいくら頼んでも知らん顔だ。人情もへったくれもない。兄弟ならあん

たも同じだろう」

韋荘の顎先に指を突き立てる。

顔を見るのは初めてだが、この甲高い声が、莠の店で響きわたるのを聞いた気がする。

韋荘が黙っていると、

「ふん、兄弟そろって血も涙もない。哀れな年寄りを苛め、さぞ小気味よいだろう。それもいまのうちだ。どんなことになるか、覚えている」

鼻に皺を寄せて睨みつけ、ひっかくように両手を上下に動かし、くるつと背を向け、小走り、道行く人が何の騒ぎかと立ち止まる間を縫って遠くに消える。

韋荘は、表通りから蘭の店の口へと入るつもりだったが、あたりに立った人の目が煩わしく、老女の出てきた路地に歩みいる。

両側は高い土の塀で、奥は雨の日だけに流れる溝で行き止まる。左側はこの界限で名の知られる医者小屋敷、右側の少し先に莠の店への入り口がある。

長安の蘭の店と莠の店は同じ敷地で中でつながる。

小さな門に「周急不継富」の五文字が掲げられている。孔子の言葉だ。急を救い、富を継がず。困っている者を助け、富む者をそれ以上に富ませないとの意味。莠の一風変った金貸し業はこの理念に基づき、困窮している者に無利子で小額を貸し付けている。

左右に開かれたままの木戸から、正面の扉に手を掛け、がたがたと動かす。

「なんだ、なんだ、まだそんなところでうろうろしていたのか。とっとと帰るがいい。いつまでもぐずぐずしていると、そのうちきつと痛い目に遭うぞ」

中から怒りの声。

「いやいや、私だ」

開いた扉の隙間から入っていくと、暖かい空気が顔に触れる。朝から出歩いている、初めて火の気を感じ取る。腕を組んで仁王立ちの楊助と目が合う。

ふてぶてしいばかりの仏頂面からにわかに関好を崩し、肋は背を丸め、手もみしつ、

「これはこれは旦那さまでございましたか。あの婆めがまたきたのかと思ひまして。まさかこちらの口からお入りになるとは思いもせず、ぞんざいな口をききまして、申し訳ありません」

大きな体をくねくねさせて謝る。その顔と仕草はやや滑稽であるが、あまり愉快なものではない。

楊助は、楊爺の弟の楊銀の長男だ。楊爺が己の後継者と定めた胆の兄である。楊銀の三人息子のうち、次男の胆と三男の臆は、楊爺と楊銀兄弟と同じく小柄だが、長男の助だけはかなりの上背がある。三兄弟の中で最も物腰が柔らかく商人らしいのはこの助で、その点は父親譲りである。いかつい顔に反し、愛想がよく弁舌が巧み、それでいて、時に凄みをきかせる、からだが大きいだけに大した迫力で、実際に腕力もある。長安の店において、父の楊銀は主に蘭の、息子の助は主に莠の手伝いをしている。貧者を相手にする金貸し業で、万事おっとりした莠では済まないことがしばしばある。助がいなくてはならないのだが、韋莊は長安にやってきてその仕事ぶりを実際に見

て、肋は主人の理念に必ずしも忠実でないと感じている。

「ぞんざいな口は、誰に対してだつてきいてよいものではないだろう」

「へえ、それはそうでございますが」

「肋は首を突き出し口先で返事をする。」

「いま路地の口で会ったあの女も、店にとっては客なのだろう」

「あんな婆め、何が客なものですか」

「うちには何度かきているのではないのかい」

「それが全くの困りものでして。旦那さまも御存知のように、借りた金を返せば、次にまた借りられるのがうちの店の決まり。利子なしで、その上、催促もしませんから、踏み倒せばそのまま。あの婆は何も返さなくせに、何度もきては、貸せ貸せの一点張り。あげくにわめきちらし、今日は、火をつけるだのとほざいてあばれ、手に負えません。この上はちよつと手荒でも、懲らしめてやらねばと思つていたところでした」

「余程困っているからこそ何度もくるのではないか。この寒さにひどいなり

だった」

「あんな連中の言い分を真に受けていた日には、いくら金があつても足りません。どぶに捨てるようなものでございます。長安には、困っている者なんていくらだつております。それを救うのは本来は皇帝陛下のお仕事でございます。しかし、そのお上がいまはお困まりとあつてはどうにもなりません」

助はにやりと笑う。この言い方は蘭の真似であろうか。

「確かに、上も下もいまは大変だ。お上が困つておられるのなら、下々の者をもっと困っている。あの老婆は何で金が要るのか聞いたのかい」

「聞くものですか。あの婆めには、あつしの睨んだところ、悪い裏がございませす」

「それは何かい、うちのやり方を快く思わぬ高利貸連中のことかい」

「嫌がらせがまたひどくなつてきました。蘭の旦那さまが張直方さまをしくじつてからこつち、何だかんだとございます。あの婆めも、誰かにそそのか

されているに違いありません」

肋が言うようなことはありそうだ。莠の金銭買し業が始まって日の浅いころ、莠は危うく大怪我をしそうになった。荷車が突進してきた。妙な事件はそれ以外にもいろいろあったが、蘭が張直方の屋敷に出入りするようになってぴたりと止んだ。

「そうならそれで、気をつけないといけないな」

「ついこの前ですか、武大人さまが張直方さまとの取り成しをして下さるとおっしゃったのを、蘭の旦那さまはお断りになったそうでございます。あつしなどの出る幕ではないと重々承知しておりますが、張直方さまの後ろ立てを頂戴できれば何かと安心なのに、どういふことでございますか、さっぱりわかりません」

肋は目をむいてぼやく。

張直方をしくじったのには訳がある。張直方は左金吾大将軍、つまり近衛兵の一つの部隊を指揮する重職にある。豪放磊落な親分肌で、長安近在の土

豪や商人の間に絶大な人気を誇る。蘭も、蘭の後見人である武大人も、張直方と縁故を結び、それが都での商売を大いにやりやすくしてくれた。張直方はかつて洛陽にいたところに狐狩りを好み、お狐さま信仰に凝り固まる楊耶は、狐を残虐に扱う男は決してろくな最後を迎えないからと、張直方と関わりを持つべきでないと蘭に忠告していた。

この年の春、長安で鷺鳥の値が突如として跳ね上がった。桁外れの上がり方で、百倍、千倍、万倍、十万倍になった。金品を賭けて鷺鳥を闘わせる遊びは昔からのものだが、俄かに熱を帯び、一回の勝負に家屋敷を丸ごと投げ出すまでになった。世の中が不穏であるために、刹那的な一発勝負に都の人は目の色を変えたのだろう。勝ちを取れる強い鷺鳥は奪い合いで、最強とされた鷺鳥に五十万緡という破天荒な値が付いた。それが最高額で一氣に大暴落した。蘭が手がけた鳥はそれほどの値にはならなかったが、高額で売りさばいてさつと手を引いた。売り抜けられなかった者は破綻し、無価値となった鷺鳥を抱え、涙ながらに肉を食った。蘭が最後に売った相手が張直方で、

以来、屋敷に顔を出すのをやめ、はからずも楊爺との約束を果たすかたちとなった。韋荘が貢挙のために上京した少し前のことである。

「蘭くんには蘭くんの考えがあるのだろう」

「あつしごときに、旦那さま方のお考えがさっぱりわからないのは、いまに始まったことではありませんですけど、お上までも困っているいまのときに、うちの店は、さてどうなるものやら」

肋は呆れたように笑う。大きな図体のいかつい顔で笑われると見下されたような気分になる。肋には人を小馬鹿にしたところがある。いま己には確かに見下されて仕方のないところがある。

不快感を押し隠し、

「蘭くんにはきつと深い考えがあるのだろう」

「あつしらは深い浅いもない知恵なしでして、わずか一銭の損になりそうだと思うだけで、胸がどきどきする小心者。店でどんな騒ぎがあつても、ほれあのように、泰然自若とされている落ち着きなどとはまるで無縁でございま

す」

肋は、湯気を昇らせる鉄瓶の向こう、奥まった棚の方へと視線を巡らせる。

「なんだ、いるではないか」

莠の背がある。

「ずっと、ああしておられます。武大人さまがお帰りになってからあのまま
で、火を付けるだの何だのと婆が叫んだときも、身動き一つなさいませんでした。
した。全く耳に入らないのでございましょう」

「暮となるとあれは夢中だから」

「それはあつしもよく存じております。旦那さまにお仕えしてかれこれもう
十年でございますから、いまさら驚くものではありません。武大人さまも武
大人さまで、お忙しいはずなのに、暮だけは特別なのでございましょう。あ
つしにはそこんところがいまもってどうにもわかりません。あちこち忙しく
回られたのでしよう、汗を拭きふきやってこられて、いきなり石を並べ始め、
ばたばたと妙に急いで、『続きはまた後で』と、そそくさと出ていかれました。

碁好きとはだいたいからしてああいうものなのでしようか」

肋のぼやきを他所に、韋荘は湯気の上でかじかんだ手を温める。莠は肋の声も、韋荘の入ってきたことも、全く耳に入っていないようだ。

「碁好きと言っても、武大人さまと莠くんは、世間とは別格だ」

「この騒動で武大人さまは坊内を飛んで歩いておられるのに、その最中に何も碁を打ちにこられなくてもよさそうに思うのですが」

「武大人さまは何をされている様子だったかい」

「坊内にどれだけの若い男がいるのか、お上の命令で、一軒一軒調べているとおっしゃっておいででした。そのうち、あつしなども徴発されてしまうのでしょうか。全く嫌なことになってきたものです」

「そうなのかい」

「このお店もどうなりますことやら」

肋は口を曲げてぶつぶつ言う。

指がだいぶほぐれてきたところで韋荘は火を離れ、莠の肩越しに碁盤をの

ぞく。石が盤面全体に散らばっていて、勝負はいよいよ佳境に入るところであるらしい。

「どちらの分がよいのかな」

韋荘の声がやっと聞こえたらしく、

「私の方がかなり悪いです」

莠は振り返らずに言う。

「いつものようにそなたが白なのだろう。悪いようには見えぬが。ここら辺に置いたらよさそうだが」

韋荘が指で碁盤を押さえると、莠は笑う。

「そこに置けば、武大人さまは喜ばれましょう。よいと見えるのが、あちらの誘いです」

「ここではいけないのかい」

「今日は武大人さまの思う壺にはまってしまった。『急ぐから』と何度もおっしやって、それで心が乱されまして、考えを巡らす暇もなく次々に置い

て、気づいたらこの局面です。武大人さまはこうなれば勝てると思われたのでしよう、さつと出ていかれました。それからずっと思案して、白をよくするのはかなり難しいです。兄上が示されたここは、いかにも兄上好みの手で、よさそうに見えても、こちらで大きく取り戻され、かえって不利となります」

秀は碁盤のあちらからこちらへと指で示すが、不利という読みが韋荘には理解できない。

「難しいものだな」

「兄上の上達を妨げているのは、早見えで、即効性のある手を打たれることにあるのでしよう。一局面での優劣が全体の勝敗にそのままつながるとは限りませんから」

弟はなかなか痛いところを突いてくる。

「では、どこに置けばよいのかい」

「相手の出方によっては、ここが好手となりましょうか」

秀は思いも寄らぬところを指で示す。

「それなら、もしここに置かれたらどうするのだい」

「それこそがこちらの狙い。兄上と同じ手で応じてくれば、武大人さまに負けることはありません」

「早見えの私が相手なら、そなたは易々と勝てる訳か」

韋荘は腕を組んで己の手がなぜ悪いのか思索していると、低く男のわめくような声が響いてくる。

「なんだいあれば、表の店の方か。今度はあちらで騒ぎなのかい。今日はいつたいどういう日なのだろう」

「見てまいりましょうか」

肋が言うのに対して、

「こつちでまた何かあっても困るからここにいてくれ。蘭くんも帰ってきているようだから、私が見てこよう」

今朝方、韋荘と蘭は相前後して外に出た。蘭は出先で何か聞くべき話を仕入れてきているかも知れない。

韋莊は友人の下宿に書物を届けた。貢挙を受けるために同じように上京してきた者で、東呉（とうご）くん、西周（せいしゅう）くんの仇名で呼んでゐる。韋莊より一回り若い苦学生である。東と西からきた二人は元は見ず知らずの間柄で、境遇が類似しているところから、安い宿の一室を共同で借りてゐる。韋莊とはある宴席で知り合い、暮らしに余裕のある韋莊が、書物を貸したり、食べ物差し入れたり、ささやかな援助をしている。勉強ばかりで世間の動きにあまり通じない東呉くん、西周くんからは新しい話は聞けない。来年の春の貢挙は行われるのだろうか、三人して心配するだけだった。

蘭は、東の市で商談が一つあると、韋莊よりも早くに出ていった。耳に聡い商人の集まる市でなら何かしら聞き込んだことがあろう。

莠の店を横の口から出ると中庭である。すぐ左手の低い木の並びを進んでいくと、倉の前を通って、母屋の脇の井戸端に至る。反対に右手に回ると、路地の塀に沿う高い木々と石碑の並びの前を通り、お狐さまの祠に至る。虢州の莊園のお狐さまがここに分祀されている。祠の正面に狐潭に見立てた小

さな池がある。いま出た口から真つ直ぐに置石を踏んで進めば、池の端にかかる石の橋を渡り、花の間の小道を抜け、蘭の店へと通じるくぐり戸に至る。そこに垂れ下がる蓆をめくるとすぐに扉がある。昼間は扉が開け放しなので、店の中にそのまま入っていける。

蘭の後ろ姿がある。騒ぎはすでにおさまったようで、店の外にからだを半分出している楊銀が、

「もしまたきたら、今度はよつぽど懲らしめてやりませんと」

「手荒な真似はどんなものかな」

「おとなしくしていると、あの手合いは付け上がるばかりです」

「下手なことをすると、かえって面倒を背負い込むことになりはしないかな」
銀は戸を横にすべらせ、

「いつもの旦那さまに似ず、思い切りがよろしくないではありませんか」

「あんな小悪党には隙を見せぬのが何よりだ」

「今日に限らず、どうもぐずぐずなさっている気がします」

「俺がかい」

「そうではありませんか。どうしてここでまだこうしておられますのか」

銀は戸を閉め終わり、体をこちらに向け、韋荘に気づき、口をつぐむ。

肋がぼやいたのと同じように、銀にも不満があつて、その一因は己にあると韋荘は感じる。

「俺は俺なりに考えている」

「もちろん左様でございましょう」

息子よりずっと背の低い銀が体をいっそう小さくして笑い顔をつくる。

「手も打っている。それでだ、御苦勞ではあるが、肋を連れて東の市へいっ
てくれないか。話を付けてきた。この割符を見せれば品物をくれる。おまえ
たち二人が揃っていつても、何か面倒を言い出しかねない。そのときはかな
りの強面でやってきてくれていい。驢馬と荷車はいつものところで用立てて
くれ」

「いくのはお安い御用ですが、店はどうしますか。いまみたいなのがまたく

ると嫌ですから、閉めておきますか」

「若い者の手もそろそろ空くだらう。あつちの店とこつちの店に一人ずつ居させよう。昼間から閉めるのも感心せんからな」

「へい。では肋を呼んで、さつそく出かけるとしましょう」

銀は腰を屈めて韋莊の脇を通る。それで蘭は気づき、

「兄貴、帰っていたのですかな」

「今日はどつちの店も騒がしいようだ。どうしたんだい」

「都に店を構えていれば、よくあることですな。いまきたのは、妙なものを持ち込んで吟味させ、何かのはずみに品物に傷でもつけば、それを因縁に強請ろうと、つまらぬ小悪党ですな。都には知恵のある人間が集まっておりますから、あの手この手で退屈知らずですな」

「ここのところ悪さをする者が増えているのではないのかい」

「そろそろ浮き足立ってきたことですかな」

「銀が思い切りが悪いと言っていたのは、長安にぐずぐず留まっていること

なのだろう」

「でしようかな」

「危険が迫っていると銀は思っているのかい」

「あれは大きな勝負のできない男ですから。まずは逃げるに越したことはない、あれの考えそうなことです」

「ここにおいて大きな勝負があるのかい」

「さあて、どうですか。何かあれば面白いとは思いますが」

「市で何かわかったかい」

「店先も何ですから、俺の部屋へいきますかな」

蘭は奥に向かって若い者を呼ぶ。

「終わったらここにきてくれ」

「いま少しです」

返事があつて、実際に姿を現したのはしばらくしてからのこと。

「床下の穴倉を修繕させていましてな」

汗を拭き拭きやってきた二人に、銀、肋の代わりに、二つの店の番をするよう蘭は言いつける。

長安の店に住むのは、蘭に、莠一家の四人、楊銀夫婦と肋、若い者二人、賄いの陳婆や、それに小間使いの阿枉で、そこに夏から韋荘が加わった。

母屋とは別棟になっている蘭の部屋へ回っていくと、井戸端で、釣瓶を手にしたままの阿枉がぼんやり立っている。

蘭が横から声をかけ、

「店の二人に何かちよつとした食い物をもって行ってやってくれ。疲れただろうからな。その後で、俺の部屋で茶を入れてくれないかい」

「はい」

返事をして、阿枉はぼろりと釣瓶を落とす。あわてて拾い上げようとする顔は、いまにも泣き出しそうで、青白い。

かつてお狐さまのお祭の日に、伍七の漕ぐ小舟に乗っていた娘だ。今年で十八歳だ。

「疲れているのではないか」

蘭がしゃがんで釣瓶を拾ってやろうとするのを、阿枉は遮って手にし、

「いいえ、そんなことはありません」

蘭は立って、優しげに、

「大丈夫だ、兄さんはじきに帰ってくる」

「そうでしょうか」

「安心して待っていれば良い」

それはただの気休めでしかないと言わねばならないと韋荘は感じるが、

「大唐の都がそうおいそれと揺らいだりするものか。大丈夫に決まっている」

韋荘もまた気休めを付け加える。

「きっとそうですね」

阿枉は笑みをつくる。

阿枉の肉親は一人の兄がいるだけだ。その鄭郎は、長安の西の市で荷物運びの仕事をして、かつかつのその日暮らしを送っていた。

十日ほど前、店に鄭郎がやってきた。「これで母さんを捜しにいけ」と、小さいが重みのある袋を妹に渡した。中は銀の塊だった。鄭郎の稼ぎでは一生かかっても手にできないもの、阿枉が驚くと、「母さんに会いたいと、いつも泣いていただろう。これだけあればどこへだっていける」。兄妹の母は、阿枉が生まれて間もないころに、胡人に連れられて西方にいつてしまったと二人は聞かされていた。兄がよからぬことでこの銀を手に入れたのではないかと気がかりで口もきけずにいると、鄭郎は「心配ない。神策軍に入ったのだ」と答えた。これは阿枉を余計に心配させた。阿枉は袋を返そうとすると、「母さんに会って、俺の分も孝行してくれ。頼んだぞ」と、兄は店を飛び出し、それきり姿を消した。

阿枉の笑みに、長安の街もいまこうあるのかも知れないと韋荘は思う。内心の不安に対処する術を知らず、いつもと変らぬ笑みを見せようと努めるのだ。人々は今日も昨日と同じであるかのように過ごしている。店で騒ぎがおきるのは、変化の一つの表れであるかも知れないが、町で特別に変ったとこ

ろを見出すのはかえって難しい。今日も昨日と同じであってしかるべきと、とりあえずは気休めに浸っているのだろうか。

部屋に入ると、蘭は、灰に埋めてあった火を掘り出して炭を継ぐ。

「二日か三日でしょうかな」

「そんなに早くにか」

「長くても五日はかかりますまい」

「もうそれで黄巢がくるのかい」

そのようになろうかと韋莊も感じてはいた。できればそうではないことを望み、気休めを言い続けていたい。

変化が急激過ぎて、ともすれば、変化に気づかずに、何事もないと思つてもいられる。こんなことになるはずがなかったのだから、なるはずがないことには気づかずについてよい。今日も昨日のまま、元と同じところに留まっているのなら、それはそれで一時の安らぎを貪っていられる。

貢奉受験のために上京してきたのは夏の初め、それから半年余りでこうな

るとは予想だにしなかった。

韋莊が都に着いたころ、黄巢は依然として長江の南にいた。朝廷には続々と捷報がもたらされていった。遠からず黄巢の首が送られてくると、町にはそんな声もあつた。だから、来年の貢奉は予定通り行われるものと、韋莊はいささかも疑わずにいた。試験に有利になるよう、有力者のもとを訪ねたり、手紙を書き送ったりしていた。

広州にいた黄巢は、南方の暑さに辟易し、去年の十二月、冷涼な地を求めて北へと動き出した。長江の南岸に達したところで、官軍に雇われた沙陀族の騎馬兵に行く手を阻まれた。かつての徐州兵士の反乱のとき、鎮庄の切り札として繰り出されたのは沙陀族だった。黄巢は沙陀には勝てぬとそこでの渡河をあきらめ、長江に沿って東へと進んだ。長江の下流域に睨みをきかせるのは淮南節度使の高駢（こうへん）である。高駢は数々の武勲に輝く名将で、皇帝は高駢が黄巢の息の根を止めてくれると期待を寄せた。高駢は黄巢討伐の檄を全土に飛ばし、各地の節度使がそれに応じ、高駢のもとに軍勢が送ら

れた。広明元（八八〇）年四月、つまり韋莊が都に向かいつつあったころ、高駢は先発隊を長江の南に繰り出した。行くところ敵なしの連戦連勝であると、高駢は皇帝に報告した。それが韋莊が都に着いたところに聞いた数々の捷報である。

高駢は野心家で、偉くなり過ぎてもいた。兵士とともに前線を駆け回ったのは昔のこと、いまや戦場から遠く離れた安全な場所に身を置いて命令を下すだけである。財を貪り、より強い悦楽を追い求め、未来永劫それを続けたいものと、不老長生の術を得ることに熱中している。各地の節度使が送ってきた精鋭部隊が揚州に集結するのを見て、これを使って黄巢に勝利したところで、人に借りができるだけだと高駢は考えた。黄巢討伐の手柄を独り占めにしようとして、高駢は、黄巢はすでに滅亡寸前、これほどの大軍は不要であると、軍勢を解散させた。

ところが、高駢が朝廷にもたらしっていた勝利の報せは全てが偽りであると判明した。官軍は連戦連敗、先発隊の将軍は敗死した。皇帝は落胆したもの

の、まだ遠い南の話と、特段の対策は立てず、高駢も処罰されなかった。そのころ、婺州が賊の手に落ちたと聞こえ、韋莊と蘭は貫休の身を案じた。

七月、黄巢は勢いに乗ってついに長江を渡った。皇帝はなおも高駢に期待を寄せた。高駢は、「長江を越えたからには、その勢いは誰も止められないでしょう」と、他人事のような手紙を朝廷に送ると、自身は厚い防備で固めた揚州の中に閉じ籠った。

ここで蘭は憂慮すべき事態に至ったと感じ、虢州の莊園に帰った。薛未亡人、藹、楊爺と対策を相談した。朝廷さえ黄巢の動きが捕捉できない中で妙案はなく、無闇に慌てることなく、偽の情報に惑わされず、臨機応変に各自が対処すると決めるしかなかった。洛陽、揚州の店に使いを出し、万一の場合には自分の命を優先せよと指示した。ほどなく蘭は長安に戻り、過去の二回と同じように、悪くても洛陽の手前で黄巢が退けられるのを人々とともに期待した。

黄巢は揚州に引っ込んだ高駢を相手にせず、長江北岸でしばらく兵力の増

強を図ると、それまでの流動戦術を捨て去り、略奪を一切禁止し、易姓革命を行うと高らかに宣言した。唐朝を見限り、新たな世の到来を望む人々が続々と馳せ参じた。黄巢の軍勢は急速に膨れ上がり、洛陽に向けて進撃を開始した。二度失敗した洛陽攻略であるが、三度目は、抵抗らしい抵抗を受けることなく、黄巢は十一月、無血入城を果たした。

その直後、洛陽の店と虢州の莊園からの手紙が長安に届いた。洛陽は黄巢が入った後も平穏であると知られた。虢州からの便りは、黄巢が洛陽に入る前に藹が書いたもので、勉強に励んでいる兄への心遣いが中心で、叔父の韋韜の病状や、楊胆に子が生まれるといったことが書かれていた。叔父の様子は気がかりだが、洛陽が静かなのはひとまず安心できた。韋莊と蘭は長安に留まったまま、いましばらく事態の推移を見守ることにした。

ところが、すぐに潼関以東の情勢が一切都に伝わってこなくなつた。十一月の終わり、黄巢の大軍が西に向かつて動き出したらしいとの噂が長安の町に飛び交つた。事実なら、虢州はその進路に当たる。莊園が心配でも、状況

のわからぬまま闇雲には動けない。

朝廷は神策軍に潼関守備を命じた。神策軍は近衛兵の一部隊で、首都防衛の切り札、唐軍のなかでも選り抜きの精銳の集まりである。本来はそういうことなのだが、実態は著しく乖離している。各地で反乱が相次いでいたために、神策軍に入っていれば地方に出て戦う心配がないと、都下の良家の子弟たちは挙って神策軍に入るのを願った。数の限られた兵士の座を得るために、実権を握る宦官に金品を贈り、その結果、神策軍は苦勞知らずの金持ちの子弟ばかりが集まる最も軟弱な部隊になり下がった。その神策軍に潼関守備の命が下ると、息子を兵士に出している親たちは慌てふためいた。町の貧者を金で買い、息子の身代わりとした。金をつかまされた將軍はそうした不正を見て見ぬ振りをした。阿枉の兄の鄭郎も買われた一人だった。

阿枉が兄から銀を受け取った翌日、長安の人々は神策軍の出陣を見送った。神策軍は信門楼で皇帝の謁見を受けてから、都大路を東へと行進した。神策軍の威風堂々の姿を見せ、都の者を安心させようとお上は意図したのでろう

が、韋莊とともに見物に立った蘭は、「これで一日でも持ちこたえられたら上々ですかな」とささやいた。装備はさすがに唐軍の第一で、絢爛と輝いてこの上なく立派であった。中におさまる兵士はにわか仕立ての貧者、鎧の重さに歩くのがやっとのありさまだった。鄭郎の姿を捜したものの、一様に深くうなだれる中にその顔は見出せなかった。

迫りくる黄巢の軍勢は五十万とも百万とも噂された。それに対する神策軍は二千八百。唐の東の都である洛陽が賊の手に落ちたのは、安祿山の反乱以来百二十五年ぶり。安祿山が長安攻略に向けた軍勢は二十万。そのとき潼関を挟んで対峙した官軍はそれを上回る五十万だった。それでも、賊の勢いに官軍は屈した。

圧倒的に弱小の神策軍が敗れたらしいと、町に噂が走ったのは二日前のことだ。後から神策軍の応援に向けられた部隊も、神策軍の落ち武者と出会って戦意を失い、戦場に赴かずどこやらへ雲隠れしたと、昨日はそんな話も聞かれた。

「こうなつては隣の先生ならずとも、はなはだ遅すぎましたと言つしかないでしょうな」

蘭は笑う。

隣の医者とはなかなか繁盛しているが、蘭によれば、「十人の病人を診て、俺なら二人しか死なせないが、あの先生は五人は死なせる。俺よりも多い三人は、あの先生の手にかからなければ死なないですんだ。あの先生は、それをはなはだ遅かつたのでと、したり顔で言う」と評する。それで太遲（たいち）先生と蔭で呼ばれている。

「朝廷に居並ぶ方々も無策で太遲先生のお仲間では情けない」

「その責任の一端は兄貴にありますかな。兄貴が早くに貢奉に合格しておれば、いくらかましなこともできたでしょうに」

「いや、田令孜（でんれいし）のような輩がいる限りは、私などがいたところではなかなかどうこうできるものではない」

「皇帝の『お父ちゃん』にもここでしつかりしてもらいたいものですな」

「田令孜に期待してどうするのだ。あれは追放するしかない」

「宦官の害に蝕まれて百年、唐室の病はやはり手遅れですか。黄巢が長安にくるのは、二日なのか五日なのか、そのあたりは別にしても、確実なこと。命あつての物種と、ここで逃げますかな」

「いまから逃げられるのか。それこそ手遅れではないのかい」

「そうですね。楊銀は手遅れかと恐れていましたな」

「それにいまから逃げるとしても、外には黄巢の軍勢が溢れているのだろう、どこに逃げたらよいものやら」

「思い切りの悪さ故にひどい手遅れにしてみましたかな」

「そなたの判断を鈍らせたのはこの私だ。そなたは風向きを見るのが得意とつくにわかつていたのだろう」

「俺も太遲先生並みでしょうかな。張直方をしくじってから、風はこっちは吹いてきてくれないようですな。莠くんにも迷惑をかけていますしな」

「張直方さまのことは、楊爺との約束を守るためにわざとやったのだろう」

「どうだったですか。成り行きですな」

「事ここに至ったのは成り行きではなく、明らかに私のせいだ。これからどうしたらよいとそなたは考えているのか、教えてくれまいか。私のことを抜きにしてよく考えてほしい」

「考えたところで、はなはだ遅しですか」

そこに阿枉が入ってくる。

蘭は声の調子を明るく変え、

「何と言っても大唐の都、ここにいるのが一番ですな。洛陽は何事もなし。

長安もそうなりましょう。万事が宜しくおさまったの新しい御世。阿枉の兄もおっつけ帰ってきました。案ずることはなしですな。さあ、阿枉、早く入れてくれないか。朝から歩き回って喉が渴いた」

阿枉は火の上に鉄瓶を載せ、卓の上に茶の道具を並べ、部屋の隅で湯が沸くのを待つ。蘭は、巷の椿事をことさらに面白おかしく語る。阿枉はにこり

ともしない。

狐潭で伍七の漕ぐ小舟に乗っていたとき、阿枉はけらけらと笑い、くりくりと動く目は楽しくてならないと語っているようだった。この少女の幸せを守ってやりたいと思ひ、それが貢奉を受ける決意につながった。あのころの笑顔を、いまの阿枉に取り戻してやることができない。

湯が音を立て、阿枉は茶を入れる。

「旨い。阿枉の茶は天下逸品だ」

蘭が褒めても阿枉の表情は硬い。無言のまま、空になった鉄瓶を提げて出ていく。

阿枉の後ろ姿に苦いものを感じる。己は阿枉にばかり無力なのではない。阿枉と同じ年頃で、そして目もよく似るもう一人の女性がいる。それを想うなり、胸が息苦しくなる。その女性がいるから長安に留まり続けていると、もしも人に言われれば否定できない。

黄巢が洛陽に入つてすぐのころなら、長安を出て虢州の莊園に戻るのほさ

ほど難しくなかっただろう。神策軍が潼関守備に向かったときでも、虢州は難しくても、長安を出るだけならまだ可能だった。黄巢がくるまでまだ若干の日がありそうないまはどうか。黄巢がきつつある進路とは逆の西を目指せば、まだどうにかなるだろうか。それでも長安を出ようとしていないのは、阿枉ではないもう一人の女性が気がかりだからなのだが、それが一番肝心のことであるとまでは、心の内でなお認めずにいる。

空になった茶碗を置く。これから悪い方へとひたすら向かっていくのなら、このような茶も飲めなくなるのだろうか。

「そなたの考えを聞きそこなった」

「俺の考えはすでに阿枉に言いましたな」

「あれが本心なのか」

「もちろんですな。姉さんのお気に入りの阿枉に、いい加減なことなど言えませんか」

蘭は笑う。「姉さん」とは莠の妻の柳氏である。

蘭が柳氏を「姉さん」と呼ぶのを長安の店にきて初めて知った。莠は蘭より年下で、柳氏はさらに下であるから、「姉さん」と呼ぶべき間柄ではない。なのに「姉さん」と呼ぶのは、蘭が柳氏に並々ならぬ敬意を払っているからだ。長安を留守にすることの多い蘭と、世間とは異なる感性に生きる莠を補い、長安の店を實際上取り仕切っているのは柳氏である。

「黄巢が入ってきて何事も宜しくおさまることなどあるだろうか。洛陽と異なり、ここは都だ。迫りくる黄巢とお上は戦うおつもりではないのか。武大人さまは、兵士として使えそうな若者を調べて歩いておられるようだ」

楊助に聞いたばかりのことを言う。

武大人は、蘭の店のある安邑坊の坊正（ほうせい）、つまり坊の秩序を守る仕事を上から預かっている。最近までは、東市で絹を商う同業者の組織である絹行（けんこう）の頭をしていた。その役を息子の武鈞（ぶきん）に譲ってから、東市の南隣の安邑坊で坊正になったのは、一つには張直方との太いつながりがあるからで、財力と胆力を兼ね、温厚な人柄の武大人は人々に慕われ

てもいる。

「それでは、俺もそのうち官軍に組み入れられるのですかな。そうなれば、勝手に都を出られなくなりますな。それより、お上のために命を捧げられる機会に恵まれるのを喜ぶべきでしょうかな」

「四十を超えたそなたまで兵士にするようなら唐もおしまいだ。剣を持つのもおぼつかないくせに」

「いあ、兄貴よりはましですな」

「そなたの一番の武器はその長い舌だろう。昔の遊説家のように、黄巢のところに掛け合いにいき、長口舌を振るって、お引取りいただいてきたらどうなのだ。首尾良くいけば、田令孜に褒められ、宰相くらいにはしてもらえらるだろう」

「貢奉も受けない俺が先に宰相になっては兄貴に気の毒すぎますな」

「あの神策軍を見ては、勝てるとは思えない。相手は何年もの間、戦に明け暮れてきた連中だ」

「勝てそうもないのなら、洛陽のように、門を開いて迎え入れるのが最も結構な手立てでしような」

「洛陽で血が流されなかったのは本当なのかい。黄巢が都合のよい噂を流しているのではないのか」

「それは否定できませんが、洛陽の店からきた手紙には、平穩であると一応書いてはありましたな。長江を北に渡って、黄巢には皇帝として立つ自覚が生まれたわけではありませんかな」

「いつ気づくかが問題だと、そなたは南山で言っておったな」

「黄巢にどこまで深い知恵があるのか俺にはわかりません。少なくとも、田令孜をお父ちゃんと呼んでいる男よりは、いくら何でもましなわけではありませんかな」

「黄巢の肩を持つのかい」

「兄貴の方こそ黄巢に肩入れしてしかるべきではありませんかな。同じく貢挙に落ちた仲間でしょう」

「貢挙に落ちた人間など天下にいくらでもいる。いま一度貢挙を受けて唐朝の官人となる決意をした私と、略奪、殺戮をほしいままにしてきた黄巢と一緒にしないでくれ」

「まあ、怒りなさんな。世のため人のために身を捧げるとの兄貴の心意気は立派だと思っから、貢挙に受かるまで手伝うと俺は誓った。それですな、本当に肝腎なのは何かと考えると、どうですか、貢挙に受かることよりも、世のため人のためになることではありませんか。皇帝の姓が李から黄に変わって、それでよりよい世の中になるのなら、そちらを望むのも悪くはないのではありませんか。黄巢が都に入って、来年の春に首尾よく貢挙が行われれば、兄貴はそこでめでたく進士及第、黄巢の新朝廷における最初の合格者となれましょう。これは建国の功臣となるまたとない好機ですな」

「馬鹿を言うな。逆賊の行う貢挙など誰が受けるものか」

「都に入ればもはや逆賊ではありません。新朝廷を開く英雄ですな。唐朝を開いた高祖、太宗だって、長安にきたときには、隋の側から見て逆賊でした

からな」

「黄巢を、恐れ多くも高祖、太宗に比べるなど許されまい」

「黄巢を讃えるつもりはなくても、俺たちにとって何が得かを考えるならば、黄巢がくる方と言うことはありませんかな」

「黄巢に尻尾を振って利を得ようと言うのか」

「世の中が変わるのは商人にとっては千載一遇の好機でもありますな。新朝廷にうまく取り入り、御用商人として大出世もできましょう。それが嫌なら長安から逃げるのがよいでしょうな」

「賊に諂うなど考えるだけ腹立たしい。十数年振りに貢奉を受けようと決意し、間もなく試験が行われるときになって黄巢がきたのだ。昨日今日の思い付きで受ける試験ではない。我が人生を賭けての決意だった。それが無に帰そうとしている。黄巢に追われて長安からおめおめと逃げるのは口惜しい」

「黄巢と張り合うおつもりなら、武器を手に戦いますかな」

「武人ならそうもしょうか」

「しかし、兄貴は王道政治を志す君子。ならば、考えていただきましょう、こうもやすやすと黄巢を長安の間近にまでこさせてしまったその理由を。半年前にはまだ遙か南方にいたのに、いともたやすく洛陽を手にし、今度は長安に乗り込もうとしているのはなぜなのか。黄巢が天の時を得て、天下の人心が黄巢に靡いたからではありませんか。逆を言えば、唐朝は天の時を失い、天下の人心は離反したのですな。なぜそうなったのか。他ならぬお上がそうさせたのではありませんか。己の決意を黄巢に砕かれて口惜しいと兄貴は言いますが、兄貴の決意を無にしたのは、実は我が唐の偉大なる皇帝なのではありませんか」

「お上について声高に言うのは慎んだがよい」

「いくら声を大きく言ったところで、お上の耳には届きますまい。我等が偉大なる皇帝は、きつと逃げる算段に大童でしょうからな」

「そうだろうか」

韋莊もうすうすそう思わぬものではない。

「玄宗皇帝さえ賊の前には逃げましたからな。落ち行く先は、玄宗皇帝と同じ蜀でしょうな。さすがに皇帝のお父ちゃんは用意がよく、田令孜はこうなるのを見越して、陳敬瑄(ちん けいせん)を西川節度使にしておいたのですな。大したものですな」

陳敬瑄とは田令孜の実の兄である。田令孜は宦官の養子となり、出世のために去勢して宦官になった。兄の陳敬瑄は何の取り柄もない無頼漢だったが、弟が幸運にも皇帝にお父ちゃんと呼ばれる身分になったおかげで大將軍になった。一年ほど前のこと、皇帝のもとで、西川節度使の地位を賭けての勝負が行われた。四人が擊毬の試合をし、勝った者が節度使になる。田令孜の目論見通り、陳敬瑄がまんまと手にし、成都を中心とする蜀の地の実権を掌握した。

「お上が都をお出になれば、後を追う者も多く出ることだろう」

「兄貴もいきますか。唐朝に尽くすのが志なのでしよう」

「私はまだ唐の官人になっていない。虢州の叔父上、叔母上がどうされてい

るのかわからぬときに、自分たちだけ正反對の蜀に逃れる訳にはいくまい」

「黄巢の進路に当たるとは、虢州にはどうせいきたくてもいけませんな」

「西にはいかず、東にいけぬのなら、長安に留まるしかあるまい」

「やはり結論はそういうことになりますかな」

蘭はくくつと笑う。

「何がおかしい」

「俺は何十年も兄貴を見てきて、兄貴という人のどこがよいのか、時々わからなくなりますが。楊爺が、どうして兄貴ばかりを鼻屑にするのか、不思議だと思っております」

「危なっかしくて、心配で放っておけないだけなのだろう」

韋莊自身も楊爺が尽くしてくれる理由はいまだによくわかっていない。

「兄貴は、世のため人のため、唐朝への忠節と、立派なことを言って貢奉を目指しておられる。それはそれで大したものですね。俺も、この兄貴のためなら、ひと肌でもふた肌でも脱ごこうと思つた。しかしですね、兄貴の一番の

よさはそこにはない。違いますかな」

蘭はまたくくつと笑う。

「そもそも私に人より優れたところがあるとは思えない。いまも莠くんを基を批評されて、早見えだが、全体が見えていないと指摘された。碁に限らず、常にその場その場で上手に振る舞うのが私であるらしい」

「莠くんは、さすがによく見えていますな」

「そなたも同じように思っているのかい。それも仕方ない、本当のところなのだから。こんな私だ、楊爺に贖罪され、そなたに助けられてしかるべきと思えるところはない」

「早見えは必ずしも悪いことではなく、それよりも、兄貴には本当によいところがあるのですな。最近になってやっとわかるようになりました。うかつにも、それまでは、曖昧にしか考えていませんでしたな」

「私にそれほどまでに言うようなところがあるだろうか」

「兄貴の本当のよさはすな、要するに、柱に抱きつく信を第一としている

ことですか。これがあるから、俺は兄貴のそばを離れられないのですな」

蘭はまたくくつと笑って、すぐに真面目な表情になり、

「ただし、柱に抱きつく信を貫くのは容易ではありませんぞ」

「わからないことを言う。柱に抱きつく信とは何のことだい」

「わからぬはずはありませんでしょう。あの尾生（ひせい）ですか」

「尾生とは誰だ」

「ですから、橋桁に抱きついたまま溺れ死んだ例の男ですか」

韋荘は卓を叩き、

「あの尾生に私が似ているとでも言うのか」

「違いますかな」

尾生とは古い古い話だ。千年以上も昔、姓は尾、名は伝わらぬ若者が、町の女と逢引の約束をした。橋の袂で女を待っていると、たまたま大水が出て、川の水位が上がってきた。水が足元をひたし、瞬く間に胴にまで上がってきた。でも、尾生は動かなかった。女との約束を守ろうと、胸まで水につかっても

やはり橋桁に抱きついて待った。しまいには溺れ死んで、町の笑いものとなった。

韋荘は苦笑いし、

「私は尾生であるのか。そなたに、尾生にも及ばぬと言われなかっただけましと思うべきか」

「そう言う考えもありましたな。尾生には女だけを思う一途さがありましたな。兄貴は、貢挙がどうだの、世のため人のためと、余計なことをかなり言っておりますな」

「余計ではあるまい」

「尾生のように純粹になれないのも、そこがまた兄貴のよさと俺は思っております」

「褒められている気がしない。尾生のように柱に抱き続けて死ぬのをそなたは私に勧めるのかい」

「兄貴がそう考えるのなら、俺は賛成しますな」

「抱柱（ほうちゆう）の信と言うが、それは信ではあるまい。尾生がどうであったかは知らぬが、少なくとも私は心が弱いだけだ。どうしてこのようになったのかわからない。心の弱さ故に、いつの間にかこうなってしまった。なっってしまったからには、己にはどうともできない。信念があるのではない。成り行きでこのようなことになり、都を離れられなくなった。ただ、あれがいのから都を離れられずにいるのは確かでも、それが唯一の理由ではない」

「そこが尾生に及ばぬところですか」

「柱を抱き続ける一途ささえもないのか。己の心の弱さのために溺れ死ぬようなことになるとしても、そなたたちまで一緒に溺れさせる気はない。私を置いて都を出ていってくれてよいのだ。いまなら間に合うだろう。そうしてくれないか」

「生憎と、俺は、兄貴が貢奉に受かるまではと誓ってしまいましたからな。こう見えても、俺は言ったことは守りますからな」

「そなたはともかくとしても、他の者は」

「抱柱の信があつてもなくても、唐朝への忠誠心があつてもなくても、いまここで都を出ていくことの損得を勘定すると、得とは限りませんでしょうな。楊銀の奴は残るのは損と読んでいるようですが、新しい皇帝の顔を拝むのは損ではないと、俺は踏んでおります」

「いつそいまますぐ都を出てしまえば、あれのことも思い切れるのではないかと考えることもある」

「本気ですかな」

むろん本気であるはずがない。ここで長安を出ていけば、かつて嫋嫋に対して為したのと同じことの繰り返しだ。それはあつてはならない。

韋莊が黙っていると、

「兄貴はあれが心配でならない。他のことは考えられない。いまも会いたくてうずうずしておりますよ」

「そのようなことはない」

「強がらずともよいではありませんか。今日のところ都はまだ平穩。明日は

どうなるか知れません。とすれば、会えるうちにいっておくに如くはなしですな」

そのように言われると、急に尻に火がつく。

「時刻も悪くはなさそうですしな」

「まだ早すぎるだろう」

韋荘はあくまでもその気がなさそうに炭をいじり始める。

蘭は笑い、韋荘の手の横から炭を灰に埋めてしまう。

「では、いくとしますかな」

さっさと部屋を出る。

「いくとも何とも言っていないぞ」

韋荘はわざとゆっくり後に従う。

蘭は店を覗き、

「楊銀が帰ってくるまでの間、用心のため扉を閉めておいてくれ。妙な客は、入れずに追い返してよい」

若い者に指示し、莠の店も同じようにさせようと、中庭に出る。韋荘はまだもったいぶってゆっくりついていくと、お狐さまの祠に、一心に拝む阿枉の後ろ姿がある。その傍らに莠の妻の柳氏が寄り添う。

「またお出かけでございますか」

柳氏は池の水を隔てて声をかけてくる。

夏には水蓮が開いた池にもいまは何もなく、柳氏の声が寒々と伝わってくる。

韋荘は何かしら咎められたように感じる。柳氏が「また」と言ったのは、今日は朝にすでに出ているので、それに重ねての意味なのだろうが、またしてもあそこに行くのかと叱られたような気になる。

蘭は無頓着に、

「いつものところですか」

と、答える。

「左様でございますか」

韋莊はどこかに身を隠したくなる。今日に限って何もいかななくてもよいのにと、柳氏ならずとも思つて当然である。

「日暮れの太鼓までに戻れないようであれば、いつもの泊りとなりましょう。姉さん、戸締りを頼みます」

「都是普通ではないようでございますから格別の用心をいたしましょう」

柳氏は落ち着いた声である。韋莊にはそれがこたえる。

「姉さんがいらっしやれば万事安心ですな」

蘭の言う通りである。莊園にいたころの柳氏は夫婦で碁を打つ姿が何より印象的で、聡明だが夫に従う物静かな女性であると韋莊は感じていた。長安の店にきて、柳氏になかなか厳しいところがあるとわかった。楊銀夫婦も朧も柳氏には頭が上がらない。得てして増長しがちなところのある朧を、柳氏が静かな口調で理詰めで絞り上げているのを聞いたときには、韋莊はほとほと感心させられた。図体の大きな朧には、韋莊でもものを言いくいときがある。

「くれぐれもお気をつけくださいませ」

柳氏は軽く会釈する。

韋荘はそそくさと中庭を横切る。

柳氏は娘と息子にも厳しい。その一方で、陳婆やと阿枉には細やかな心遣いを見せる。兄の身を祈る阿枉の脇に寄り添っている姿をこのごろはとくによく見る。「守ってくれるものを、あの子は求めているのです」と、柳氏は言う。阿枉の小さな幸せを守ってやりたいと、虢州の狐潭で韋荘は思ったのだが、阿枉の求める存在に己はなっていない。

陳婆やは生まれながらに背中が大きく曲がり、動作は非常にゆっくりである。炊事にしても掃除にしても、人の倍の時間をかけても終わらない。初めてのことは、何度も繰り返して教えて、どうやら真似られるようになる。柳氏は根気よく教え、「お前がやってくれて本当に助かる」といつも褒める。楊銀の妻は陳婆やを頭から馬鹿にして、柳氏がいないと「何をぐずぐずやっているんだ。全く目障りだ」と罵る。陳婆やはどれほど邪慳にされても、黙々と自

分の仕事をするだけである。

莠の店に入ると、その陳婆やが棚を拭いていて、若い者が火のそばで居眠りしている。莠は相変わらず碁盤の前だ。

蘭は若い者を起こし、店を閉めておくよう言い付ける。莠の耳には何も入らぬようで、身動き一つしない。

「いま賊が入ってきて、いきなり首を切ったら、死んだことさえ気づかないでしょうな」

蘭は笑いながら外に出て、「周急不継富」の看板の下をくぐる。

冬の陽は少しばかり西空に回り、高い塀にはさまれた細い路地は早くも薄暗くなりつつある。

通りに出れば人の往来は多く、さすがに安邑坊でも繁華な場所である。黄巢が近づきつつあるのを知らなければ、都はいつも通り、陰りがあると気づきもしないだろう。

この界限には裕福な者が集まる。西隣の太遲先生は腕は心もとないが、興

に乗って足繁く金持ちの病家を回り、相当に稼ぎがいい。総白髪の齢に達していながら大層な艶福家で、何人もの若い妾を屋敷に住まわせていると噂される。

東隣は由緒ある家筋のお屋敷である。不幸にも夫が死に男の跡継ぎもないのだが、相当の蓄えがあるらしく、母と三人の娘が何不自由なく暮らしている。三姉妹はいずれも大変な才媛とか、縁談が数知れずあるようだ。親類縁者が立派な車を連ねて訪ねてくるのは、なかなかの壮観である。

道を挟んだ向かいには若い官人が住む。父は将来を囑望される人物であつたらしいが、妻子を都に残して北辺で客死した。息子が貢奉に受かり、中央勤めになったいま、家運がまた上向いてきた。役目柄、皇城に詰めていることが多く、今日も出ていつているのだろう、門が鎖されている。十五、六になる弟がいて、兄に続いて貢奉を受けるために勉学に励んでいる。時々韋荘に教わりに行くことがある。姉がいて、たいそう良い家柄との縁談が決まりそうだと、弟が胸を張って、しかし少し寂しそうに話す。

道を東にいけば高位高官の邸宅がいくつか並ぶ。安邑坊の治安を与える武大人は、お上から何か言い付かると、まずはこの通りに住む名士を訪ね、その足で羨のところに寄って碁を打つのが常である。

韋莊と蘭は路地から西に向かう。

長安の町は、東西南北に走る大路によって整然と分けられている。大路で四周を区切られる一つの区画が坊で、大路との境には高い土塀がそびえる。坊はぐるりを土塀で囲まれているのである。坊は中央で交差する十字路によって四つの区画に細分され、坊を囲む土塀と十字路が交差するところに門が設けられている。北門、南門、東門、西門の四つ門で、坊の内外が通じるのはこれらの門だけである。

韋莊と蘭は安邑坊の北門をくぐる。楼上に太鼓が置かれ、朝は太鼓の音とともに門が開かれ、夕は太鼓の音とともに門が閉じられる。夜間は坊に入ることも、坊から出ることも許されない。

北門を出ると東西に真っ直ぐに伸びる大通りである。恐ろしく広かつた

道で、坊内には見えにくい長安の高塔が空を貫くありさまが悠々と見渡せる。

大通りを挟んで北側は東市である。長安には東市と西市の二つの市がある。市は普通の坊と少し構造が異なっている。南北に走る二本の道と、東西に走る二本の道があり、坊内は井の字の形に九つの区画に分けられている。井の字の中央に役所が置かれ、市で行われる商取引を厳重に監視している。南北二本の道と、東西二本の道が土塀にぶつかると八箇所、門がある。二人は、大通りを斜めに横切って、東市の南西の門へと入る。

中は市独特の空気が、人の声、車馬の響き、それにここならではの匂い、全てが活気に溢れる。人の多さは安邑坊の比でなく、荷車がごとごとと土煙を上げて次々に行き来する。

左右に人を分けつつ、景気よく鈴を鳴らして、数頭の驢馬に、山のように荷を積み上げた車が向かいからくる。その勢いに道をよけると、驢馬を操っているのは楊銀父子である。

「お言い付けの通り、荷を受け取ってまいりました」

楊銀に、蘭は、

「帰ったら中の衣類を全部広げ、よく風を通してから、倉にしまってください」
大きな声で指示する。幾段にも積み上げられた衣装箱。朝から商談に出ていたのはこれを買取するためだったのか。これほどの衣類をどうするつもりなのか。

「かしこまりました」

楊銀は勢いよく答え、肋は妙ににやにやした顔で、北と南に別れる。

「あの荷は何なのだい」

「去るやんごとなき方が落ちぶれ、豪華な衣類がたくさん市に出ましてな。その値が驚くほどに安く、買っておいて損はないと。手放した人はさぞ悔しがっておりますような」

「いまどき買って、売れるあてがあるのかい」

「どうですか。黄巢の兵士が乗り込んできたら買ってくれますか。無理

ですか。買うまでもなく、奪えばすむのですからな」

「妙なものを買い込んだものだ。若い者に修繕させていた床下にあれをしま
うのかい。それも妙だな」

蘭は韋荘のすぐ近くに寄って声の調子を落とす、

「虫ならば衣装を食って生きられましようが、人はそうはいきません。あれ
は米食いの虫である俺たちの餌。昨日のうちに約束をしておいたのに、今朝に
なったら、値が倍です。それでも売り渋るのを、やっと手に入れました。も
ちろん、役人に見つかれば、全て没収ですな」

「そんなに値が上がっているのかい」

「表向きは変わりません。お上がうるさいですから。明日になれば、実際
の値はもつともっと跳ね上がりますよな」

「それで売って儲ける気なのか」

「いや、金を殖やしたところで、せいとも食えません。兄貴は都に留まるの
でしょう。ならば食う物がいらすな」

「そう言うことか」

「一つ気がかりなのは、あの荷が運び込まれるのを見て楊銀の女房がどう思うかですな。あれはあれで面白くない気分を貯めていましようからな。いまは姉さんに押さえつけられ、仕方なくおとなしくしていますが、油断のならぬ女です」

「そうなのかい」

「兄貴は人が好いから、裏までは見えないのでしような」

蘭は笑い、韋莊は考え込む。

蘭の言う通りか。見るのは表だけ、それも莠に言われたように早見えだ。町の様子がいつもと変わらぬと映るのは、己の目だからか。長安は尋常ならざる状況に陥りつつあって、その徴候が随所に現われているのかも知れない。蘭や楊銀たちにはそれが見えているのだ。

黄巢の大軍がすぐ近くに迫ってきているのだから、尋常であろうはずがない。それはわかっている。しかし、目の前に見えているのがこれまでと変わ

らないのなら、この先も当面はそのままであると思いたい。

お上がもしここで黄巢を迎え撃つと決めたなら、長い籠城戦になると容易に予想がつく。そのとき、都がどのようになり、己の身にどのようなことがふりかかってくるのか、それは想像できない。そうなってほしくないものは思い描きたくない。官軍が万一敗れ、大挙して賊が乱入してきたならばどうなるのか。黄巢によって屠られた町はいくつもあり、悲惨な話をたくさん聞く。長安でも類似のことがおけると言うことはできても、己の身に引き寄せてどのようなことになるのか考えられない。ここはこのままでなければいけないのである。

蘭はすでに手を打っている。この徒弟にこれまでに何度も助けられた。蘭がいなければ、貢挙に落第したあの年で己の人生は終わっていたかも知れない。いまここに蘭がいなければどうだろうか。尋常ならざる状況を迎えつつある都で、目の前の表面しか見えず、いかにも無力な己はどうして生きていけるのか。

あのとときだつて、蘭がいたならば、全く違つたことになつていたはずだ。それは夏の終わりだつた。黄巢が長江を渡り、蘭はもしもの事態に備えて虢州の莊園に歸つた。韋莊は長安で勉強を続けていた。上京してから宴席の誘いが時折はあつた。かねて交際のあつた人々が激励のために呼んでくれるのだ。名士と会つておくことは試験に有利に働くこともある。西周くん、東呉くん、と知り合つたのは、ごく気楽な宴席でのことであつたが、気詰まりな相手のときには、蘭に代理を頼むこともあつた。蘭が虢州に歸つていた間に、ある断り難い相手、しかし喜んで会いたくはない人からの誘いがあつた。気が進まないながらも顔を出して、その場に臨めば、如才なく振る舞うのが韋莊である。相手の嗜好に合う即興の詩を披露しようと思案していると、美しい声で歌っている数人の妓女のうちの一人の目が己に向けられていると意識された。目と目が会うと、どこことなく見覚えがあるような気がした。どこかの宴席で見かけたのだらうと思つた。女の眼差しに幾度か目をやるうちに、何だと合点した。くりくりとした目が阿枉に似ていて、それで見覚えがある

と思っただけのようだった。派手な化粧をした妓女と商家の小間使いとでは見かけはまるで違うが、飾りようのない瞳がそっくりなのである。それで腑に落ち、詩もできて、妓女のことには念頭から去った。

宴の終わりごろ、その妓女がふつとそばに寄ってきて、「お久しぶりでございます」と挨拶した。くりくりと動く目が阿枉とますますよく似ていて、どこで会ったのかを思い出してやれば、この女は喜ぶに違いないと思った。しかし、思い出せず、女に何か悪いような気がした。我知らず洗面をつくったのか、妓女の顔が曇り、「思い出してはいただけないのでしようか」と悲しげな声で、少しく身を寄せてきた。にわか胸の高まりを覚えた。その感覚が、揚州で嫋嫋に会ったときと同じだった。急いで払いのけようとした。妓女はほっと息をつき、「あれから十年でございませうか」と言った。息を呑んだ。「ひよっとして」。つぶやく己の唇が震えた。妓女の目が潤んだ。阿枉と似ているはずだ。狐潭で初めて阿枉を見たときにはそれが嫋嫋のところにいる桂児かと思ったのだ。「ああ、おまえはもしかしてあのときの桂児なのかい」。

妓女はうなずいた。人の目もあつてその日はそれ以上の話はできなかった。

揚州の桂児が長安では銀犁ぎんりと呼ばれていることはすぐにわかった。

翌日から勉強どころでなくなった。嫋嫋について何も聞けなかったのが心残り、蘭がいなかったために、二日間ほど悶々としてあげくに、やむなく楊銀に打ち明けた。楊銀はかつて色街で商売をしていたから、銀犁が平康坊（へいこうぼう）の北曲（ほっきょく）の女であるとすぐに突き止めた。「会えないものだろうか」ときまり悪そうに言う、楊銀は「居場所がよくありませんので」と顔をしかめた。

平康坊は東市の西隣の坊である。北に遊郭が集中し、長安最大の色里となっている。北曲、中曲、南曲の三つの横町がある。南曲は大きな妓館が並び、最上等の妓女が集まり、貴族、大官が主な客である。中曲は中程度の店が多く、官僚や裕福な商人の遊び場だ。北曲はほとんどが小店で、町人や貢奉の受験生など、さほど金のない連中が足を運ぶ。銀犁となった桂児が身を置くのはその北曲の仙水楼で、仙水楼を切り盛りする崔婆（さいばあ）はその界限で

は少しは名の知れた存在だと、楊銀は言った。「あれは煮えて焼いても食えない婆。他所ならまだしも、旦那さまのお留守に、よりによって崔婆のところへお坊ちやまをお連れなどしましたら、後でどんなに叱られますか」。崔婆が名うての因業婆で、女たちの扱いも酷いものだと言われ、ますます会わずにはいられない気持ちになり、楊銀を拝み倒した。蘭には絶対に内緒にしておくと約束し、「これ一度きりです」と、念を押す楊銀に従って、初めて仙水楼を訪れた。

それ以来、安邑坊から北曲へのこの道を何度辿ったことだろうか。銀犁と出会っていないければ、いまこうしていることもないだろう。

平康坊の東門をくぐると、心の内にはもはや銀犁のことしかない。銀犁だけが大切に、他のことはどうでもよい。黄巢がきて尋常ならざることがおこりそうだとこの予感もどこかに飛んでしまう。

平康坊でもこの東門のあたりは、厳しい門構えの屋敷が連なり、しんと静まり返っている。色里に近づくにつれて町の空気が変わり、昼でも艶かしい

「音曲がほのかに耳に響いてくる。いかにも格式を誇る大店が軒を連ねる南曲から、中程度の小粋な店が並ぶ中曲に入り、そして雑然とした北曲となる。

仙水楼はここらでは珍しく大きな妓楼だ。やり手の崔婆が、左右両隣の店を買って二倍、三倍と拡張した。ゆくゆくは中曲に移って、店の格上げを目論んでいる。崔婆も元は妓女で、さる生菓屋の旦那の後ろ盾があつて、いまでは妓楼の女主人におさまっている。

門前で水を撒いている腰の曲がった爺さんに、蘭が声をかける。爺さんが飛ぶように中に走る。男が三人ばかり出てきて、腰低く二人を中に案内する。

仙水楼にいる男はこの四人だけだ。

門のすぐ奥の小奇麗な部屋に通される。崔婆が太ったからだを左右に揺すりつつ、へこへここと出てくる。

「ようこそ、ようこそ、お越しくださいました」

くしやくしやな笑みをつくつて、同じことを何度も言う。男たちに指図して、火をおこさせたり、茶を持ってこさせたりする。

「今日はまた、今日はまた、早いお越しで、びっくりでございます。仕度がまだ何もできておらず、とんだ、とんだ失礼をばいたしております」

何度も詫びながらも、韋莊と蘭のつま先から冠までを一通り吟味する。二人ともそれなりに上等なものを身に付けている。妓楼通いが高じて銭がなくなる、着ているものからおかしくなる。

「よもや、よもや、あの子を置いてとは、わかつてはおりましたが、こうして、こうして、お顔を拝見できまして、もう、もう、心からほっとしました。あの子もさぞかし、さぞかし喜ぶことでございますよう」

崔婆は品なく大きく笑う。

「何かい、俺たちが他所にいつてしまわないかと心配でもしていたのかい」
「年を取りますと、何でしょうか、あれも心配、これも心配、もうもう、そんなことばかりでございます。そんなことばかりでございます。それに、あの子は、あの子は、若いのに、あたしに輪をかけての心配性。それは、それは、旦那さまのお越しが今日があつても、明日はないのかと、そんな心配は

かりでございませよ」

崔婆は首を振って蘭と韋莊を交互に見て、ひひひと笑う。

「私はいつだってくる」

韋莊は言う。

揚州においてはそうではなかったことがあった。それだけに、仙水楼にはいつでもこなければいけないとの思いが強い。こんな崔婆のところになければならない銀犁が可哀想で、足繁く通ってこない訳にはいかない。

「そうでございませとも、それでもございませとも。旦那さまはもうあの子に首つだけ。お越しにならないはずはないと、それはもう、それはもう、わかつてはおりますが、それでも、まあこんな御時勢でございませよう、心配するこの婆めを、どうぞどうぞ、怒らずにいてくださいませ」

「この御時勢とは、どんな御時勢だと思っているのですかな」

蘭が問うと、

「いいえ、いいえ、それはもう、それはもう、何でございませよ、噂でござ

いますから、確かなことはわかりませんので。この狭い狭い北曲のことつきりわからぬ婆でございますから、もうもう、一つの噂を聞いては心配し、別の噂を聞いては心配し、損な性分でございます」

意味なくよく笑う。この女が心配などするとは思えない。

蘭は茶をすすり、東の市は普段とあまり変わらないと、世間の様子を話す。

「やはり、そうでございましょう、そうでございましょう。ここも同じです。

何があるうとも、商売の道は変わるものではありません。旦那さまも御商売をなさっておられますから、よくおわかりでございましょう」

「おまえには及ばない。こんなことは経験のないこと、今度ばかりは心配ですな」

「まあ、まあ、左様でございますか」

崔婆は上体を妙な具合に縮めて蘭を下から伺い見る。

「黄巢がもしも長安に入ってきたら、おまえはどうするつもりかな。考えがあるのなら、聞かせてもらえないか。賢いおまえのことだ、教えてもらいた

「いものですか」

蘭はじつと崔婆の顔を見つめる。崔婆はにたりと笑い、からだをぴよんと伸ばし、手を叩き、

「この婆めがでございますか、考えがあるとお尋ねでございますか。左様でございますか。もちろんもちろん、この婆めも馬鹿ではあつても、何も考えないものではなく、心構えくらいはできております。ほんの心構えくらいはでございますが」

蘭は身を乗り出し、

「どんな心構えだい。教えてくれませんか」

「旦那さまにこの婆めがお教えするのございますか。どうしましょう。どうしましょう」

「もったいぶらずに、ぜひ聞かせてくれ。やはり、長安からは逃げた方がよいですか」

「逃げる、まさか、まさか、この婆めが逃げるものですか。ここから動いた

りなぞしません。動いたりなぞするものですか」

「ほう、逃げない。賊どもが都にどつとなだれ込んできたなら、恐ろしくて、逃げるしかないと思えますが」

「いやはや、いやはや、旦那さま、よく考えてみてください、よく。この婆めの商売は、いったい何でございましょうか」

蘭は部屋をぐるっと見回し、

「良家の子弟に立派な学問を教える場所ではないようですね」

「それだったらこの婆めは逃げております。賊が嫌うのは、忠だの孝だのを説く学問でありましょう。偉そうに昨日まで人に教えを垂れていた先生は、賊に真つ先に殺されましょう。賊には最も無用なものでしょうから。この婆めにも無用でございます」

崔婆が笑う。

「なるほど。おまえには教わることが多いな」

「いえいえ、この婆は何も知りません、何も知りません。知っているのは、

「世の男どもが一番にほしがるものは何かってことだけです。賊も男。ほしいのは同じでございます」

「何だいそれは」

崔婆は嘖き出し、

「旦那さまだってよくよく御存知ではございませんか。決まっていますでしょう、決まっていますでしょう。富と女。それ以外にあるものですか。富は皇城にたんまりございます。賊はそちらで富をたっぷり取ってきました。女はこの平康坊にございます。賊は皇城の富をそっくり持ってここにやってきました。くれましよう。そうなれば、かつてない大儲けでございます」

「ほほう、おまえは大した知恵者だな」

「そんなこともございませんですが、儲けの口がそこところがついて、それを逃がす婆ではございません。学問がおありの旦那さま方はよく御存知でございませうが、昔むかし、安祿山がなる賊が長安に攻め入ったのでございませう。そのときも、平康坊ばかりは変わらなかったとか。当然でござ

います。当然でございませうとも。それを聞いておりますから、この婆めは、賊がくるのを楽しみにしているのでもございませう。本當でございませう」

「さすが大したものですな。感心、感心」

蘭はやたらに陽気な声で崔婆を持ち上げる。

黙って聞くだけの韋莊は、崔婆の思うようにはいかないだろうと、心の内に思う。黄巢が入ってきたならば、長安は一変してしまおうだろう。この部屋がこのままでいるのも、あと何日だろうか。儲けられると考えている崔婆を愚かと思いつつ、長安の先行きを真剣に考えようとしていないのは己も同じだと苦く感じる。

「どうなのでございませうか、黄巢は、昔は塩を商い、貢奉には落第した苦勞人なのでございませう。大きな声では申せませんが、何の苦勞もなしに、何の苦勞もなしにお育ちになったお方よりはと言う者もございませう。そうであれば、案外、世の中はこれからよくなることもあるのではございませうか」

「崔婆の知恵には驚かされるばかりですな。兄貴、そう思いませんか」

「まあ、そうだな」

ことさらに赤くきらきら輝くこの部屋がこのままでいられるのもそう長いことではないだろう。空々しいばかりの艶やかさがその予感を強める。

馴染みとなったこの部屋に初めて案内されたときには、かなり臆するものがあった。崔婆のあくどさを楊銀からさんさん聞かされていた。出てくるとひどく愛想がよく、拍子抜けした。へこへこするのは万事金の力だ。「長年、平康坊でこの店を張ってまいりまして、かくも御立派な旦那さまをお迎えでき、何と申しましようか、もうもう、周りの店に対して、鼻高々でございます。こちらからお金を御用意してお招きしてもお越しいただけませんものを、こうしてわざわざお御足をお運びいただけますとは、まあまあ、有難い限りでございます」。こんな調子で崔婆は大喜びしてみせ、仙水楼で一番上等な離れで、銀犁と引き合わせてくれたのだった。

小女がやってきて、奥の仕度がすんだと告げる。今日もその離れへと案内

される。

「俺はちよいと用があつて、後でまたきますかな」

蘭は卓の上の手のついていないままの菓子をつかみ、やにわに外に出ていく。

韋荘は狭い中庭の平石を踏んで離れの小門をくぐる。部屋の内は十分に暖められている。

「相思、相思」

いつもの声が迎える。金の糸で編まれた籠の中の鸚鵡。崔婆の何よりの自慢だ。この一羽で仙水楼全体と同じかそれ以上の価値があり、北曲ではむろんこと、南曲のよほどの妓楼にもこれほどの鸚鵡はいない。

鸚鵡の声を聞けば、外とここは別の世界である。

奥より出てきた女がいつもの席へと案内する。崔婆が後ろについてきて卓の隅に斜めに座る。崔婆はいてくれなくてよいのだが、これもいつもの段取りで仕方がない。酒の道具が並べられる。

奥に百花を描いた衝立がある。その前に琴と鏡が置かれる。鏡は裏に鸞の透かし彫りのある手のこんだ品で、琴は軟らかな音色の逸品だ。

しばらくして、「相思、相思」とまた鸚鵡が鳴き、銀犁が入ってきて、髪飾りの歩揺の発する金色の光が韋荘の目に飛び込む。大きく結った髻はいかにも重そうで、それに耐えかねるかのような長く白い首を揺らしつつ歩む。その衣装には韋荘の目は向かず、瞳ばかりを見る。

銀犁は顔を斜めに下げ、軽く会釈をして歩み入り、韋荘の隣の席につく。ここで目と目が合つて、銀犁は微笑む。

銀犁とまたこうして会えたことがいかにも不思議なことのように思える。客と妓女の型どおりの挨拶がなされ、盃が交わされる。

しばらくの間は崔婆を入れてのどうでもよい話である。料理が運ばれてきて、少しだけ箸を付けると、崔婆に促されて銀犁が琴を奏でる。

銀犁の細い指が弦に触れ、手の動きに応じて音が出る。

どうしてこの若い女と深い仲となつたのか、またも不思議なことと思えて

くる。

揚州にいた桂児ともう一度会いたいと、初めて崔婆の妓楼を訪れたとき、これは通常の遊びではなく話がしたいだけなのだ、楊銀にあらかじめ伝えさせていた。酒と料理の用意がなされたところで、崔婆は席をはずした。韋莊は待ち兼ねたように、揚州を発った後の嫋嫋について尋ねた。桂児は口を開こうとしてまず涙をこぼした。

そのときの銀犁はまだ嫋嫋の桂児だった。いま目の前にいる銀犁は桂児ではない。己の命に代えても思う一人の銀犁である。

銀犁は短い曲を弾き終わると、静かに卓に戻って韋莊に酒を勧める。しばらくまた崔婆を挟んで話をしていると、女たちが胡弓や笛を持って入ってくる。銀犁は内掛けを脱ぎ、今度は舞いを披露する。韋莊は、銀犁の動きを見ず、ひたすら瞳ばかりを追う。くるりと向こうに回って、瞳がこちらにまた向き直るたびに、韋莊の胸が鳴る。

このような思いで銀犁を見るようになるとは考えもしなかった。桂児に会

ったのは、あくまでも嫋嫋のことを聞かせてもらうためだった。最初の日、桂児は涙をおさめると、韋荘が揚州を去ってからのことをぽつりぽつりと話してくれた。嫋嫋は鬱々とした日々を送り、食事もほとんど摂れないようになり、次第に痩せ細り、起きている力も失せ、伏せてばかりとなった。店の主人に邪慳にされ、暗い小さな裏部屋に押し込められた。じめじめとして息も詰まる黴臭さのなか、桂児一人に見守られて息を引き取った。「さぞかし私を恨んでいただろう」。韋荘は嘆息し、「そなたも、さぞ私を恨んできただろう」と、付け加えた。

桂児は泣いて赤くなつた目で韋荘を直視した。くりくりとした目に非常に厳しいものを感じた。「違います。姐さんは、そう思われるのを最も恐れていました。何も恨んでないんですけど」「そのようなことがあるのか」「いえ、何も恨んでいない思っただけでもお伝えできたらと、そう繰り返しておしやっています」「それはどういふことなんだい」。韋荘には理解しかねることだった。桂児は韋荘をじつと見つめ、「おわかりにならないのでしょうか」

と、いかにも落胆したように言った。

韋莊はその瞬間に、己ほど酷い男はこの世にいないと悟った。揚州を後にしてからの日々が思い出された。揚州を離れば自ずと忘れてしまうだろうと考えていた。そうはならず、莊園に帰ってからも、嫋嫋を思つては呵責の念にかられた。嫋嫋の死を伝え聞き、己の身勝手さに絶望し、恋する女を自ら捨てるような男に人間らしい情など似合わぬと、非情の男になる決心をした。それは貫けず、何もかも間違つてしまった己の生き方を正すため、天下の民に身を捧げるしかないと貢拳を受けることにした。それで都に出てきた。そして桂兎と出会った。この再会は偶然なのか。死んだ嫋嫋の意志がもしかして働いているのか。恨んでいないとの思いを伝えるために、桂兎と己をここに引き合わせたのか。そうまで思う嫋嫋を捨てたとは、どれほど酷い男なのか。

韋莊は桂兎の前で居たたまれなくなり、仙水楼を早々に立ち去った。この上は、やはり貢拳に及第し、この許し難い身を世のために使うしかないと考え

えた。もしもまた桂児と会うことがあるとすれば、貢挙の合格を報告するときであろうかと思つた。それがなぜかいまではこのような事になつてゐる。銀犁は舞いをおさめる。会釈をする銀犁の瞳を見て、この瞳がなかつたら、この部屋にこうして座つてゐることはなかつただらうと思つた。

仙水楼の最初の訪問から帰り、勉強の日々に戻つた。しかし、一日、二日と経つうちに、書物を開くと、どうしたことか、桂児の瞳が目の前に浮かんだ。涙で潤うその瞳が、頭から離れようとしなかつた。三日ほどそのようなことが続いて、楊銀にもう一度だけ仙水楼に連れていつてほしいと頼んだ。「一度だけと申したはずです」。楊銀は拒絶した。それを何度も頼み、「余つた分はそつくりおまえにやるから」とかなりの額の銀を渡した。「これで本當に終わりですぞ」。楊銀は渋い顔ながら、仙水楼まで同道してくれた。

桂児にまた会いにきたのは、己は不実なだけの男ではなく、嫋嫋を愛する心をきちんと持つていたと、わかつてもらいたいからだ、韋莊は考へていた。ところが、実際に桂児に会つてみると、何のためにきたのかがわからな

くなつた。嫋嫋を捨てた酷い男が桂児の前にいて、昔のことをあれこれ言い訳して何になるのか、とんでもない恥ずかしいことであると感じられ、くるべきではなかったと、ろくに話もしないうちにそそくさと帰らざるを得なかつた。それが余りに早かつたので、楊銀は怪訝な顔で「旦那さま方のなさることはさっぱりわかりません」と言つた。

それからまた三日も経つと、どうにも我慢できぬまでに桂児に会いたくなつた。すぐに帰つたのは桂児の気を悪くさせ、ひどく申し訳ないことだつたと思へた。その詫びを言い、ぜひともいかなければと、楊銀に頼むと、呆れ切つた顔で「どういふことなのでしようか、さっぱりわかりません」「これで本当に最後だ」二度が三度になつて、終わりになるのでしようか。楊銀は少し脅かすように言つた。韋莊もそう感じた。

再三の訪れを雀婆は喜び、銀犁は驚いた。韋莊は桂児に謝ると、下手な言い訳はせず、揚州を後にしてから今日までのことを、何も隠さず話した。韋莊の胸の内にだけあつて、蘭にさえ言っていないことをみな話した。どうし

てここまで話すのか、理由はよくわからなかったが、話し終わると、心がいままでになく軽くなった。「私はこんな男だ。嫋嫋に愛される資格など、初めからなかったんだ」。敢えて自虐的ではなく、素直な気持ちでそのように言った。銀犁は韋荘の顔をしばらく見つめ、「姐さんの気持ちがよくわかったような気がします」と、言った。

これですっかり気が済み、合格まで会うことは本当にあるまいと思った。しかし、そうはならなかった。二日、三日と経つと、銀犁に会いたい思いが無性に募った。銀犁の瞳が目の前から離れず、とりわけ困ったのは、阿枉を見るたびに胸が高鳴ってしまうことだった。似た瞳が近くにあつては、忘れようとしたところで忘れるのは不可能である。

そうこうするうちに蘭が帰ってきた。韋荘の様子がおかしいことは、とつとくに柳氏に気づかれています。「姉さんが心配していますぞ。俺がいないと、兄貴はからきし駄目になってしまうのですかな」。蘭に問いただされ、隠すこともできず白状した。蘭は大笑いし、「ちよつと目を離した隙にこれですからな。

楊銀の奴、懐をだいぶ温めたのしような」「私が無理に頼んだのだ」「あれを楊爺と同じと思つてはいけませんな。小心者で、俺や姉さんの言うことはへいへい聞いていますが、あれでどうして小ずるいところがありませんからな」「叱らないでやってくれ。少しくらい懐に入れても、私のためにしてくれただから」「それにしても、桂児とは不思議な巡り合わせでしたな。数奇な運命の導きで、兄貴が惚れてしまったと言うことですか」「いや、惚れたとか言うのではない。ただ話ができさえすればそれで気がおさまるのだ」「俺には無縁のことですが、それを惚れたと世間では言うのでしょうな。よりによつて崔婆の店とは、高くつきそうすな。兄貴が莊園からもつてきた銀を全部取られかねませんな。貢奉に合格し、偉くなつて取り戻していただきますか。会いたいのを無理に我慢して、勉強に手がつかないのも困りますから、いっしかありませんでしょうな」と、蘭は同行してくれた。崔婆はそれまで以上にほくほく顔だった。蘭は商売柄、平康坊でも少々名を知られている。

銀犁と会つて、盃を少し交わし、話をすればそれで本当に気がすんだ。昼

間の短い時間でさっと引き上げるだけのことが何度か続いた。

そのうちに、話すだけでなくなつて、新たな楽しみが付け加わつた。一緒に歌うのである。銀犁は見かけに似ず声が少し太くて高音はあまり得意でない。普通より低く目に弦を調整する。韋荘は弟の藹ほどではないにしても、良く暢る声で、高音も出せるので、銀犁の声とうまく合う。それで何とはなしに遊里ではやる曲を歌ううちに、詞が卑俗で、しかも音律に合わない部分も多いと感じた。歌いながら言葉を入れ代えたりし、次第に高じて全く新しい詞をつくつてみるようにもなつた。韋荘の詞で銀犁が歌うと、これが元と同じ曲であるとは思えぬほどに、すばらしいものになつた。

ある日、蘭が別の用事で妓楼を離れ、それが思いがけず長くかかったのだろうか、韋荘と銀犁は歌うのに夢中になつている間に、平康坊に暮れの太鼓が鳴り渡つた。銀犁が琴を止めると、太鼓の余韻が夕空に消え、「今日はもうお帰りにはなれませんね」「そのようだね。ならば時を気にせずにつくり話ができよう」。韋荘は銀犁と向かい合わせになり、いつしか、生まれてからの

己の一生を話し出していた。銀犁に己のこと全てを知ってもらいたい思いからだった。貢奉に落ちたところに至って、崔婆が灯を入れにきて、「酒と料理を追加しようか」と尋ねた。「今日は銀犁とずっとここにいてもよいのだろう」「ええ、ええ、それはもちろんでございませうとも。今日は幸いと、銀ちやんの体はあいています。旦那さまと、どうぞどうぞ、ずっと御一緒で」。崔婆はひどく嬉しそうに笑った。

韋莊は、続けて揚州の旅までを話し終わり、「私のことはこれくらいにして、今度は、どうだい、おまえのことを聞かせてくれないかい」。銀犁はくりくりと眼を動かし、「申し上げるようなことなどございませぬ。それに、もしも申し上げましたなら、旦那さまに嫌われてしまいます」「私のことを聞いて、おまえは嫌いになったのかい」「いえ、そのようなことはございませぬ」「だったら、同じだ。おまえのことを聞いて、嫌いになるはずがないだろう」「どんなに醜い人生だとしてもでしょうか」「境遇がどれほど酷いものであっても、それは人の醜さとは違う。私は、いま話したように、情けない心の持ち主だ。

私と違っておまえが美しい心をもっていることは、この私がよく知っている」
「いいえ、旦那さまにそのように思っていたくような女ではありません」。
うなだれる銀犁の腕を取ると、銀犁は韋荘の胸に顔を寄せた。白く細い項が
韋荘の目のすぐそこにあつた。そのまま時を過ぎていると、崔婆がやつて
きて、酒や料理が運ばれ、女たちがきて歌や踊りとなり、また静かに二人だ
けとなったのは、帷の垂れた床の上であつた。

一度そのような夜を過ぎしてしまえば、昼間だけの遊びには戻れない。黄
巢がくるかも知れないまでも、柳氏の視線に後ろめたさを感じつつも、こ
こにこないではいられないのである。

「相思、相思」

鸚鵡が鳴いて、いつしか部屋には銀犁と韋荘だけである。

銀犁は琴をぼろりぼろりと鳴らす。韋荘は傍らで目を閉じて聞いている。
途切れ途切れだった音がひと連なりになって、曲のかたちをつくっていく。

「菩薩蛮」(ほさつばん)という題の曲だ。

音に誘われ、脳裏に詞が浮かんでくる。曲に詞を付けるのは、いまでは造作もない。詩を書くより遙かにたやすい。詩はかなりの作意を働かせる必要があるが、詞は心の趣くに任せればよい。曲が泣くように心を誘えば泣けばよく、笑うように誘えば笑えばよい。それで詞となる。

一度「菩薩蛮」を弾き、初めに戻って繰り返す。韋荘は目を開き、できたばかりの詞を歌う。

人人尽説江南好

人は江南のすばらしさをたたえる

遊人只合江南老

漂泊の人は江南に老いるのがよい。

春水碧於天

春の川は空よりも青く

画船聽雨眠

船は水声の中に眠る。

江南の春を歌い、韋荘は心に揚州を思う。「遊人」とは己のことか。

かつての揚州の旅、あのときにあのまま揚州に留まり、あそこで老い、あそこで死ぬべきであったか。

「菩薩蛮」は前後二節に分かれる。間奏を入れて、銀犁は後段を奏でる。

炉辺人似月 炉辺にほのかに照らされる人は月に似て

皓腕凝双雪 雪のような白い腕。

未老莫還鄉 若いうちは故郷に帰らなくてよい

還鄉須斷腸 帰れば悲しみだけがあるのだから。

故郷に帰れば悲しみがある。それはいかなる意味か。曲に誘われるがままに歌った己の詞の意味を考える。

銀犁は手を止め、首を傾ける。

揚州に留まっていたならば、その後はどうなっていたか。虢州での日々はなかった。嫋嫋はいまも生きていようか。そうあるべきだったか。

「もう一つできそうだ。もう一回弾いてくれないかい」

銀犁は、はっと顔を上げ、わずかにうなずき、弦に手を置く。

如今却憶江南樂 いまでは江南の樂しさがかえって想われ

韋莊が歌い出すと、銀犁は強く弦をはじき、手を激しく置いて音を止める。

「どうかしたのかい」

頭には次に続く詞の言葉があり、いま歌わなければ消えてしまいそうだ。

「もう止めにいたしましょう」

銀犁は琴を横に押しやる。

「どうしたんだい。何か気に障ったのかい」

「いえ、何も」

「そうなのかい、それならよいのだが。今日は、いつもとどこか違ってないかい。琴の音も、心なしか重く聞こえるようだ」

「そのようなことはありません」

銀犁は言い切ると、ふっと息を漏らして口をつぐむ。

「何か言いたいことがあるのなら、言っておくれ」

「いえ、何もございません」

「何か思っていることがあるのだろうか」

「いえ、ただ」

「ただ、何なのだい」

「変なことを申しても気を悪くなさらないでください」

「おまえが言ったことで気を悪くしたことがこれまでに一度だってあったかい」

「いいえ、ですが今日は」

「言ってくれないのかい」

「変に気を回さないでいただきたいのですが、いまの詞を聞いておりました、旦那さまはいまでも姐さんのことを想っておられるのだと、改めて思いまして、それだけなのでございます」

「あれに悪いことをした、すまないと思う心は消えない。あれのことがことさらに想えてくることがある。いまがそうだったのだろうね。だけど、おまえが目の前にいながら、あれのことばかりを想って、歌ったりしてはいけないね。それで怒ったのかい」

「いいえ、そのようなことは決してありません」

「しかし、どうも変ではないかい」

銀犁は顔を横に向けて立ち、そのまま卓の方に移動して椅子に腰掛ける。韋荘はしばらくその様子を見て、静かに後を追って隣に腰掛ける。

「泣いているのではないかい」

「そんなことはありません」

ことさらに横を向く銀犁の手を取る。

「やっぱり泣いているではないか。嫋嫋を想ってばかりなので、悲しくなつたのかい」

「いいえ違うのです。姐さんの辛さがいまになってわかるような気がしまし
て」

「それはみな私のせいだ」

「違います。いまは、はっきりとわかります。姐さんはお別れしなければならなかつたのです」

「何を言うのかい」

「私も同じようにしなければなりません」

「どうして」

「今日はもうお越しにならないと思っていました」

「なぜだい。おまえのところにこないはずがないだろう」

「今日は今日でも、明日はきつと」

「そんなことはない。私はいつだってくる」

韋荘は手に力を入れ銀犁を引き寄せる。銀犁は体を硬くする。

「お願いがあります」

「何だい」

銀犁は韋荘の手を離し、すっと立ち上がり、

「もうここにはお越しにならないでいただきたいのです」

韋荘は見上げる。銀犁は背を向ける。

「いま、何と言ったんだい」

銀犁は答えない。

「いま歌った詞が、不吉に聞こえたのかい。いつも言っているだろう、私は

同じ間違いは決してしないと。また会いにくると言って、その約束を破ったことがこれまでにあったかい。今日もこうしてきている。この次だってまたきつとくる。そうであるのを、おまえはよく知っているではないか」

「ええ、わかっております」

「だったら、どうして」

「旦那さまにはとてもよくしていただいています。感謝の言葉もありません。それだからこそ」

銀犁はゆらゆらと揺れるように琴の場所へと戻り、ぽろんと、音を出す。

人尽説江南好　人は江南のすばらしさをたたえる

韋荘の先ほどの詞をそのまま細く歌う。

「もうすぐあちらは春」

「そうだね」

「この都には、春がやってくるのでしょいか」

「こないはずがないだろう」

「そうでしょうか」

「冬が終われば必ず春がくる」

「旦那さまはどうして江南を歌われたのでございますか」

「ふと口をついて出たまで。昔を思っただけの年齢になったのだろう」

韋荘は微かに笑う。

「私は、許されないような気がしてならないのでございます」

「許されないとは」

「嫋嫋姐さんでさえ恵まれませんでしたのに」

「何のことだい」

「全てはきつと夢なのでございましょう」

「夢などではない」

韋荘は歩み、銀犁の前に立ち、琴の上に置かれた両腕を取り、銀犁の顔を己の方へと向ける。銀犁は目を伏せて見上げようとしない。

「これが夢であろうか。私はここにいて、これほどまでにおまえを大切に思

っているではないか」

「いいえ、これが夢でないはずがありません」

「夢ではない」

韋莊は銀犁の頬に手を当て、顔を自分に向けさせる。

銀犁は目を閉じ、

「夢でないのが残念でございます」

「今日に限っていったいどうしたんだい。言っていることがさっぱりわからない」

韋莊の腕がだらりと垂れ下がる。

「私もそうでございます」

銀犁は涙声になっている。

「どうしたことなんだ」

韋莊は途方に暮れる。

「これが夢であるのなら、覚めたときには、この苦しさは全て終わっていま

しようか」

銀犁は低く搾り出すように言う。

「もしかして、おまえは苦しんでいるのかい。何がおまえを苦しめているのかい。この私か」

「いいえ、旦那さまではありません。これほどまでによくしていただいて、それこそ夢のようでございます」

「夢なら夢でよい。おまえと一緒に、この夢のままにずっといようではないか」

「私たちがたとえ夢の内においても、世間はそうではありません」

「わからないことばかり言う」

銀犁は深くうなだれ、何も答えない。

韋荘は部屋を歩み、銀犁が言った言葉を反芻する。今日だけではなく、銀犁と会った最初の日へと戻って回想し、二人の間にあつたことを順に思い起こしていく。二日前の朝に「またくるから」と言って別れ、その続きのまま

の今日があると思っていたが、何がどう変ってしまったのだろうか。

考えあぐね、ふと、銀犁を見て、突き上げるような衝動に駆られる。この美の全てを己のものにしたい。歩み寄り、銀犁を抱こうとすると、銀犁はすわりと身を床に落とし、膝をついて、

「旦那さま、お願いがございます」

叫ぶように言う。韋莊の激情は急速に洩む。

「ぜひきいていただきたいお願いでございます」

「おまえの願いならどんなことでもきく。いままでもそうだったし、これからもそうだ」

「まことでございますでしょうか」

銀犁は顔を上げる。

「もちろんだ」

韋莊は無理に微笑む。

銀犁は視線を落とし、そして、瞳を真直ぐに向ける。

「では、申し上げます。旦那さま、どうぞお願いでございます、この仙水楼には、今日を限りにもうお越しにならないでいただきたいのです。それがこの私のお願いでございます」

銀犁は言い終わると床に顔を沈める。

その背中を眺め、耳にいまの言葉を繰り返す。

かすれた声で、

「さつきも、そのようなことを言ったね。それをまた言うのかい。どうしてなんだい」

韋荘の間に、銀犁は伏したまま動かない。

遠く夕暮れの太鼓が鳴り出す。

「相思、相思」

鸚鵡が鳴く。

卓の前に座る。置かれたままの盃を取ろうとして止め、肘をつき、目を閉じ、しばし黙考する。

銀犁はなぜあのようなことを言ったのか。すでにわかっている。自分のために都に残るようなことはしてくれるなど言っているのだ。

嫋嫋に対して犯した過ちは二度と繰り返さない。抱柱の信で溺れ死んでも構わない。だから今日もここにきた。

銀犁の願いはきくと言ったが、こればかりは別だ。銀犁のために都に残るのは、銀犁を喜ばせもし、苦しませもする。

銀犁の願いを聞きつつ、銀犁と別れずにすむ手段が一つだけある。銀犁とともにここを出て一緒に都から逃げることだ。銀犁を請け出すか、強奪するか、とにかく銀犁をここから連れ出せば、銀犁の願いの通りにこの仙水楼には二度とこないですむ。

さすがに強奪ができないから、金で請け出すか。がめつい崔婆だ、法外な値をふっかけてくるに違いない。こここのところの通い詰め、蘭が予言した通りに、莊園からもつてきた銀子は残りわずかだ。蘭に頼るしかない。いつも蘭に助けてもらって、こんなことまでは頼み難いが、それ以外に手はない。

心を決めつつあると、

「まあまあ、真っ暗じゃないの。どうしたんだい。灯もつけないで、気がきかないにもほどがある。それとも、気がききすぎて、もうよいことをお始めなのかい」

崔婆の品のない笑い声が響いて、開けた扉から明かりが差し込んでくる。

「いや、ちよつと、酒に酔って、まどろんでいただけだ」

銀犁は身を翻して、崔婆の脇を抜け、

「化粧を直してまいります」

と、出て行く。

崔婆はしたり顔でうなづく。

「何かい、蘭くんは戻ってきたかい」

「まだでございませう。今日はどちらなのでございませうか。おつけお戻りになるとは思いますが、こちらは、お食事の御用意をしてよろしいでしょうか」

「そうだな、いつも通りにしてくれ」

今夜も泊まることになった。初めからそのつもりではなかったのだが、やはりこうなった。

店ではどう思っているだろう。家の者たちの顔が浮かぶ。他の日でも気まぐずいのに、黄巢が日を置かずして入ってくると噂されているときにも、妓女遊びにうつつを抜かしているとは。明日はどのような顔をして帰ればいいのか。そのときに、銀犁を伴っていたら、皆はどう思うか。柳氏に何と言えはよいのか。十六歳と十四歳になる柳氏の娘と息子は、この伯父をどのような目で見るだろうか。

崔婆が部屋に灯をともし。それがことの他眩しい。

遠く音がある。

冬の真夜中、凍てついた空気に、遙かな音が聞こえてくる。車馬が行き来し

ているのか。あるいは黄巢軍が都に迫りつつあるのか。

韋莊は先ほどから目を覚まし、音に注意を向けている。

衾の隣は銀犁だ。あれから何もなかったかのようにいつも通りの時を過ごした。銀犁と寄り添いしばしまどろむうちに、ふっと、外にあるこの音に気づいた。

体の内にあつた悦楽の余韻はすでにおさまり、代わって心の底に沈んでいたものが浮かび上がる。「私たちは夢の内においても、世間はそうではありません」。昨夜は銀犁と結ぶ最後の夢であつたのか。またその夢に戻り、その夢のままに終わってしまうことはできないのか。銀犁と抱き合つたまま永久に別れずにいたい。

何も思わずにすむ逸楽の時に戻りたい衝動に襲われ、不意に、莊園が思われてくる。あそこはどうか。黄巢軍は虢州を踏みにじたのか。叔父や弟や楊爺はどうか。薛未亡人は、息子の純は。あそこはかけがえのない場所だ。二十年の昔、貢挙に落ちたとき、この連中がいるから貢挙を受け

ねばならないのだと、莊園で生きなければならぬのを恨めしく思った。傲慢で浅はかな考えだった。莊園があるから己がいる。莊園の人々のために生きられるのを幸せと思うべきだ。

莊園の人々を思えば、己はここで死んではならない。莊園に帰りたい。しかし、そうではあっても、傍らに眠る銀犁のこの愛おしさはどうしたものか。銀犁を捨てては、長安を出て、莊園に帰ることができない。銀犁をここから連れて出るしかない。

南山で決意したとき、長安にきて、まさかこのようなことがあるとは思ってもみなかった。嫋嫋が引き寄せたのか。そもそも南山での決意は、銀犁との出会いを生むためのものだったのか。むろんそのようなことはない。

遠くの音が耳を離れない。そつと身を起こす。

「お気づきでございましたか」

眠っていたはずの銀犁が言う。

淡い光に、衾の鴛鴦の模様がほんのり浮かび、銀犁の白い顔が出ている。

「起こしてしまったようだな」

「いいえ、前から目が覚めておりました」

韋荘は衾を出る。

「ちよつと小用をすませてくる」

「外で何かおこっているのではございませんでしょうか」

「いや、何でもないだろう」

銀犁の崩れた鬚に手を触れる。この女のためならとの強い思いが胸を衝く。するりと滑り降り、足元よりすつと寒さが上る。履物をつっかけ、衣服を整え、上着をかぶる。翡翠の刺繍した絹の帷の向こうで、油が微かな音を立てて燃える。

戸を開けて外に出る。風はないが、空は真黒に晴れ上がり、星がぎらぎらと輝く。凍りつくように冷え込んでいる。表に立ち、音は聞き取りやすくなつたが、初めに気づいたときと比べると、小さく微かになっている。馬や車がどこか遠くに去っていったのだろうか。

母屋より漏れるわずかな明かりを頼りに、庭の端にある厠に立ち寄り、蘭がいつも泊まる部屋之窗をこつこつと叩く。返事はない。眠っているのか、それとも出たまま帰ってきていないのか。

部屋に戻ると、銀犁が起きて榻に腰掛けている。

「外はいかがでございましたか」

「何でもないようだ。音はほとんど聞こえなくなった」

「お帰りになりますか」

「まだ夜明けには間がある。それとも何かい、こんなに早くから追いつきつたりなにかい」

韋荘は笑いながら言う。

銀犁は真顔で、

「どうぞ、私のことはこれっきりお忘れになってください」

韋荘は体をぶるつと震わせる。

「何を言い出すんだい」

「昨日、お願い申し上げた通りでございます」

「だが、それは」

「私の願いは何でも聞いてくださるとおっしゃいました。私のただ一つの望みを申したのでございます」

銀犁は妥協を許さぬ声である。

韋荘は黙然と腕を組み、榻の前を右に左に歩む。

身請けして連れて帰ると言っただけのものか。そう言えば、銀犁を喜ばせられるだろう。だが、いくら金がいるのか。蘭にはまだ相談していない。口にして、銀犁に期待だけさせて駄目だったらどうなるか。

韋荘は翡翠の刺繍の帷に手を掛け、脇に押しやる。灯の火が目直接入る。

「さあ、ここに立ってごらん」

銀犁を手招きする。銀犁は素直に応じる。

二人は並んで立つ。影が床に落ちる。

「聞いたことがあるだろう、暁の影には、人の吉凶が現れる。おまえと私の

「影を、二人して見ようではないか」

韋荘は影を指差す。

「よく見て御覧。人には九つの影がある。九つの濃淡と輪郭によって吉凶がわかる。濃いのは吉で、薄いのは凶だ」

二人の寄り添う影は深くて濃いと韋荘は見る。

銀犁は少し身を離し、

「思った通りでございます。私のは、ほらあのように淡く微かでございます」

「何を言う。二つとも同じだ」

「いいえ、違います。よく御覧になってください。旦那さまは濃く、私は淡い。こんなにも違います」

「違わくない」

韋荘は銀犁の手を引き、影を一つにする。

「ほら、少しも変らないだろう」

「いいえ、違います」

銀犁は韋莊の胸を押し、二つの影を引き離す。

「私はつまらない女でございます。嫋嫋姐さんとは違うのです」

「どうして嫋嫋のことを言う」

「私には許されぬことでございますから」

「何を言っているのだ」

韋莊はまた銀犁を抱き寄せようとする。銀犁は腕を払い、背を向ける。

「どうぞお帰りください」

「本気でこの寒空に追い返すのか」

「蘭さまがお待ちにございます」

「蘭くんはこの家にはおらぬぞ」

銀犁の背中から抱きつこうとすると、こつこつと窓が叩かれる。

「さあ、お帰りなさいませ」

銀犁は振り返り、肩で韋莊の胸を押し。

「どうして、そうまで帰そうとするのか。なぜなんだい」

「それしかできないからです。どうか、ここにはもうお越しにならないでください。私のたった一つの願いでございます」

韋荘の体の力が抜け、銀犁に押されるがままに扉の前にまできてしまう。

「これで、お別れにございます」

「いや、そうではない。必ず、また会う。おまえと私に別れなどはない」

「ありがとうございます」

銀犁は深々と頭を下げる。

「礼など言わない。必ずまた会うのだから」

銀犁は笑みを見せず、泣きもせず、戸を開ける。何か言おうとする前に、外に押し出される。己の身がすでに部屋の外にあるのを知って、銀犁とここで別れてはならぬと、扉に手をかける。銀犁は信じられない力で扉を閉じる。

「待ってくれ」

扉を開けようとしつつ、銀犁を抱えてでも連れて仙水楼を出るしかないと思う。

扉は堅く鎖される。

「開けてくれ」

がたがたと扉を引く。

「おいきください」

銀犁が言う。

その声の厳しさに、立ち竦む。

「わかった。そなたの願いをきいて、いまはいこう。しかし、必ず、おまえとはまた会う」

中からは何の反応もない。

両肩に、蘭の手が置かれる。

「では、いきますかな」

振り返り、銀犁の身請けを蘭に頼もうと思う。だが、暗がりの中でも、蘭がいつにない厳しい顔をしているのが知れる。

「いくしかないのかい」

「そう言うと、不意に倒れそうになり、蘭が支える。

「しつかりと聞いていただきましょう。いましがた、お上が逃げていかれました」

韋莊は己の足で立ち、

「先ほどの音がそうだったのかい」

「皇帝がいなくなつたとわかれば、都は大混乱となりましょう。とにかく店へと早く帰っていただきましょう」

「そうか」

扉を見返る。

「銀犁を連れたいのでしような」

蘭の言葉に、「そうだ」と言いたいところを、

「それはあの女の望むところではないようだ」

「そうですかな」

扉へと手を伸ばしかけ、

「いや、いこう」

と、思い切る。

「開門まではそれほど間がないですか。町が騒がしくなる前に店に戻れるとよいのですが」

「長安はどうなっていくのかい」

「わかりませんな。ともかく、風任せで、なるようにやってみるしかないでしょうな」

「そなたに任せよう」

この従弟にいつものように助けられるしかない。

中庭を突っ切り、母屋の戸をがたがたと開ける。崔婆が目を擦りながら出てくる。

「夜中に、こんな夜中に、何の騒ぎでございますか」

蘭が銀子を出す。崔婆の目がぱっちり開く。

「随分と世話になったな」

「まあまあ、こんなにたくさん。どうしたのでございますか。頂戴してよろしいのでございましょうか」

「いらなければ返してくれていいぞ」

「いえいえ、有難いことでございます。有難いことでございます」

崔婆はすっかりしまい込む。

「賊どもが入ってきたら、おまえが言っていたように、ここにはもつともつと銀がころがり込んでくるのだろう。思う存分儲けるがいい」

崔婆はにやりと笑う。

「旦那さまも、そこは商人でございましょう。よろしくおやんなさいまし」

「ああ、そのつもりだ。達者でな」

韋荘は何も言わずに蘭とともに仙水楼の外に出る。

銀犁を身請けしてくれとは言い出せない。事態は急変した。

外の道に人の姿はなく、色街は寝静まっている。

中曲、南曲を通って、お屋敷の並びにさしかかると、塀の中より物音が聞

こえてくる。

「お上を追って逃げる用意だろうか」

「何、あれはいつもの登城の準備でしょう。今日は、普段通りに夜が明けましょう。朝のうちはまだ変らぬでしょうな」

見上げると、空にほんのりと明るさがさしはじめている。官人たちは、開門と同時に坊を出て皇城に向かう。そのため早起きで、昼間は寝ている色街とは違う。

「お上が出ていかれたことはまだ知られていないのかい」

「お偉いさんたちも、皇城に着いてから、お上がいなくなったとわかり、天地がひっくりかえったように驚きましような」

「どうしてそなたは知っているのだ」

「いろいろありますからな」

蘭は笑って確かなことを言わない。

夜明けに向かっていますます冷え込むなかで平康坊の東の門の前に着く。ま

まだ開いていない。寒さに足踏みをしながら待つ。

あたりは明るさを増し、車馬の音が聞こえ出す。登城のために屋敷を出て、皇城に近い門へと向かい出したのだ。

「いつもの朝も今日限りですか」

蘭が言う。

平康坊も今日限り、銀犁に会えなくなってしまうのか。そうならこのまま帰ってはならぬと思えてくる。身請けができないのなら力づくでも。しかし、できることではない。

長安のあちこちの門で太鼓が鳴り出す。それに呼応してここでも太鼓が響き、門が開けられる。

「では、いきますか」

蘭に声を掛けられればいくしかない。韋家の主が妓女を盗み出して逃げて帰れるはずがない。いずれ何かの手立てを得てまた会いにこよう。必ずそうできるはずだ。銀犁にまたくると言った言葉を真実なものにしなければなら

ない。

門を通り抜ける。

皇城と逆方向に当たるこの門から出たのは韋莊と蘭だけだ。二人は南に向かう。遠く見通す大通りへと、あちらこちらの門から車馬が出てくる。長い大通りに、皇城へと向かう官人の流れが生まれる。それを避けて道の縁を歩く。皇帝が夜のうちにいなくなつたとは誰も知らないようだ。もちろん、今日この後で何がおこるのか、誰にもわからない。店に着いてからどうするか。皇帝の後を追って逃げるのか。それとも長安に留まるのか。そのどちらが許されることなのか。銀犁を仙水楼に置いたまま長安を出ていくことはできない。しかし、皆のためにはそうしなければならぬのかも知れない。あるいはそうしたくてもできないようになってしまふのか。

東市には入らずに大通りを進む。東西に走る大通りの交点で東に折れる。安邑坊から出たであろう官人たちの流れはあらかた通り過ぎてしまったようで、しばし閑散とした大路を進んで、北門に至る。

息を弾ませて門をくぐると、後ろに足音が響き、一人の男が駆け寄ってくる。蘭に腕を引かれ、脇に避けつつ振り返ると、何のことはないよく知った男だ。楊銀の三男の臆である。

楊臆は余程急いできたのか、

「こんな朝早くに、どうかしたのか」

との蘭の問いに、荒い息で、すぐに答えられない。

「旦那方こそ、こんな朝に。まさか、お店で、何かあったですか」

「昨日はちと他所で、いまから店に帰るところだ」

「でしたら、すぐにまいりましょう。お店が心配で、門が開くや飛んできたのです」

臆はまだぜいぜいしているのに、すぐにも駆け出そうとする。

「どういうことだ」

臆は、

「ともかく急いでください」

二人の背中を押す。韋莊と蘭は顔を見合わせ、臆に言われるがままに安邑坊へと入っていく。中はいつもの朝と特に変わったところはない。

早足で先へ先へといく臆の背に、

「若いおまえはよいだろうが、俺たちはそうは速く進めないぞ」

と、蘭が言う。

臆は二人の兄とは年齢が離れてまだ二十歳にならない。ちらりと振り返って、さももどかしそうに、

「旦那方、頼みますからもう少し速く歩いてくださいませんか。あつしは、気が気でないので」

「急ぐ理由を言ったらどうかい」

臆はしぶしぶ止まり、

「とにかく早くお店にいったって、幸い、何もなければそのままに思っています。昨日、仕事から戻りますと、親父からの言伝てが残されていて、夜になる前に安化門から出て、外で待っ

ていると。どうです、おかしいことではないですか。親父の奴、きつとよからぬことを企んでいるに違いないと、あつしはすぐに思いました」

舌打ちする。臆はもともと父の銀や兄の肋と仲が良くない。だからあえて離れた西の市の胡人の店に奉公している。

「安化門の外とは。兄貴、確かにこれはちと妙ですな」

安化門は、長安の南の城壁に設けられた三つの門のうちで一番西側のものだ。都の東側の安邑坊からはかなり離れている。

「都を出ていくということか」

「親父の奴、とんでもないことを考えたに違いありません。それで、あつしは、すぐにお店にお知らせなければと思っただのですが、あいにくと太鼓が鳴ってしまった後で、仕方なく夜明けを待って、いま走ってきたのです」

「そうだったのか。西の市から、随分と早く走ってきたものだ。さすがに若いですな」

「いえ、そうではないので。うちの主人は、黄巢がくると聞き、五日ほど前

に店をたたんでさっさと本国に帰ってしまった。あつしは仕方なく、西の市を出て友達のところへこみこみ、賃仕事をしております」

「そうかい。あの主人は帰ったのか。帰る国のある人間が、こうなると羨ましくありませんな。おまえも一緒にいけばよかったのに。知らぬ国を見られて楽しいのではないかな」

「親父やお袋を置いて勝手にはいけません。これでも息子ですから」

「やはり親子か。楊銀も、息子と思えばこそ、安化門で待てと言ったのだな」
「それはあつしには迷惑な話で」

「ともかく店に戻ろう。何事もなく、言伝てが間違いだつたとわかるかも知れん」

と、韋荘が言うと、

「兄貴は人が好いですな」

蘭が笑う。

店の前までくると、表の戸は全て締め切ったままだ。いつものこの時刻な

ら、若い者の掃除がとつくに終わっているところである。臆が戸に手を掛けるが動かない。叩いても応答がない。

「親父の奴、何をしたんだ」

蘭は叩き続ける臆の手を抑え、

「路地に回って莠くんの店にいつてみますかな」

「親父は気が小さいから、いくら何でも血生臭いことはしないとしますが、兄とお袋はどうだかわかりません」

蘭は路地の方へと臆を引っ張っていく。

莠の店の門も閉まったままだ。叩いてもここも応答がない。臆に門を攀じ登らせ内側から開けさせる。

「一家皆殺しにして逃げたのなら、門は開け放しのままでしょうかな」

「不吉なことを言うものでない」

「あの三人が許せぬことをしたのなら、生かしちやおきません」

臆はいきり立つ。

「中に入ってみて何があっても、おまえはそのように言うべきではない。父や兄を庇うのが人の道ですからな。孔子さまだって、父の罪を隠した息子を孝行者であると褒めた。おまえは、安化門で待つべきだった。いまからでも追ってはどうか。ここから中を見なければ、おまえは何も知らぬままだ。父や兄の罪とは無縁ですな」

「とんでもないことです。あつしは、曲がったことは大嫌い。親や兄なら許すなどと言う法があるものですか。親や兄だからこそ許しはしません」

臆は店の戸を激しく叩く。

しばらく待っていると、中から、

「どなたさままでございませうか」

阿枉の怯えたような声がする。

「死に絶えてはいませんかでしたな」

韋荘は、

「私だ。ここを開けてくれないかい」

阿枉が戸を細く開ける。臆がぐいと押し開けて飛び込み、

「親父たちは何をしでかしたんだ」

店の内を見回す。蘭と韋荘も続く。特に変わった様子はない。棚の脇の碁盤の前に、うづくまる秀の背中がある。

阿枉は青ざめた顔で三人を交互に見て、震える唇で微かに、

「ひどいことです」

「どうしたんだい」

韋荘が尋ねる。阿枉は目を上下させ、

「まさか、こんなことになりますとは」

臆に遠慮がちに視線を向ける。

蘭は秀の後ろへと歩んでいて、肩に手を置き、

「あれからまた武大人さまがこられたのですかな」

秀は碁盤に顔を向けたまま、

「昨日の夕方近くにお見えになりました。どうです、あの不利な状況から、

五分と五分に近いところまで持ち直していますでしょう」

蘭は腕を組み、

「なるほど、この後、俺が続けるのだったら、武大人さまの側をもちましようかな」

韋荘は、蘭と臆を交互に見て、どうしたものかと思っていると、臆は、「教えてくれ。親父たちは何をしでかしたんだ。事と次第によつてはあいつらを生かしておかない」

と、阿枉に言う。二人は同じくらしいの年頃で、ずんぐりと背の低い臆よりも、ほっそりした阿枉の方が高く見えるが、阿枉はまだまだ子供っぽく、臆は大人びている。

阿枉は身を竦めて困り切った顔、口を開けずにいる。

「まさか、親父のやつ、刃物を使つてはいないのだろう」

「ええ、でも、全てをもつていつてしまったのです」

「全てとは」

「お店のお金をそっくりです」

「いつかこんなことをしやしないかと。畜生、本当にやっちゃまうとは」
臆は叫び、床に伏して、韋荘に頭を下げる。

「申し訳ありません」

詫びる臆を見下ろしつつ、

「楊銀たちはどこにいったんだい」

と、阿枉に尋ねる。

「昨夜のうちにいなくなって、それっきり帰ってきていません」

その返事に、蘭は、

「これは、碁よりも、ちと重要そうな話ですな。莠くん、どうなんです、阿枉の言った通りなのですかな」

莠は碁盤の前から立ち上がり、棚の扉を開き、その奥の板をずらして、隠された扉を開ける。

「御覧の通り空です」

蘭は覗き込み、

「何もなしですな。表の店もですかな」

莠はうなずく。

「倉の銭もなくなっていれば、この家には金も銭もなしですな。昨日の買入れと、今朝、気前良く崔婆にやったのとで、俺の手持ちも残っておりませんしな」

蘭は笑う。

「倉は変りないようでございます」

阿枉がぼつりと言う。

「かさばる銭は置いていったのですな。わずかでも元手が残っていれば、倉のがらくたもあることですから、商売はどうにか続けられますかな。都がこれまで通りであればの話ではありませんが」

蘭は妙に愉快そうに言う。

臆は床から立ち上がり、

「許さねえ。親父たちから金を取り返してきます」

すぐさまいこうとする勢いを、蘭が腕を掴み、

「安化門の外で待てと言っていたのだろう。いまごろは長安から一目散、どこに向かつていったやらわかったものでない」

「どこだかわからなくても、許しちやおけません。親父も兄貴もお袋も、殺したって、お店の金を取り戻してきます」

「そいつはよくないな。親の罪を隠すのが孝行者だと教えたばかりだ。日頃はおまえたちはあまり仲がよくなかったようだが、いざとなればやはり親子だ、安化門で待てと言ってくれたのは、親子の情ですな。父や兄と一緒に逃げるとおまえが言うのならこの手を放すが、つかまえるだの殺すだの、とんでもない」

臆は振り払おうとするが、蘭は離さず、

「阿枉、これが飛び出さないように戸を閉めておくれ。ここは、臆の了見違いを、一から正さねばなりませんな」

韋莊は、

「楊銀たちが何をしたのかをきちんと知るのが先ではないかい」

「いやいや、臆ほどの親不孝者はありませんな。兄貴は、書物から何を学んでいるのですかな。臆も聞くが良い。大昔、大聖人の舜と言う人がいましたな。天下をこの上なく立派に治めた聖天子ですな。この舜の父は、息子とまるで違う大悪人でしたな、それで、孟子の弟子が先生にこんな質問をしましたな。舜の父が人殺しをしたら、天下に君臨する舜はどうするかと。兄貴は、もちろん孟子の答えは知っていましたよな」

従弟はなぜいまそのようなことを言い出すのか。

「孟子は『捕らえるのみ』と言った」

と、面倒臭そうに答える。蘭は雄弁にも、

「そうでしたな。最初の答えは『捕らえるのみ』と。臆は、舜のように天下を治める者ではありませんが、父を捕らえるといきりたつのは、孟子の答えに合っていますよかな。孟子の弟子は、孔子が父の罪を隠してこそ親孝行

だと言ったのを知っていましたから、『父の罪を見逃すために法令を曲げては
 いかげんか』と孟子に尋ねましたな。『天下を治める者が自ら法令を曲
 げてよいはずがない』では、舜は父を捕らえ、罰するしかないのでしょうか』
 『どうしてそのようなことがあるのか。舜にとつて天下など檻褭靴に過ぎな
 い。さつさと捨て、父を背負い、遠く法令の及ばぬ海辺に逃げ、残りの一生
 を楽しく父への孝養のうちに過ぐすであろう』。孟子の答えはこうでありまし
 たな。臆 おまえは、安化門の外で父を待ち、ともに遠く逃げねばならな
 かったのだ。こんなところで親を殺すとかいきりたっているとはとんでもない
 不孝者だ。このような者は、兄貴が昔やったように、杖撃ちにするしかあり
 ませんな』

「人を杖で撃つなどすべきことでない」

韋莊は眉根を寄せるが、すぐに顔のこわばりを緩め、

「臆は曲がったことの嫌いな立派な若者だ。臆にはどこにも悪いところはない。そればかりか、銀にも肋にも悪いところはない。こうなった理由を尋ね

れば、誰が悪いのか明らかだ」

蘭は韋荘の肩を押さえ、

「兄貴がその先を言ってしまう前に、どうですか、兄貴がいま言ったように、ひとまず奥にいったら、何があったのか正しく聞いてみてはいかがですか」

蘭は臆の腕を掴んだまま、店の横手の口から母屋に向かう。韋荘も羨も、阿枉とともに後に従う。

池に氷が張っている。今朝はとりわけ冷え込んだのだ。しかし、いまは寒さを感じる暇はない。

羨の妻の柳氏が、

「皆をここに集めてお待ちしております」

と、母屋の最も広い部屋に導く。

羨の娘と息子、若い者二人、陳婆やが立って会釈する。韋荘と蘭、羨が奥におさまり、柳氏は、臆と阿枉に座る場所を示す。

柳氏が言うには、銀と肋は木櫃を満載した車を引いて店に戻ると、若い者とともに、全ての荷をこの部屋の床下に運び入れた。二人は驢馬と荷車を返すと言って店を出た。しばらくして、武大人が訪れ、莠の店で碁を打ち始めた。銀の妻が茶を運び、用事があるからと、莠に断って外に出た。暮れの太鼓が鳴り、武大人が帰り、暗くなっても外に出た者は誰も戻らなかつた。残つた者で食事をすませ、柳氏はしばらく若い者と帰りを待つたが、その気配はなく、とりあえず休んだ。今朝になり、不信の念を抱いた柳氏が調べてみると、二つの店から金が失せていた。

「俺か兄貴が先に持ち出したのでなければ、誰がもっていったのかは明らかですな」

「残念なことに、我が家より罪人を出しました。このようなことがあつてはならぬと気にかけておりながら、申し訳ありません。この私の責任です」

柳氏が頭を下げる。

「いやいや、姉さんの謝ることではありませんな。兄貴、そう思いますでし

よう」

「その通りだ。誰が悪いのかと言えば、答えは一つ、この私だ」

「ほう、そうなのですか」

蘭はわざとらしく言う。

「誰にも私は顔向けができない」

言葉の通りにできれば顔を覆っていたい。

「俺もうすうす感じるどころがありながら、成り行きに任せてしまった。結構な落ち度でしたな」

「私がこんなでいたらくであるからだ。非は私一身にある。蘭くんや莠の店を損なつてしまい、申し訳ない」

「潔い謝り方ですな。お上にもこの潔さがあれば、こそそ都から逃げなくてすんだかも知れませんか。宮城に居座ったところで、都の民には守ってもらえぬと、田令孜は夜陰にまぎれて逃げることにしたのですな。楊銀の奴も、うまい具合に、お上と同時に逃げられ、あの者の幸運こそ祝うべきで

すかな。とすれば、あの者たちは、兄貴のお蔭で大変結構なことになった訳ですな」

「お上は都を出られたのでしょうか。まことですか」

「夜のうちに出ていかれましたな。世間ではまだ知られていません。お役人たちも、いつもの朝と変わりなく官署に向かつて急いでいましたからな」

阿枉をはじめ皆が動揺し始める。

「大変なのはこの店だけではないのですか」

柳氏は自身に言い聞かせるようにつぶやく。

臆は立ち上がり、

「こんなときに、親父の奴、ますます許せない」

柳氏は、いきりたつ臆を手の動きで抑え、

「お上でさえも都をお出になるのです。このようなときであるから、楊銀たちのしたことは責められはしません。我が身を守ろうとするのは人として当たり前のことですから」

韋莊は耳のあたりが赤くなる恥ずかしさを覚える。

店から金を持ち出されたと聞いたとき、秘かに一つのことを思った。これで銀犁を請け出すのは完全に不可能となったと。この屋敷をそっくり投げ出してでも銀犁を自由にしたいとの身を捨るばかりの焦りが生じる。いったい己は何を考えているのか。

振り払うかのように、咳払いをする。

「臆や、父親を罵るのは、どうか、もうよしにしてくれないかい。悪いのはこの私なのだ。そなたが言うたびに辛くてならない」

「あつしはそんなつもりで申しているではありません。親父と兄貴、それにお袋が、恩知らずの不届き者なのです」

「いや、恩知らずは私の方だ。この店がいまこうしてあるのは、蘭くんや莠の力もあるが、銀たちががっかり働いてくれたお蔭だ。そのことを思えば、銀たちの身を真っ先に考えなければならなかったのに、私は別のことに夢中になっていた。申し訳ない」

口から出ていく言葉が己を情けなくする。

この己は、貢挙を受け、唐朝の再興に尽くそうと都に出てきた高い志をもつ人間だったはずだ。かつては宰相まで出した韋家の当代の主としての誇りもある。それがどうしたことか、一人の妓女に出会ったためにこうなった。銀犁をどうしてここまで深く想うのか。かつて貫休に諭された迷妄の底へと落ちていくためか。

もしも、黄巢がこなければ、春には貢挙に合格し、銀犁も我がものときたかも知れない。憎むべきは黄巢か。

銀に罪を犯させ、臆を不孝者にし、莠一家を危うい瀬戸際に立たせている。広州の町を徹底的に破壊したようなことを、都において黄巢は行うのかも知れない。そうなればいまここにいる幾人が生き延びられるのか。

なお興奮がおさまらない臆を柳氏が穏やかになだめる。

「そなたはしばらくの間、ここにいなさい。一人になれば、また同じ思いに駆られ、父を追って捕らえねばと考えるようになりましょう。それはいけな

いことです。ここにいます。店の男手が減ってしまった分を、もしも補ってくれるのなら、それはまことに有難いことです。とにかく、当面は私の目の届くところにいなさい。それがよいと、雀蛤先生も思われましょう」

蘭に同意を求める。

「そうですね、姉さんのおっしゃる通りですな。もしも、臆がその気にならぬのなら、出ていかぬよう、縄で縛って倉に閉じ込めておきますかな。二つに一つ、どちらを選ぶか、本人に決めていただきますよう」

臆は不服そうに座り込んで何も答えない。

「臆には、じっくりと考えてもらおうことにして、そなたたちはどうしますか」

柳氏は、若い者二人、陳婆や、阿枉の方に順に顔を向ける。

「そなたたちが心の内で、銀たちと一緒にいけなかったのを残念がっているとしても、それが悪いことであるとは思いません。銀たちが金を持ち出したのは罪ではありませんが、金を稼いだのも半分は銀たちの働き、それに主の側に非があったのですから、罪は帳消しです。いま聞けば、お上が都を出られ

たとか。都はこの上なく危険な状態にあります。こうなることが予想されていながら、今朝を迎えてしまったのは、主の側の落ち度です。この上、そなたたちを、この店に留めておくことは許されないでしょう。そなたたちはいまからどこへいくも自由です。店の金はなくなりましたが、私の貯えが少しばかりあります。そっくり分け与えますから、もっていっておくれ」

部屋の隅の卓の上ですでに用意された四つの包みを、柳氏はそれぞれの膝の上に置く。

「まことに少なくて気の毒だが、いまはこれしかない。賊はいつ入ってくるのかわからない。ぐずぐずしないで、好きなどころにおいき。遠慮している場合ではありません」

若い者二人が互いに顔を見合わせる。

「そなたたちには親や兄弟がいるのだろう。いまのうちに急がないと、後悔しますよ」

「しかし、旦那さまが」

二人は蘭と莠の方を見る。

蘭は微笑み、

「先を見誤った俺には主人面する資格はない。おまえたちはもう自由だ。俺にできるのは、倉から何か土産になるものを選んでやるくらいですかな」

若い者は詫びて、部屋を出ていく。

「そなたたちも、よいのですよ」

柳氏に言われ、陳婆やと阿枉は手を取り合い、

「いえ、私たちはここより他にいくところがありません。お慈悲ですから、ここに今まで通り置かせていただけでいいでしょうか」

二人は拝むようにして床に身を投げ出す。

「そなたたちがここにいたいのなら、好きにしてよい。私たちとしては、そなたたちがいてくれれば大いに助かります」

二人はほっとした顔を上げる。

その間、ずっと考え込んでいた臆が立ち上がる。

「やはり、あつしはここにはいられません。親が盗みを働いた家に、息子が居るなど、そんな馬鹿な真似はできません」

柳氏の制止を聞かず、部屋から出ていこうとする臆に、莠の息子が後ろからすがりつく。

「いかないでください」

半ばは泣いているかのような声に、臆の足が止まる。莠の息子は小さく瘦せていて、年齢よりも幼く見え、まだ女の子のような声を出す。

「あなたがいてくださらないと、私や姉や母が困ります。私たちを助けてください」

莠の息子に腰から抱きつかれた臆はとまどい、

「あつしに何の助けができましたようか」

「見てください、この家に残る男が誰なのか。父に二人のおじさんに、この私です。これでこの家が守れると思いますか。母や姉を誰が守るのです。私は、こんな貧弱なからだ、家にとじこもって本を読むことしかできません。」

父は碁盤と睨めっこするだけです。蘭のおじさまは、いくら頼りになりそうでも、いつも変なことを言っていて、本当のところはわかりません。一番偉いはずの伯父さまは、いまは一人の妓女のために腑抜けになっておしまいです。あなたがいてくださらなくてはどうにもならないのです」

懸命な頼みに、蘭が嘔き出す。

「これは参りましたな。上から下は見えずとも、下から上はよく見えるのですな。いかにもいかに、俺は口先だけ、莠くんは碁だけ、そして兄貴は御覧の通り妓楼からの朝帰り。大の大人が揃いも揃ってこれでは韋家はどうにもなりませんな。銀が呆れて出ていくのも当然のこと。臆も、こんな家は滅んで当然と思うのなら仕方ないが、莠くんの息子や娘、それに姉さんたちを哀れと思ってくれるのなら、この家においてくれませんか」

皆の前から姿を消したくなる気持ちを抑え、臆の前に膝をつく。

「全てこの私がいけないのだ。銀と助、それにそなたの母が、どこかに無事に着けることを祈る。あの三人に私ができるのはそれだけだ。そなたはこん

な私を見捨てて当然であるが、もしも、他所に行くのもここにいるのも同じと思つてくれるのなら、この子の願いをきいてやっつけてはくれないだろうか。そう願うのは虫がよすぎると、わかつてはいる。私が悪いことはどうかこうして謝るから、この子の願いを聞いてやっつけてくれ」

「そんなふうにされては困ります」

「願いをきいてくれるかい」

韋荘が頭を下げ続けるので、

「旦那さまにこのようにまでされて、お断りしたら、罰が当たりましょう。

罪人の息子です。ここに置かせていただく資格などありませんが、せめても罪滅ぼしに、お坊ちやま、お嬢さま、おかみさまの身をお守りさせていただきます」

「そうかい。有り難う」

早くも荷物を背に担いだ二人の若い者が戸口の外から決まり悪そうに覗いている。

「倉で土産を選んでもらわないといけなかったな」

蘭が立つと、二人は、

「滅相ありません。そんなものまでいただく訳にはまいりません。お店の方に、実は武大人さまがお見えなのですが」

ずっとうつむいて無言でいた莠が顔を上げ、

「いってもよいか」

妻に尋ねる。

「どうぞいらしてください。ここでの話はすみませしたので」

「そうかい」

莠はほっと息をついて出ていく。

残った者がしばらく無言でいると、

「お兄さまもどうぞ」

柳氏に促され、韋荘も弟を追う。

蘭は若い者を連れて倉に行く。

でっぷりとした武大人が碁盤の前に腕組みをしている。莠が置いた石への応手を思案しているのだろう。

「今日は打つまいと思っておったのに、人間、好きなものには敵いません。一手だけでもと、まこと意地汚いことです」

韋荘に向かって苦笑いする。

銀犁を想う己に引き寄せて返答に困り、無言で会釈する。

武大人は石を置き、

「この一手だけにして、今日は止めておきます」

と、立ち上がり、厳しい顔つきになって、

「ここにきましたのは、重大なことをお知らせしようと思ひまして。まだ正式に確かめたものではありませんが、驚かせませんように。実は、お上が都を出られたようです。このことが人々に知れ渡りますと、何がおこるのか予想がつかえません。我先に逃げるか、悪漢どもが暴れるか、禁軍が暴動をおこすか。不測の事態もあり得ますので、とにかく外には出ずに、戸締りを厳重に

されるのがよろしかろうと思います。様子が知れましたら、またきましようほどに」

武大人はちらりと碁盤に目を注いでから出ていく。

若い者も出ていき、蘭は臆とともに表の戸を念のために打ち付ける。

韋荘は釘を打つ音を聞きながら少し横になる。昨日からの疲れが出たのと、人と顔を合わせているのが辛いからだ、しかし、眠ることはできない。

午後になって、一人で悶々としているのも苦しくなると、蘭はどこかに出てしまい、姪と甥が静かに勉強しているのを脇からそつと覗く。『楽記』を筆写している。

「強者は弱きを脅かし、衆者は寡きを暴げ、知者は愚なるを詐き、勇者は怯えるを苦しめ、疾病のものは養われず、老幼孤独はその所を得ず、これ大乱の道なり」

姪は顔を上げ、

「いまはこのようなことの起こるときなんでしょうか」

韋莊は、叔父の韜を思い起こす。叔父は唐の御世のうちに死ぬのを願っている。それは「大乱の道」を見まいとしてのことだろう。韋莊自身はまだしも泰平の世の末に生まれ、莊園の主の息子として恵まれた月日を送ることができた。不幸にも、姪や甥は、「大乱の道」へところがり落ちてゆく最中に生まれ合わせてしまったのか。もしも生まれるときを自身で選べるのなら、誰もこの時期に生まれようとはしないだろう。

腑抜けになったと言った甥たちに、『樂記』を講釈するのは気恥ずかしいものがあるが、勉強はまた別と、ひと通りのことを教える。

皇帝が去って黄巢がくることに怯える二人に、杜甫の詩を吟じて聞かせる。

煌煌太宗業　太宗皇帝のお仕事は煌煌と輝き

樹立甚宏達　樹立されたものは広大にして永遠に貫き通る。

安祿山の賊軍に支配された長安を脱出した杜甫が、新皇帝のもとに馳せ参じて官位を授かった後、家族の住む町へと向かう途中で詠んだ『北征』の詩の末尾である。太宗皇帝が築いた基礎の上に建てられた唐朝は永久に続く

の信念をもって詩の結びとした。杜甫の思いの通りに、唐朝は安祿山の反乱を乗り越え立派に再興を果たした。その一端を韋荘の先祖の韋牟物も担った。姪と甥に、いまは「大乱の道」ではなく、唐朝は必ずや元通りになるはず、我等は決して挫けることなく平和な御世を取り戻すために皇帝に尽くしていかねばならぬと語る。

そのように言うときの己の言葉に嘘はない。しかし、自身で空々しさを感じ、嫌気がさして話を打ち切る。

蘭の店にいき、臆と二人で黙って座っていると、外では静かに雨が降り出す。

蘭が帰ってくる。街はかなりの混乱を呈し、荷車を曳いて逃げていこうとする者もあり、驢馬を公道で奪い合っている者もあり、手に得物を持って群れをなす街のごろつきもいると、やや興奮気味に語る。皇帝が逃げては、浮き足立つのも当然だ。

にわかには太鼓の音が響く。

「もうそんな時刻かい」

雨のせいで薄暗くなったが、夕暮れには間があるはずだ。

「太鼓を鳴らして門を閉じ、騒ぎを鎮めるようというのでしようかな」

「門が閉じられてしまえば、今日は出られぬ。都から逃げるのがよいのか、それともここに留まるのがよいのか。昨日もそのような話をしたが、今日のようになってみて、どう思うかい」

「黄巢が立派な君子になったと賭けるのが第一番でしようかな」

「逃げられないのならば、おめおめと賊に降るしかないのかい」

「賊も勝てば建国の英雄ですからな」

「我らは唐の民だ」

韋荘は姪甥に話したことを思う。

「我らが勝手にそう思っても、皇帝は捨てて逃げていってしまわれましたな」

「黄巢が根っからの盗賊で、変わらないのなら都はどうなるのか」

「それは考えたくありませんな」

戸が叩かれ、武大人が、兵士の隊列を伴って道に立っている。

「長安中の門は閉ざされ、人の動きが禁じられた。勝手に出歩く者は斬つてしまえとの御命令だ。決して外には出ぬように」

武大人には珍しく厳しい口調である。

蘭はいつも通りに、

「それは厳しい御命令ですな。しかし、お上が不在となられたいま、それはどなたが発せられたものなのでしょうか。宰相どののでしょうか」

武大人は顔を顰める。

「お気の毒にも宰相どのは昨夜のうちに亡くなられた。潼関守備の神策軍が敗れた責任をお上より問われて、お屋敷に下がって御自害なさったとのことだ」

宰相は盧携（ろけい）と言い、温厚な人柄で人望もそこそこあったが、皇帝から阿父と呼ばれる田令孜の前では何もできず、不如意な日々を送って、最近では心身の衰えが目立っていた。

韋莊は深く嘆息し、蘭は無頓着に、

「田令孜はうまくやりましたな。宰相どのに罪をおつかぶせたのですな」

「その通りだ。盧携どのを罷免にすると、田令孜はすぐさまお上をお連れし、宮城から脱出した。皇族の方々にも誰にも告げなかったそうだ」

「田令孜がいなくなっただけ、朝廷を統率できるのは誰なのでしょうかな」
武大人は目を細め、ことさらに重々しげに答える。

「いまのこの長安を鎮められるお方はお一人しかおられない。そなたにもわかるだろう。左金吾大將軍張直方さまだ」

蘭は姿勢を正し、

「まゝとに」

と、一礼する。

蘭が鶯鳥の一件でしくじった相手である。

武大人が帰ると、蘭は、

「裏目裏目へといくばかりですな。こうなってしまうては、楊爺に習って、

「お狐さまにすがるしかありませんかな」

冗談ではなく、武大人が去ると、供え物を用意し、雨の中、お狐さまの祠に祈りを捧げる。蘭としては珍しい。蘭でさえ考えの及ばない事態になってきたということか。

韋荘も並んでお狐さまに祈る。この無力の己は雨に打たれるのが当然であるとはかりに、長々と祠の前に立つ。家族の者の無事を祈り、そして、こっそり銀犁のことも祈る。銀犁のことは、こうして神に祈る他は、封印せねばなるまいと思う。あるいは、この迷いから脱け出せぬようでは、お狐さまも願いをきいてはくれないのだろうか。

己の力を遥かに超えたところで事が進んでいる。世のため人のために尽くそうとした志はもはや潰え去ったのだ。

翌朝 細い雨が続き、昨日はあれほど早く鳴った太鼓が、今日はいつまで

経っても鳴らない。

表の戸を開けると、街は静まり返り、時折、兵士の一団が通る他に人影はない。禁令が守られているのだろう。

韋荘は姪甥と書を読み、蘭と莠は碁を打つ。これからいくら不安であっても、さし当たってはどうしようもない。

雨は昼前に止み、日が薄く差し出す。

莠の店に碁を見に行く。碁盤の脇に腰掛けるうちに、眠れずにいた昨夜の疲れが出て、うつらうつらと夢心地、銀犁が傍らにいるような錯覚を覚える。

店の戸が激しく叩かれる。

「どなたですか」

戸に身を寄せて臆が尋ねる。

「早くあけてくれ」

聞き覚えのある老女の声だ。外は誰も歩けぬはずなのに、どうやってきたのか。

「あけてやれ」

勝負に熱中している二人に代わって韋莊が言う。

「今日という今日は何としてでも貸してくれ」

飛び込んでくるなり、老女は韋莊に詰め寄る。

「あれば貸そうが、あいにくと店には銭がない」

「言うにことかき、出鱈目で年寄りを追い返すつもりか。やつとの思いで、殺されそうな目にも遭ってきた年寄りを、外に放り出すのかい」

一昨日、肋が邪慳にしたのが気になっていた韋莊は、少しばかり同情心を示し、店の金を盗まれてしまったことを告げる。

「それはお気の毒さま。何かい、あの大男の仕業かい。わかる、わかる。あれなら、それくらいはするだろう。あんな男を雇っていたあんたたちに人を見る目がなかったってことだ」

「ともかく、貸したくても貸せないのだ」

「あの大男のせいで、この年寄は打つ手もなく、賊がきたら、なぶり殺しの

目に遭ってしまうのか。それなら、いっそのこと、ここで死んでやる」

老女はぱったりと床に大の字になり、

「さあ、殺してくれ」

手足をばたつかせる。

蘭が碁盤から顔を上げ、

「そう騒がずとも、ひよっとしたら、おまえたちにはよいようになるかも知れんぞ。黄巢は金持ちが大嫌いで、貧乏人が大好きであるらしい。都のお歴々を追い出し、おまえのような困っている年寄りを哀れんで、たっぷり施し物をくれるのではないかな」

「本当か」

老女は手足を止める。

「俺は黄巢と心安くはないので保証はせぬが、世の中の上と下がひっくり返ると、期待はしてもいいだろう」

「ひっくり返るとは、皇帝が乞食になり、乞食が皇帝になることか」

「そうかも知れぬ」

「そいつはうまい」

老女は立ち上がる。

「まあ、生きて、どうなるのか見るだけでも損はしないだろう」

「死ぬ気はもともとないき。息子が帰ってきて、わしが死んでいたら、悲しむだろうから」

老女は着ているぼろをはたく。

「今日のところはこれでしのぐがいい」

蘭は紙に包んだものを投げる。仙水楼の菓子だ。

老女は紙の中を覗き、

「あれまあ、こんな贅沢ものを。今日のところはこれで辛抱してやるか」

菓子を懐にしまつて出ていく。

莠は碁盤を見たままである。

蘭が碁に戻ってしばらくすると、また戸が叩かれる。

「あの婆さん、兵士に見つかって逃げてきたのかな」

臆が戸を開けると、今度は武大人である。

武大人は昨日と異なり、立派ななりをしている。

「よいか、明日、率土大將軍さまが都にお入りになる。二十歳以上の男子は、足の立たぬ者を除き、一人残らず正装をして、正午までに、春明門から朱雀門までの間の大街に並ぶのだ。都人は挙ってお出迎えせよとの左金吾大將軍閣下の御命令である」

言葉に力を入れ、ことさらに胸を張る。

「率土大將軍とは誰のことだい」

韋荘は蘭の耳にささやく。

「もちろん黄巢ですな」

そういう蘭の肩を武大人は押さえ、

「これ、無礼な口をきくでない。率土大將軍さまのお名を呼び捨てにする奴があるか。世の中はすっかり変わるのだ。気をつけるのだ」

「申し訳ありません」

韋荘が代わって詫びる。

「それにしても、明日とは、驚くべき速さですな」

「間もなく、率土大將軍さまの命を受けた柴存（し）さんさまが都にお着きなる。左金吾大將軍閣下と御入城の段取りを決められるそうだ」

武大人はすぐに店を出ていく。

韋荘はめまいのようなものを感じる。昨日と同じ今日が続くと思っていられたのは一昨日までだ。考えられる以上の速さで事は動いている。

「出迎えにいつて、まさかいきなりその場で殺されることはないでしょうな」
最悪の事態は避けられるのか。それにしても、こゝも早くに黄巢を迎え入れることになるとは、誰が思っただろうか。

「とりあえず、従順に振る舞うしかありませんかな」

確かにその通りであろう。蘭は柳氏に衣類の用意を頼みにいく。

韋荘は莠と碁を打ってみるが、気持ちが集まらない。

夕方近くに、武大人がまたくる。姿は同じでも、全く別の顔である。

「少しだけでも思いました」

すぐに碁盤の前に座る。昨日の続きから、勝負がつくまで打つ。莠の勝ちだ。

「いつでしたか、棋局の総数は、万の字を四十三回連ねた数だけあるとおっしゃっていましたか、そのうちの半分が黒の負けであるのなら、早いうちにその分を打ち尽くしてしまえば、あとは私が勝つ棋局しか残らぬことになります。そこまですきたいものです。率土大將軍さまがこられ、いずれ世が静かになってくれれば、坊正の仕事もお上にお返しして、思う存分打てましよう」

武大人はそのように言って出ていく。

太鼓は朝から鳴らないままに夕暮れとなる。

食事をとって一人になると、銀犁はどうしていようかと思われてくる。このような思いは封印しておかねばならぬのだが、それは難しい。

またも夜を眠れぬままに過ぎす。

翌日。

都の上に晴れ上がった冬空が広がる。

南東に顔を出した朝日が、低いながらも南へと移りゆくにつれ、東西に伸びる大街の人垣は、二重から三重に、そして四重五重になっていく。人垣の前に、武装した兵士が十歩おきに立って、道の中央に幅広い空間を確保する。東の春明門から西の金光門まで長安を東西に貫くこの大通りは、ちょうど中央で皇城の南の正門である朱雀門に接する。

韋莊、蘭、莠は人垣の最前列。身なりのよい者が選ばれて前に出されたのだ。率土大將軍を迎えるのにいささかの疎漏も許されない。二十歳以上の男子は残らずこの大街にくるようにとのこと、莠の息子や臆は店に残っている。留守の間に何かあるかも知れず、蘭は臆に重々警戒するよう言いつけた。

蘭が機転をきかせて、大街の北側に並んだおかげで、前からの陽射しと、後ろからの人の熱気とで、冬の風もさほど寒く感じずにすむ。昨日の雨で、道はほどよく湿り、埃も立たない。入城には絶好の日和である。黄巢は天の時に恵まれたということか。

率土大將軍がどのようにして乗り込んでくるのか、人々はそれぞれ真偽の程の知れぬ噂を交換し合う。手当たり次第に殺されてしまうぞと脅す者もいるが、大方は、さして恐れている様子はなく、新しい時代の始まりに期待を寄せる声さえ聞こえる。率土大將軍の登場をいまかと待つうちに、人々は自ずと高揚する。

わずかの間にこうも変わるものなのか。三日前に平康坊へと向かっていたころは、明日も昨日と同じであろうとの気休めの内に、人々は己を置いていた。そうでもしないと、得体の知れぬ不安に押しつぶされてしまいそうだったからだ。それが今日は、天気の良いもあるのか、気持ちは明るく解き放たれているかのようである。もっとも、そうでなければ、この変化にはついていけ

ない。

「どんな見世物になりますかな。賊の総大将が乗り込んでくるのに、何だか楽しそうですな」

「賊だなどと言うのが聞こえたら、叱られるぞ」

「この騒ぎ、誰の耳に入るものですか。いつでしたかな、南方に流され、虢州知事として呼び戻された劉瞻さまが、いよいよ都に返り咲くとなったとき、劉瞻さまを迎えようと、街の人々は銭を出し合って大戯を催しましたな。あのときもなかなかの騒ぎでした。それよりも、その前の、法門寺から仏骨を運んできたときには、もっとでしたかな。都の連中がこれほど浮き浮きしているのは、その二つ以来ですか。ついこの前、兄貴とここで神策軍を見送りましたが、あれはいただけなかつたですな。隠隠滅滅。これは駄目だと皆が思いました。しかし、そんなことはすっかり忘れられてしまったようですな。どういう見世物になりますか。これだけ人を集めたのは、黄巢の奴、相당한自信があるのでしような」

「これ、また呼び捨てだ。お咎めを受けるぞ」

「率土大將軍でしたな。言い慣れませんか。ここにきている連中だって、率土大將軍と正しく知っているのは少ないではありませんかな。もしもですな、唐の皇帝がいつの間にも逃げていなくなったように、その代わりになる野郎も、こっそり宮城に入ってしまったなら、人々にとっては、昨日も今日も少しも変わらないではありませんかな。『近頃ひよつとすると皇帝が代わったそうですな』『おやそうですか。ちっとも知りませんでした。今度はどなたがなったのですかな』『さあ、劉だか金だが、そこらにころがっている姓を言うておけば、そんなものでしょう』。まあ、こんなところですか。王朝の交代など、そこに居合わせた者には、所詮どうということもないものかも知れませんな。それでは示しつかないだろうと、黄巢の率土大將軍はですな、こうして皆を呼びつけ、一発見せつけておこうとの魂胆なのでしょうな」

「そんな呑気なことならよいが。今日は賑々しくやってきたとしても、明日からはどうなることやら。黄巢は五年にわたって全土を荒らしまわってき

た大盗賊だ。何をしでかすかわかったものでない」

「兄貴こそ、率土大將軍さまを呼び捨てにして、しかも、大盗賊と罵倒するとは、命知らずですな。率土大將軍さまはですな、恐れ多くもただの盗賊ではなく、盗跖（とうせき）なみの大物なのではありませんか。兄貴も知っていますでしょう、昔むかし、孔子さまが大盗賊の盗跖を改心させてやろうと、勢い込んで根城に乗り込んでいった話を」

「確か『莊子』に書いてあるあれかい」

「それですな。孔子さまは、立派な道理を説けば、盗跖などは簡単にへこませられると、胸を張っていかれましたな。ところが、雷のような声を盗跖が発するや、孔子さまの魂はたちまちどこかへと消し飛び、ぶるぶる震え出しましたな。得意の仁義の論をぶとうとしてもしどろもどろ、かえって盗跖にやり込められ、腰を抜かしてほうほうの体で逃げたのでしたな。率土大將軍さまにもそれくらいの力量がありましたよかな」

「それは勝手に作った寓話だ。史実ではない」

「莊子のこしらえた理想の人物が盗跖だったのですな。莊子によれば、盗跖は九千人の手下を従えて天下を横行し、諸侯を侵暴し、人の牛馬を駆り、人の婦女を取り、過ぎるところの村を苦しめた。何と黄巢にそっくりではありませんんかな。とすれば、莊子の理想がここに実現するのも知れませんか」

「どんな理想だ」

「周代から続いてきた、仁だの礼だのと言う桎梏から、人々を永久に解き放つのですな」

「無茶を言うな。仁や礼がなくて世が成り立とうか」

「盗跖に及ばずとも、漢王朝を建て直した光武帝くらい力量ならありますかな。光武帝だって、たまたま漢王室の劉の姓を継いでいただけで、各地を転戦していたころは、そこらのごろつき集団と同じだったではありませんかな。皇帝となった後から振り返って、初めから英雄であったような歴史が書かれたのでしょうか。率土大將軍さまも皇帝になって成功すれば、盗賊と

しての所業は一切なかったことと消されてしまいましたよ」

「相変わらずそなたは黄巢勳臣だな」

「ほら、また呼び捨てにしましたな。率土大將軍さまが本物なのか、俺も正直、まだわかりません。孔子の教えなどは、狂狂佶佶、詐巧虚偽と罵倒した盗跖先生の再来と、俺が見込んだ通りにはいかないかも知れませんな。今日のところはうまくやっているようでも、明日はどうなりますかな」

「そのように私がいま言ったではないか。もともと略奪、虐殺を好んできた人間だ。どれほどの思慮分別があるのか知れたものでない」

「しかしですな、率土大將軍さまは五年を戦ってきた。少なくとも、兵士たちを五年にわたって毎日食わせてやるだけの才覚はあった訳ですな。長安にはいまいくらの民がおりますかな。よく百万と切りのよい数字を挙げますが、それは誇張としても、率土大將軍さまが東方から三十万とも五十万とも噂される兵士を従えて乗り込んでくれば、総計で長安の人間が百万を上回るの間違いはないでしょうな。とするとですな、莠くんに計算してもらえば早いで

しょうが、皆を食わせるのに一日にどれだけの米穀が要るでしょうか。その分を都に運び入れるには、どれだけの車が都門をくぐらねばなりませんかな。唐王朝は、この長安が抱える膨大な人間を食わせる仕組みを、二百何十年の長きにわたって維持してきたのですな。黄巢はその仕組みを壊してしまつたら、己の連れてきた兵士も食わせられなくなつてしまひましよう。兵士を飢えさせたら、どうなりますかな、たちまち反乱がおこつて、己の居場所がなくなりましよう。とすれば、黄巢は長安に入つてきたからには、唐の仕組みをそっくり受け継ぐより手はないでしような」

「そなたのような知恵が黄巢があれば、何も変わらず、我らは心配しないですむ」

「俺の知恵の当てにならないことは証明済みですな。兄貴を仙水楼に誘つたとき、こんなことになるとは全く思いもみませんでした。こうとわかつていれば別の手立てを考えるべきだつたですな」

「仙水楼のことはもう言うな。あれで終わったのだ」

韋莊は語気強く言う。

「では、その話は止めて、左金吾大將軍の張直方がこうなるとは考えもしなかったですな。率土大將軍さまの世になって、張直方がもつともつと偉くなつて都に睨みをきかせるようになったら、俺の商売はどうなりますか。もういけませんな。鶯鳥を売りつけて、これで張直方とはおさらば、楊爺との約束が守れたと思つたのに、儲けた金はそっくり楊銀に持つていかれ、これでは知恵のひとつかけらもありませんな」

「張直方もひどくはないかい。あれだけ皇帝に目をかけてもらつていながら、黄巢にすぐに尻尾を振るとは。洛陽に蟄居させられていたのを、お上と呼び戻してもらい、將軍にしていたのだらう、無節操にもほどがある」

「いやいや、無節操こそが肝要。変転極まりない世を生き抜くには、風任せの無節操しかありませんな」

「それもよいだろうが、この喧騒のうちにあつて思い出すのは叔父上のお言葉だ。唐が滅びるのを我らはとうとう見る事になってしまった。長安にお

いて、我らが見てよいようなことはもはや何一つとしてこれからはおこらないのかも知れない。ならば、いつそのこと、黄巢がここで白刃を振り回し、たちまち殺されてしまうのも悪くはないのではないかい」

「不吉なことを言われますな」

「苦しみも一瞬にしてなくなるだろう」

銀犁への想いもそれで断ち切れようか。

黄巢が入ってくれば、平康坊は崔婆の目論見通りになるのか。銀犁は手の届かない存在となり、黄巢の兵士の慰みものとされる。そうした現実が進む日々を同じ長安にいて過ごすくらいなら、ここでひと思いに殺された方がましであろう。

突如として黄巢が凶刃を振るえば、この大街はたちまち血で染められる。韋慍を杖で打ちのめしたことが思い出される。叩いただけであの快感であった。ここに集まった人間を一度に殺戮するのは、恐ろしいばかりの快感だろう。

「始まったようです」

莠が袖を引く。

莠は、この大街に幾人の人が並んでいるかを推計してからいままでずっと脇で黙っていた。

蘭が半歩前に出て東を見る。

「こら、下がれ」

兵士の罵声が飛ぶ。

人々のざわめきの中に、何かしらこれまでとは異なる響きがまじる。遠く雷鳴のような音である。

ここにくる前に、安邑坊の門の手前で武大人とすれ違ったときに聞いたところでは、左金吾大將軍の張直方は、夜明け前、唐朝の文武の官數十人を引き連れて都を発ち、霸水のひとつりに陣を構える黄巢を迎えに出たとか。それから考えると、そろそろ黄巢がきてもよい時分ではある。

無数の太鼓が叩かれているのか。

「静まれ」

東から順に同じ命令を兵士が送る。人垣はさっと静かになる。

「春明門が開かれましたかな」

蘭のささやきにも、

「黙れ」

兵士は怒鳴り、剣を脅しに見せる。

待つことしばし、馬の蹄の音が遠くより聞こえ始める。

たちまち近づいてきたのは威風堂々の騎馬武者の一隊。背に巨大な旗をなびかせ、疾風の如くに走り去る。その数、五十騎ばかり。美々しい馬の毛並みと、鎧の輝きが目に残る。

騎兵隊の音が西に遠のくと、再び東で太鼓が響き渡る。人々が静まった今度ははっきりと聞こえる。音は鳴り止まずに、近づいてくる。長い時間の後に、巨大な太鼓を載せた車が現れる。立ち昇る火炎のような飾りのついた太鼓を、裸の男がどろろろと音を長く轟かせて叩く。

その車の後ろに、小さな太鼓と少年兵を乗せた驢馬の群れが続く。どんとんと小刻みに太鼓が叩かれる。

次は色とりどりの旗指物を手にした歩兵である。いずれも髪を赤い布で包んで、後ろでしばり、布の端をひらひらと靡かせている。

少し間が空き、左右に二本の旗を立てて進んできたのは、旗の模様から左金吾大將軍の一行とわかる。中央の馬上の立派な鎧姿は、韋荘も見覚えのある張直方である。

楊爺は、狐を虐殺するような人間はろくな終わり方をしないと聞いていた。皇帝に大恩がありながら、賊を導き入れて、恥じるどころか、さも得意げである。これでまともな死に方をしたら、天は何も見えていないことになる。

黄巢の大軍勢の堂々の大行進がくる。槍の部隊、鉾の部隊、稍の部隊、弓の部隊。それぞれいつ途切れるのかわからぬほどに延々と連なって目の前を通り過ぎていく。鮮やかな錦繡の衣装、長く伸ばした髪を結わえる紅の繪。兵士は胸を張り、足音は高く、日焼けした顔がきらきらと輝く。この前の神

策軍の情けない姿とは雲泥の差だ。しかもこの人数。莠は目を輝かせて数えている。黄巢の力は底知れぬものであるようだ。

ようやく長い長い歩兵の列が切れる。

一人の騎兵がゆっくり歩みきて、

「これより尚閣下の御車がお通りになる」

と、告げる。

尚閣下とは、黄巢の知恵袋として前からその名を知られる尚讓（しょうじょう）じょう じょうであるに違いない。

再び長い歩兵の列になり、うんざりしたところに、十二頭の馬に曳かせる漆黒の車が姿を見せる。車の左右を、剣をむき出しにした兵士が隊列をつくつてしずしずと歩む。中に尚讓が乗るのだろう。

監視の兵士に促され、人々は、万歳、万歳と叫ぶ。韋荘たちも兵士の鋭い目で見られ、人々と声を合わせるしかない。

車の屋根は眩い金色である。左右の黒い扉が開かれて、簾の中に微かに人

影があると見える。ゆったりと扇を使っているようだ。

「諸葛孔明気取りですか。得意の絶頂でしょうな」

蘭がささやく。万歳の声にまぎれ、それは韋荘にしか聞こえない。

車の前の手すりに一人の男が座し、大きな声を張り上げる。

「黄王さまは百姓から身を起こされ、義のために旗を揚げられた。汝ら民衆を愛さぬ李氏とは全く違う。汝らは安心して今まで通りに住むがよい。何も恐れることはない」

黄王とは黄巢のこと、李氏とは唐の皇帝だろう。

人々の万歳の叫びとともに、尚讓の車は西へと移動していく。

またしばらく間があき、兵士の監視のもと静謐を保っていると、次に騎兵の長い列がくる。そして旗の列、歩兵の列。いったい幾人が目の前を通っていったのか、莠に尋ねたいが、口をきく訳にはいかない。

黄王さまのお出ましを告げる先触れがくる。

大街に緊張感が走る。

四度目の長い歩兵の列がきて、それが延々と続き、不意に、唸るようなざわめきが生じる。それは兵士も止めようがない。

巨大な金色の輿が大街の中央を進んでくる。錦の衣装を纏う屈強の男子が方陣を組んで、肩の上に燦然と輝くその輿を載せている。

長い行列の進む間に西に傾いてしまった冬の陽を受け、輿は妖しい光を放つ。

万歳の声が沸き起こる。兵士に促されずとも、この輝きに叫ばすにはいられない。

輿の窓はぴたりと鎖され、中は覗い知れない。

「だめかも知れませんか」

民衆の熱狂の中で蘭が言う。

「何がだめなのかい」

「人の前に顔を隠すようでは。俺の見込みがはずれましたな。楊銀と逃げるときでしたかな」

蘭は舌打ちする。

西へと進む金色の輿の後ろ姿を追って、人々は向きを変えていく。この先に朱雀門があり、今日から皇城の主は黄巢である。蘭は輿に目をくれず、不快そうな顔で、なお東から進んでくる行列を見ている。

唐の皇帝が逃げてからわずか二日。黄巢はどのようにしてこれだけの大行列を組んだのか。想像を超えた力をもっているらしい。韋荘がそう思うのと同じことを民衆も感じ、黄巢の入城に酔わされている。唐の世は終わり、これまでになかった新しい世の中になる。民衆はすでに黄巢の民となったのを喜んでいるようだ。

金色の輿が去ってから、黄巢軍の行進はなお延々と続き、日が間もなく沈もうとするころになって、最後尾が、銅鑼を鳴らしながら通り過ぎる。

「早く帰れ。閉門の太鼓の前に、それぞれの坊に帰るのだ」

兵士の叫びに、人垣が一気に崩れる。

「この興奮は一時だけでしょうな」

蘭は莊と秀の手を左右に執って、人の流れの中を進む。

韋莊は銀犁を想う。ここから平康坊はさほど遠くない。しかし、蘭に手を執られていなくても、店に帰る以外にいまできることはない。

間もなく閉門だと脅かす兵士に急かされ、大勢の人々ともに先を急ぐ。

「熱狂を与えるのはたやすくても、単調な日々を長く続けさせるのは難しい」
蘭が独り言のように言う。

三人はそのまま黙って人の流れとともに安邑坊の北門に至る。

門の前に華やかに正装した人々が並ぶ。武大人の大きな体がひと際目立っている。門へと集中する人々に押されるようにしてその前までいくと、

「黄大王さまからの賜りものである」

一人一人に小さな包みが差し出される。見れば「金之徳」の朱印。その意味するところを武大人に訊きたくても、後から続く人の波に立ち止まられず、通過する。

店に戻ると朝と変わりはない。陳婆やと阿枉が食事の用意をする間に、半

日立ち続けの足を休めつつ、蘭が姪甥に黄巢の行列の様子を語る。

「金之徳」の袋を開くと、麦粉を固めた黄色の菓子がおさまっている。

「これはどうやら、黄巢の姓の黄は、金の徳の色と言いたいのではないかな。王朝の交替は木火土金水の五行の入れ替えの順序に従い、唐は土之徳とされていきましたから、次なる新王朝は金之徳で、それで黄色の菓子なのですね。なかなかうまく話をつくりましたな」

蘭は菓子を二つに割り、口に放り込む。

「これが金之徳の味か。俺ばかりが食ってはいけないでしょうな。家の者全員に、金之徳の有難さを味わってもらいませんと」

蘭は菓子の残りを韋莠の息子に渡す。息子は手にして珍しげに見て、姉の方に差し出す。姉は首を傾けて菓子をみるだけで手を伸ばさそうとしない。

「渴しても盗泉の水は飲まずですか」

蘭の言葉に、韋莊は己の受け取った袋を卓に置き、

「食べる気にはならん」

莠も黙って袋を置く。

二人の様子に、莠の息子は手にした菓子始末に困り、もじもじする。蘭はそれをつまみ取り、

「俺が一口食って、毒など入っていないのは証明済み。安心して食ってよいのに。色も味もなかなか結構。捨てるには惜しい。昨日の今日で、大勢の人に配るだけの菓子を用意するのは、どれだけ大変だったでしょうか。都の職人が大々的に動員されたのですかな。大行列といいこの菓子といい、黄巢の下には余程の能吏がいるのか、酷吏がいるのか、いずれにしてもすな、これをつくるために大変な思いをした者が必ずいるはずですから、片意地を張って食わぬのもどんなものですか。有難き率土將軍さまの賜りもの」

蘭は菓子を額の前に掲げ、妙に真面目な顔でしげしげと見つめる。ちょうど食事を運びに入ってきた阿枉にそれを向け、

「どうだい、おまえ、食べてみるかい」

阿枉は鼻に皺を寄せ、両手に盆やら何やら持ったままそっぽを向く。

「なかなかうまいものだぞ」

「兄は唐の兵士でございます。そのようなもの、私が食べるとお考えでしようか」

阿枉はやや荒っぽく器を卓の上に置く。

「阿枉にも断られては、この家でこれを食べるのは俺だけですかな」

蘭は菓子を入る。

黄巢の菓子など食わぬとここで意地を張ってみたところでほとんど意味はないのだろう。あの行列を見れば、大勢は決したと思う他はない。唐の皇帝は出ていき、代わって入った黄巢は、圧倒的な力をもっている。蘭が言っていたように、黄巢の方が国を統治する才に長けているのは事実であるかも知れない。

もとより己には武器を手にして賊と戦う力はなく、いまさら抵抗することもないのだから、菓子を食わぬと突っ張っても仕方ない。こんな菓子を配るくらいだから、都の民衆に危害を加える気はなさそうだ。本気になって新た

な世を切り開こうとしているのかも知れない。しかし、たとえそうであっても、いまここで黄巢の菓子を食べる気にはなれない。かつては宰相まで出した韋家の当主である。あくまでも唐の民を貫きたい。まして、阿枉があのよう

に言う前で、黄巢の菓子を口にすることなどできない。
韋蘭は不思議な男だ。言動はでたらめのようにでいて、貫くところがあるかのようだ。

この己には何があるのか。唐の民であると言って、ではこれからどうするのか。都はわずかに二日でがらりと変わり、黄巢の配下に入った。貢奉を受けるとの大きな目標は失われた。我が身の明日をどうしたらいいのか。

陳婆やがいつものようにゆっくりと皿を一枚ずつ何度も確かめるようにして置いていく。不器用なこの女と己はどれほど違うのか。

食事が並び、一日出ていて空腹であるはずなのに、手を出す気になれない。この無力な己の命を長らえさせるために食べ物を口に運んで何になるのか。我が身を生かすのは、我がためではなく、この身を授けてくれた父母への孝

行であると思ひ、箸を持つが、父が生きて都に住んでいた昔を思い起こすと、ここに己が生きていることが恨めしくなる。李兄弟と遊んでいたところが懐かしくてならない。

翌朝、夜明け前にやっとまどろんだばかりの韋莊の枕元に太鼓の音が聞こえてくる。

いつも通りの太鼓だ。世の中は一日で平常通りになったのか。恐らくそうではないのだろう。重い頭を抱えて床を離れる。

とりあえず皆と食事をすませる。無理にわずかばかりの量を口に運んだだけだ。

「これっばかりで」

陳婆やが不審そうに器を下げるのを蘭が止め、

「食えるうちに食っておくべきでしょうに」

と、残ったものを口に入れ、

「様子のわからぬ間は、亀のように首を引っ込めておくのが利巧というものですかな」

蘭は店の戸を鎖したまま、窓辺で、店の主らしく帳簿の点検を始める。

韋荘は何をする気にもならず、蘭の脇で雑書を繰る。

「久しく真面目に見えていなかったもので、銀がいくら持っていたのかさえよくわかりませんな。こんなことでは、商売の建て直しは無理ですか」

黄巢が支配するようになった都で、従弟は商売をどうしていくつもりなのか。見当もつかない。

韋荘が考えられるのは、せいぜいのところ、可能なら、都から逃げた方がよいのではないかと言うことくらいである。遅きに失したとは言え、まだその機会があるのなら、いまからでも逃げるべきではないか。そうするには、無論銀犁のことは思い切らねばならない。

蘭は帳簿から顔を上げ、

「やけに静かですな」

窓より外をのぞき、

「昨日の大行列に疲れて、今日の都は一日休息ですか。昼時分までこんな様子なら、外を見て回って、大丈夫そうなら市へでもいってみますかな」

「様子もわからぬのに、敢えて外に出なくてもよいのではないかい」

韋荘は都から逃げた方がよいだろうと考えていたことを隠して、蘭を止める。

「慌ててせねばならぬことは何もないですか」

蘭はまた顔を伏せて帳簿に見入り、韋荘は書に目を落とす。文字を追つても、頭に入つてこない。

店の戸が叩かれる。

臆が用心深く開ける。武大人だ。十人ばかりの兵士を連れてくる。

にこりともせず、

「いつも通りに店を開けてもらいたい。商売はいつも通りだ。都は何も変ら

ぬ。率土大將軍さまの御威光により、これより日一日と繁栄していくのだ。よいか、わかったな」

武大人は抑揚なしに言う。同じことを何十遍も繰り返したのだろう。腫れぼったい目をしている。言うことを言ってしまうと、碁を打ちたそうなそぶりも見せずにどやどやと出ていく。

臆は言いつけられた通りに、表の戸を開け放つ。

通りには武大人一行の他に人影はない。都は何も変らぬと言われても、実際にそうなるものではないようだ。

道を歩く人がいなくては客はこず、そのうち、雲が流れて日を隠し、しとしとと雨まで降り出す。

これでは戸をまた閉めた方がよさそうだと思っていると、蘭は壁に吊るしてある油衣を被って、ふらりと外へ出ていく。韋荘は書を置いて蘭を店先まで追うが、早足で出ていった姿はたちまち通りの東に小さくなる。左右を見れば、ぼつりぼつりと人の姿がある。この境界はますます平穏そうだ。

韋莊は奥に入り、姪甥とともに書物を読む。

雨の降り出しから次第に寒さが増す。

「どちらにいかれたのでしょうか」

火に薪を加えつつ柳氏は、蘭のことを案じる。

「何かしら考えるところがあるのだろう。あれはあれで大した男だ」

「わかっております。大層知恵のあるお方ですが、人さまとは変わったことをなさろうとする癖があるので、気にかかるのです」

柳氏はよく心得ている。

その蘭は、夕暮れ前に、のっそりと帰ってくる。

「駄目でしたな。都はいつも通りと武大人さまがおっしゃるので、それならと思ったのですが、坊門は開いていても、城門は鎖されておりましたな。雨が降り出しましたから、うまく紛れて逃げられまいかと思いついたものの、どの城門も大勢の兵士が固めて、とても近づけるものではなかったですな」

「城門までいったのかい」

「東の延興門と、南の啓夏門と、二つだけですな。大行列を見て、逃げようと思うのは、都でも兄貴くらいでしょうから、いまは好機と見たのですが、うまくなかったですな」

蘭の眼差しに、

「そなたには何も隠せぬようだ」

韋荘は苦笑する。

そうならそれで、無力な己は、この従弟に頼るしかないのだろう。情けなくはあっても、そのように思ってしまったえば、心は少し軽くなる。

いつも通りに太鼓が鳴ってその日が暮れると、その晩は幾分か眠ることができる。

夜に入って雨は雪になり、翌朝は白く積もって、ことのほか太鼓の音がよく響いてくる。

いつも通りと今日も店を開ける。降り続く雪に出歩く者の姿はない。黄巢はいま都のどこで何か事を運んでいるのか。安邑坊の静かさは、この界限ばかりが世間から取り残されているかのようで不気味である。

「小降りになったら市へでもいってみますかな。都にいなければならぬのなら、商売をしていくしかありませんからな」

蘭が言うので、

「昨日と今日が同じとは限らぬ。危ないことは控えていた方がよいのではないか」

「家においてもくさくさするばかり。都の雪景色を見るだけでも価値はありましよう」

「ならば、私も西周くん、東呉くんを誘って、小雁塔にでも登り、雪の詩をつくってみるとしようかな」

「いやいや、それはとんでもないこと。何もこのいまに小雁塔などにいかずともよいではありませんか。兄貴の身に何かあつては、楊爺に叱られてしま

います」

「危ないと言うのならそなたも同じ。家についてくさくさするのは私も同じ。気散じに表に出たいものだ」

「兄貴は何と言っても貢挙を控えた大事な身ですから。貢挙に合格するまで兄貴を守るのが俺に役目。ふらふら外を出歩くのは感心しません」

「貢挙は当分は行われまい。唐朝が都を回復させるのはいつになることか」

「いやいや、兄貴はすな、西周くん、東呉くんとともに、晴れて新王朝の第一回目の及第者になっていただくのが俺の心積もりなのですが」

「愚かしいことを言うな。昨日は都から逃げると言い、今日は貢挙を受けろと言う。敢えて珍奇なことを言ってみただけなのだろうが、黄巢がもしも貢挙を行ったとして、私はもちろん、西周くんも東呉くんも、頼まれたところで受けるものでない」

「新王朝の基礎固めに大きな功績を残せるせつかくの機会を逃すのですかな。前途洋洋たる率土大將軍さま、この雪は、泰平の世がいよいよ始まるとの瑞

祥ではありませんか」

「思いつくままに、矛盾だらけのことを言うな。雪が瑞祥なら、危険だからと私の外出を止める理屈はないはずだ」

「なるほど。では、小雁塔に登り、この瑞祥を讃える詩をつくって、率土大將軍さまに献じてはいかがですか」

「いよいよもっておかしなことを言う。黄巢に媚びて先祖に顔向けできぬ」

「先祖を怒らせても、兄貴の詩は、子孫に多大な恩恵をもたらしましょう」
「本気でそう思うのかい」

「降るのが雪ではなく、麦や米ならともかく、率土大將軍さまの賜りものの菓子で飢えがしのげたのはせいぜい半日、今日はもういけませんでしょうな。昨日のような人通りの絶えた日が続いては、蓄えのない連中は乾上ります。とすれば、そろそろ何かが始まりましようかな。真面目な話、兄貴には出歩かずに来てもらいましよう」

「そなたも出ないでいた方がよいのではないかい」

「俺は、昔のように乞食にでも化ければ、どこへも平気でいけますな」

蘭は笑うが、すぐに外にはいかずに、莠の店に移って碁を打ち始める。

章荘は姪甥と書を読む。勉強をしていれば、姪甥も己も少しは落ち着く。

区切りがよいところで、ひと息ついて中庭に出てみると、雪は止んでいる。

地面にひと筋の足跡がある。お狐さまの祠の前にいつものように阿枉の背がある。一心に祈る阿枉を池の向こうに見つつ、莠の店に行く。

蘭と莠は余程熱中しているのか、火がすっかり消えている。灰から炭を掘り起こし、火をつけようとす。

とんとんと戸が叩かれ、返事をするよりも先にすつと開き、

「一番、願いましうか」

武大人が入ってくる。一人だ。

蘭が立ってすぐに軽口を叩く。

「足元の悪いところをわざわざお越しいただきまして。お見えになるとわかつておりましたら、お宅からここまで、道の雪を掃かせ、汗が出るほどに火

を焚いてお待ちしておりましたのに、あいにくと愚兄がもたもたと、まだ火をおこし損なっておるようですよ」

「かの王元宝（おう げんほう）の夜宴ですか。旧き世にはそのようなこともあったそうです」

武大人は深く嘆息し、雪避けの長衣を脱ぐ。でっぷりとしていた武大人が細くなつたように見える。

王元宝とは、玄宗皇帝時代の富豪である。ある冬の日、都の屋敷で夜宴を催した。あいにくの大雪、王元宝は、招いた客のそれぞれの家から屋敷まで、道の雪を掃き、屋敷の前に立つて客の到来を迎えた。中は豪勢に火を焚き、門に入ってから宴が終わるまで、客は誰一人として寒さを覚えなかった。

武大人は、

「いまさら遠い昔を追つても」

と肩を落とし、崩れるように座り込む。

「大將軍閣下が都にこられ、世は隆盛へと向かつていくのではありませんか

な」

武大人は返事をせず、覆いかぶさるようにして碁盤に見入る。

武大人は首をひねり、

「これは珍しい闘い方。雀蛤先生以外にこれは考えられません」

「なにせまともに闘ったのでは、莠くんには勝てませんからな。今日はちよいと捻りまして、邪道であるとは重々承知の上です」

「さすが師匠は少しも動じておられません」

武大人は莠のことを師匠と言う。

「莠くんは奇矯な策を弄しても、悠然と受け止められてしまうだけですな」
莠はゆつくりと顔を上げ、

「蘭に皆さんの策は成功しています。このまま蘭に皆さんが黒、私が白で続ければ、白が勝ちますが、ここで私が黒をもち、蘭に皆さんが白をもち、黒が勝ちましょう」

「それなら結局は俺が弱いだけですな」

「いまこの局面は黒が優勢です。問題はここからで、蘭にいさんは手をいっぱいに広げたために、盤上、どこもかしこも闘いの場と化しています。黒には打つべき手が数多くあり、白の方には、黒のどの手に対しも、一つずつの応手しかありません。黒の多くの手の中で私の応手がわずかに及ばない場合が一つあります。蘭にいさんはその手を選ばないでしょう。それで、あと十手も進めば、黒の負けは明らかとなります」

「莠くんにそのように言われたのではどうしますかな。わかった、俺が最も打ちそうにない手を選べばよいのですな」

蘭は腕を組む。

ようやく炭が赤くなってきて、韋荘も碁盤を覗く。

「もしも、私がここで雀蛤先生と交代しましたら、どうなりませうか」と、武大人が幾分か明るい声を出す。

「私が負けるかもわかりません」

「では、勝機を逃さぬよう、私も知恵をしぼってみましょう」

武大人はこめかみを押さえながら考える。

蘭はとんと卓を叩き、

「俺の手は決まりました。兄貴も考えましたかな」

韋荘がうなずくと、武大人も、

「好し」

「では、ここは兄貴から置いてみていただけますかな」

「早見えの私からかい。これは最も平凡な手だろう」

韋荘が置くと、

「それも悪くありません。負けにくい手で、相手によっては勝ちましょうが、

蘭にいさんがここまで打ってきた流れとは相当に異なります」

「蘭くんと私とでは違うのが当たり前」

「蘭にいさんはどうされますか」

「常の雀蛤流を捨て、普段の俺なら思いつかぬ手を打つと、ここですかな」

莠は笑う。

「必ずそこにくると思っていました。今日の蘭にいさんは捻りに捻った手を連発されてしまったから、次はここです」

「裏の裏を読まれましたか」

莠が白を置き、蘭が黒を置き、予言通りに黒の形勢が怪しくなる。

「これは参りましたな。では、武大人さまはどこに置かれますかな」

蘭は置いた石を除いていく。

「お二人に比べると、どうということもない手ですが、ここに置かせていただくことにしましょうか」

「そこですか、これは思いつきもしませんでしたな。となると、これが最も手強い手なのですかな」

「その通りです」

莠は白を置く。

「それはまた何だか弱々しい手ですな、強くこのあたりに置いたら、黒が困りそうなものですが」

「兵強ければ則ち敗れ、木強ければ則ち折らる、でしょうか」

と、武大人は次の石を置く。

「強きは己に及ばぬ者には勝つも、己の及ばぬ者には危うし。天下に常に勝つの道ありて、それを柔と言う。柔なれば、己の及ばぬ者にも、勝たずして自ずから勝つ。そのようにはなかなかいかぬものです」

と、莠が応じ、碁は武大人と莠の勝負に変わる。

蘭は脇で見物しつつ、武大人に黄巢の様子を尋ねる。

入城した日、韋荘たちが見送った黄巢の黒い輿は朱雀門の前で止まった。

大きく開かれ門の左右に、儀仗兵の列が煌びやかに武器を輝かせ、黄巢が皇城へと入るのを待ち受けていた。輿は地面に降ろされ、扉が開き、黄巢は外に出た。色鮮やかな官服を纏い、北向きに地にひれ伏し、額を三度叩きつけた。

黄巢は兵士を門外に出し、門を堅く閉めさせてから、再び輿に乗った。向かったのは、皇帝のお父ちゃんのお田令孜の屋敷だった。都で一、二を誇る大

邸宅に着くと、全ての門を開かせ、中へと入った。同じ坊内の貧者を門前に呼び集めて錢を配り、門を開け放ったままで夜を過ごした。

次の日、すなわち昨日であるが、黄巢は田令孜の屋敷において、都は事無かるべしとの命令を出し、田令孜と同様に民衆の怨嗟の的であった幾人かの大官の屋敷を接収し、その財を貧者に分けた。

「安邑坊にはそのような屋敷はなしですか。それはがっかりですな。俺も黄巢さまのお恵みに預かって、ひと息つきたいものですな」

「立派なお店を構えていながら、何を言いますか」

「いやいや、雀蛤流の甘いところですか。武大人さまに初めてお目にかからせていただいたころに戻ってしまいましてな」

楊銀たちが有り金をもって遁走したことを告げる。武大人は憮然として、

「それはとんだ災難。楊銀がよもやそんな男だったとは。あれとは、子どもこのころからの仲。お互いこんな年になってから、醜い性根を見るようになるとは、悲しいことです」

「銀ばかりが悪いと言えません。要は雀蛤流の落ち度。銀も出さなくてよい本性を出さざるを得なくなったのでしような」

「時勢の悪さでしょう」

武大人は嘆息し、役目柄言つてはならぬことだったと気づき、碁盤に顔を向ける。

「武大人さまが立て直してくださったお蔭で、どうやら黒が優勢を保つていられるようですね」

「大分、悪くしてしまつたような気がします」

武大人は額を打ち、

「これはしたり。碁を打つと、つい時を忘れてしまふ悪い癖。ここらで失礼せねば」

「まだいらしたばかり。お茶も差し上げておりません」

韋荘が止めても、武大人は長衣を着て、

「何かあつてもいけません」

そそくさと出ていく。

武大人を見送ると、路地には薄い日がさし、ほのかに暖かな風が吹いてきている。

暮はまた蘭が引き継ぎ、結局は黒の負けになる。代わって韋荘が莠と向き合って石を置き出し、しばらくすると、店の戸が開き、赤子を背負った初老の男がのっそり姿を見せる。

「お返しにまいりました」

頭をへこへこ下げながら入ってきて、じゃらじゃらと銭を置く。

「これでそっくりあると思います」

莠は顔を上げ、

「確か、胡餅売りの淳さんだろう」

「へい」

齒の抜けた口で笑う。

莠は帳簿を開き、銭を数え、

「ぴったりだ」

帳簿に墨で線を引く。

「これはお礼でございます」

胡餅売りは、何枚か銭を付け加える。

「いいのか、返すだけでも大変だろう。うちは利子は取らない。これはなくて構わない」

莠が押し返そうとするのを、胡餅売りは飛び退くようにお辞儀をして、「まとまった銭が入りましたので。こんなときにお渡ししておきませんか、いつまたあるかわかりません」

「よい儲けでもあったのか。それは何よりだ」

「いえ、有難いことに、これは率土大將軍さまのお恵みでございます。本当に助かります」

「そうかい。ならば、もらって構わないんだね」

胡餅売りは礼を言いつつ帰っていく。背中の赤子はよく眠っていて、泣き

声ひとつ立てない。腹が満たされているのだろう。

「あの爺さん、黄巢の配る錢にありつけたのでしようかな。うまくやりましたな」

「西に二つばかり離れた坊の親父です。土塀の際の檻樓小屋で胡餅を売っているとか。娘がああ赤ん坊を置いてどこかにいってしまい、爺さんが一人。三月ばかり前に錢を借りにきました。返しにくることはあるまいと思っていたのですが」

莠は棚の奥に錢を納める。

「なかなか義理堅い親父ではないかい」

韋莊が言うつと、

「こうして見ると、いまのところはうまくやっているようすな。一握りの金持ちをやっつけて、多くの民衆を手なづける。黄巢がこうだど、莠くんの店に返しにくる者はいても、借りにくる者はいなくなりましたよかな」

「貸したくても、元手はいま返ってきた分だけです」

「黄巢のこのやり方は長く続くのかい。ばらまくだけで、いつまでもよいはずがない」

「俺たち商売人にとって一番困るのは、銭がしまい込まれて世の中に出回らぬこと。黄巢が貧乏人に配ってくれば、ぐるぐる回って、皆が潤いましょうかな、たぶん」

蘭は、しかし、自信なさそうに言う。

「そううまくいくかい」

「そうですね、銭があっても商う品がなければ困りますかな」

韋荘と秀は再び碁を続け、その一局が終わろうとするころ、激しく扉が叩かれる。

「出てこい。因業銭貸し、出てきやがれ」

怒鳴り声。若い男のようだ。

「うちにも黄巢の手の者がきたのですかな。きてもらっても、貧乏人にはらまく蓄えはないのに、御苦労なことですな」

蘭はのっそりと歩き、扉に向かって、

「そう叩かずとも、勝手に入ってくるがよい」

「ああ、言われなくても、入ってやる」

怒鳴りながら扉を開けたのは、まだ十五、六の少年である。

「世の中、不人情な野郎ばかりのさばりやがって。今日という今日は、俺さまがきたからには、年寄りを苛めて喜んでいる不届きな野郎を、許しはしないぞ。覚悟しやがれ」

「なかなか威勢がよいですな」

蘭は飛び込んできた少年をにやにやと眺める。

少年は足を踏み鳴らし、

「三人もいやがる。まあ、いい。まとめて面倒をみてやろう。婆さんを苛めた一番悪い奴はどいつだ、教えてくれ」

外に向かって言う少年の声に、入ってきたのは、この前からきている老女だ。

「悪いのはどいつだ」

少年がもう一度言うのに促され、莠を指差し、

「こいつだよ。この婆めがいくら訴えても、背中を向けて知らん顔。聞く耳もたず、悔しいったらありやしない。ほら、いまだって、ああやって呑気に碁を打っている。ああ、腹が立つ」

老女は卓を蹴る。

莠は顔を向ける。その平然としている様子に、老女はいきり立ち、この前と同じように、火をつけるだの何だのと、ひどく興奮し始める。少年はその背を押さえ、

「今日はこうして俺がきたからには、ちゃんと話をつけてやるからな」

少年はもろ肌脱ぎになり、血の通わぬ因業金貸し、と莠を罵る。莠は全く表情を変えない。

「で、どうして金がいるのですかな。あの菓子では足りませんでしたかな」
にやにや見ていた蘭が間に入る。

少年は蘭を見上げ、

「人様から錢を借りようって言うんだ、困っているに決まっているだろう」と、まくし立てる。

「それはそうですな」

少年は老女の身の上を話す。

老女には三十になる一人の息子がいる。足が悪く、人並みに稼げず、長年の貧乏暮らしから抜け出せずにいた。そこに、神策軍の兵士の身代わりになればたっぷり金がもらえると聞かされ、足をひきずりつつ潼関守備へと向かった。それで老女のところには一生食うに困らないだけの金が届くはずだったのだが、間に入った者に持ち逃げされてしまった。老女はあちこち掛け合ったが、相手にされないどころから、屈強の男どもに殴る蹴るの酷い目に遭わされた。生きている甲斐がないと思ったものの、息子が帰ってくるのを待つだけは待とうと、息子がやっかいになっていた葬儀屋の親方のところで何かしら仕事にありつこうとした。親方は、同情するどころか、息子が借金を

返さずに逃げてしまったのを怒っていて、それを返したならば雇ってやらぬものでもないと言った。それが莠の店に借りにきた理由だった。

莠はそう聞いて帳簿を広げ、

「確かに、前に貸したままになっている。それを返してもらわねば貸せない。それがこの店の決まりだ」

助はそれで老女を追い返したのだった。

「親方のところで働かせてもらえば稼げるんだ。それまでの間だけ、貸してくれてもよいだろう」

少年が不服そうに言う。莠は莠で、

「決まりですから」

と、譲らない。こういうところは厳格である。

老女はいきり立って、例によって騒ぎ立てる。

「これでは埒が明きませんな。おまえ、この前きたとき、俺が言ったのを忘れたのですかな」

「何のことだ」

「黄巢の施し物があるかも知れぬと言いましたな。その通りになったようだから、ここはうちにくるよりも、率土大將軍さまのお恵みに預かったらどうなのですか。たくさんの銭をくれるそうではないか。おまえたちは聞いていないのかな」

老女は眉間の皺を深くし、

「何が率土大將軍さまのお恵みだ。腹が立つ、腹が立つ。貧乏人に銭をくださると聞いたので、この婆だっけって試みた。ここでは貸してくれないことはわかっていたからな。雪の中を歩いてみたんだ。ところが、あいつらときたら、この婆に銭をくれるどころか、洩もひっかけようとしな。『糞婆、あつちへいけ』だと。もらったのは、銭どころじゃない、背中に棍棒を一発だ。それでこの婆にはよくわかった。黄巢もあんたがたも同じ。こんな老いぼれを相手にしても何の得にもならないと。いまいましいたらない」

蘭は手を打ち、

「これは感服ですな。黄巢の本質を見抜くとは、おまえは大した眼力だ」

「ろくでもない奴ばかり。旦那方のようにぬくぬくとお暮らしの方にはおわかりにならないでしょうが、世の中、どいつもこいつも酷いものだ」

「いやはや、この婆さん、俺は気に入りましたな。で、婆さんの助っ人に出たおまえも、よい心意気をしている。婆さんを助けるのなら、ここにこないで、婆さんの代わりに率土大將軍さまのお恵みをもらってきてやったらよいではないか。おまえにならくれるだろう」

「冗談言っちゃいけない。旦那がどんな御身分のお方か知らないが、こちらら、先祖代々、正真正銘の長安の貧乏人。皇帝陛下と同じ水を飲んで三百年。それが何よりの自慢。昨日今日入ってきたばかりの盜賊野郎の黄巢なんぞに、おかしくって銭がもらえるかってんだ。笑わすな」

「これはますます威勢がよい。大いに気に入りましたな。だが、世の中はいつまでも同じではない。三百年続いたものでも終わるときがある。お上は都を出ていかれ、帰ってこないかも知れない。豪傑で名の知れた張直方さまで

ささえ率土大將軍さまをお迎えにいった。古い昔にこだわっていても仕方ないのではありませんか」

「これだから金持ちは嫌いだ。利に走るばかりで、節操がない。張直方の野郎も全く見下げ果てたものよ。天下に恐れる者のない大親分と慕っていたが、変わり身の早さにはがっかりだ。こちとら裸の身、この世に裸で生きられる場所ならいくらでもある。だから、義を知って、義のままに生きるってところを見せてやれるんだ」

「大したものだ。この若者に、どうですか、莠くん、貸してやっては」

「しかし、帳簿が」

莠はあくまでもこだわる。

蘭は懐から銭を出し、

「ひとまずこれで帳簿を消して、さっきあの爺さんがもってきた銭を、婆さんに貸してやってもらえませんか」

蘭にそのように言われては、莠も従わない訳にはいかず、婆さんに銭を渡

す。

二人はそれでおさまって出ていく。

「あの婆さん、これで首尾良く葬儀屋の親方に雇ってもらえますかな。これからは葬式が増えて、大忙しになるでしょうかな」

「そうなのかい」

「黄巢の出方一つですか。葬儀を出すだけの暇があればまだましですか」
「不吉なことを言うでない」

韋荘は従弟をたしなめるが、昨日、今日のような日々がこのまま続くはずもないのだろうか。

いつの間にか、短い冬の昼、市まで往復する時間はなくなり、その後は何事もなしに一日が終わる。

翌日はよく晴れ上がり、厳しい冷え込みである。

蘭は今日こそはと、

「倉の物をいくらかでも捌いて、銭に替えてきませんと、商売も何もできませんからな」

もう少し様子が見えてからにしてはと止めても、

「昨日の爺さんや婆さんが平気で外を出歩いているのに、俺がすぐその市にまでいけぬ理由はないですな」

臆に小さな荷を担がせて店を出ていく。

「くれぐれも気をつけるのだぞ」

見送りに出た道に凍るような風が吹いている。

いけるものなら平康坊までと思いきもするが、それはあきらめるべきことと、風を身を竦ませて店に戻る。

蘭と臆に代わって店の番をしつつ史書を広げる。

文字を追ううちに、あきらめると思ったばかりの銀犁のことがしきりに心に浮かぶ。それを振り切って史書に集中しようとしても、すぐにまた同じと

ころに心が戻っていく。

あれから五日が経った。仙水楼に通うようになって、銀犁と会わぬ日が五日も続いたことはない。銀犁に明け銀犁に暮れた日々だった。それほどまでに思っていた銀犁をあきらめめるのか。

当然である。銀犁を思う余り、長安から脱出する機会を失い、銀たちの出奔を誘発した。そのような失態を招きながら、韋家の当主ともあるう者が、これ以上、妓女にうつつを抜かしている訳にいかない。柳氏に顔向けならなし、姪甥にも示しが見つからない。一時の迷いであつたと、あきらめめる以外に何があるのか。

これで五日が経ち、そのうち十日が経ち、ひと月となっていけば、世の中が急速に変わっていくのに押し流されるようにして、銀犁のこともいつかあつた遠い昔と、薄れていくだろう。いま少し辛抱して待てばよいのだ。

それはかつてと全く同じだ。揚州を離れ、虢州に戻り、時が経てばそのうち忘れられると思つたのではなかったのか。同じことを二度としないと、銀犁に

向かって言ったのは、己ではなかったか。

身の内に焼けるような熱さを感じ、座り続けていられなくなって立ち上がる。南山でもこの心を焦がす熱さに苛まれる。

店の中を歩き回り、いまずぐに平康坊にいつてしまおうかと思ひ、しかし、それでどうにかなるのか。金をもたずに行ったところで、崔婆は銀犁に会わせてくれない。崔婆を跳ね除け、銀犁を奪って逃げるのか。それができるのか。その後はどうするのか。ここに連れてくるのか。二人して他所に逃げるのか。あるいは死ぬのか。全て破綻か。銀犁とならそれで少しも構いはしない。

ただちに平康坊にいくしかないかと心を決めかけ、なぜ銀犁をそこまで思うのかと、己の心を省みる。銀犁への愛は本物なのか。銀犁が嫋嫋のところにした桂児でなかったら、このようなことになっただろうか。桂児でないのなら、そもそも銀犁との出会いはない。銀犁を愛しているよう見えて、実は、己は嫋嫋への罪滅ぼしをしようとしているのではないのか。

そうであるのかも知れない。本当に愛しているのは目の前の銀犁ではなく、嫋嫋であるのか。もしかして、銀犁はそのことを知っていて、嫋嫋の身代わりとして振る舞っていてくれたのか。

だから、あの日あのようなことを言って、もうこないようにと、戸を鎖したのか。

そうであるのかも知れない。己は、銀犁を愛しているようでいて、実は銀犁を苦しめ続けていたのだろうか。

思はいよいよ混乱し、とにかく平康坊にいつて、いまのこの気持ちを銀犁に伝えるしかない、その一心で扉を開く。

そこに向かいの官人の弟が立っている。弟はびっくりした顔で後ずさりする。韋荘は、心の内の葛藤を押し殺し、努めて普段通りの声を出そうと、

「どうかされたのか」

「いえ、何がどうというのではなく」

口ごもる弟を内へ招き入れる。背中を丸め、だらんと手の垂れ下がった姿

で入ってくる。

兄は皇帝の脱出した夜から、ずっと帰っていないと言う。あの日は皇城の泊まり番で、あれからどうなっているのか、母も姉も心配で、食事も喉を通らず、夜は眠れず、このままでは家族三人、参ってしまおうと訴える。

韋莊は阿枉を呼び、官人の弟のために茶を入れさせる。

熱い茶を口にして、官人の弟の顔にわずかばかり赤味がさす。

阿枉をそのまま店に居させ、韋莊は読みさしのままになっていた史書を取り上げ、その中の一節を読み上げる。

「將軍、前に南陽にありて大策を建つ。かつて思うに、落落として合し難しと。志ある者は事ついに成る」

漢王朝を再興させた光武帝の言葉である。

將軍とは耿弇（こうえん）のこと。漢は王莽（おうもう）に皇位を奪われ、その王莽の失政によって、反王莽政権の反乱が各地に勃発した。光武帝も数ある反抗勢力の一つで、初めは極めて弱小な存在であった。そのとき、耿弇は

大略を立て光武帝に勧めた。光武帝は、大きすぎる計画は成就するはずがないと尻込みした。実際には、耿弇の言った通りとなり、漢の再興という大業の成らんとするときを迎え、「志ある者は事ついに成る」と、光武帝は言ったのである。

韋莊は光武帝が漢王朝の甦らせたいきさつを語る。阿枉と官人の弟を少しでも力づけようと思うからだ、

「必ず、気を落とされませぬように」

官人の弟を送り出すと、阿枉は、

「兄も必ずやお上とともに都に戻ってきましょうか」

と、潤んだ眼で言う。

「ああ、そうに違いない」

阿枉の眼に銀犁を思い、つい今しがた平康坊に飛んでいこうとした己と、光武帝の偉業を語った己との余りの相違に、この身を阿枉の前に置いているのが恥ずかしくなる。己はいったい何がしたいのだ。

阿枉は茶の道具をもって奥にいき、店に一人残って、平康坊にいこうとの気は砕け、言い知れぬ焦燥感に責められ、しかし、思考は同じところに留まり、結局はぼんやりとしているだけになる。

「買っていただきたいものがあります。見ていただけでしょうか」

小柄な男がぬつと入ってくる。

「あいにくとこの主人は留守なのだが」

男は小さなからだを屈め、上目遣いに、

「見ていただくだけでも」

勝手にずんずんと入り込んでくる。

背中に、襪褌切れ同然の、かろうじて衣服とわかるようなものをひっかけている。垢で黒くなった足は膝から下が剥き出しで、つま先にぼろぼろの履物らしきものをひきずっている。異様な臭気に、韋荘は後ずさりする。

「何かもつてこられたものがあるのなら、ここに置いて、拝見するだけなら私でもできようから」

韋莊は大きな木の卓を指さす。

男は脇に抱えてきた荷を上に乗せる。藁で編んだ汚い袋、埃が舞い上がる。

韋莊は男からなるべく離れた場所に立つ。

「これでございます。おいくらでも、買っていただけるものなら、構いはしません」

爪の先まで真黒な手を突っ込んで、袋から出してきたのは、目を見張る鮮やかな錦の布で包まれたもの。紐をほどくと、巻軸がごろんごろんと五、六本出てくる。いかにも由緒ありそうなものだ。

韋莊は男の顔を改めて見る。痩せて頬骨が浮き出し、窪んだ眼、終始前屈みで視線を上げず、気が弱そうにも見えるが、油断のならぬ相手のようでもある。

「では、見るだけです」

韋莊は一つを手にし、布切れを口に挟み、紐をほどく。巻いたものを大きな卓の上に広げていき、思わず息を呑む。

「これをどうされました」

男はいよいよ身を小さくし、

「それはお聞きにならないでくださいませんでしようか」

「怪しいものは買えません」

「決してこちらさまに御迷惑をおかけするようなことはありません」

蚊の鳴くような声だ。本当に気の小さい男らしい。それにしても、身なり

とこの品、とんでもない開きがある。

「しかし、いわれのわからぬものは、私も困りますので」

韋荘はそう言いつつ、蘭だったらどうするだろうかと考える。

「だめでしょうか」

男は一層小さな声で言う。

「店の主人はいまは留守なのだ。私の一存で、妙なものを買って、叱られてしまう」

韋荘は相手を焦らすように言う。

男は視線を床から店の入り口へと振り返り、

「いくらでもよいのです。いまずぐに買っただけませんか？」

「そう言われても」

韋荘は広げた書を見て、これは何としてでも手に入れたいと思っている。

間違いない顔真卿（がん しんけい）の真筆である。顔真卿は安祿山の乱を鎮めるのに奮闘した英雄であり、書の名手である。雄渾な筆遣いに韋荘の心は震えている。

「銭の何枚かでもいただければ十分なので」

韋荘は、男が小さくなっただけなのに哀れになり、己の手文庫に残っている銀の半分ほどの数字を挙げ、

「これが手付として、あとは主人が帰ってきてからでどうか」

男は顔を上げ、額の汗を拭い、

「滅相ありません。それだけいただきましたら、もう十分でございます」
残りの軸はまだ見ていないが、同じように価値のあるものだろう。安く買

い過ぎて気の毒な気もするが、話はそれで決まりだ。

奥に入って銀を取ってくると、男は卓の前で小さくうずくまったまま。銀を渡すと、

「こんなによろしいのでしょうか」

「それは手付けだ。明日またくれば、主人がいくらか上乗せしてくれるだろう」

その金額では顔真卿に対しても申し訳ない。

「十二分でございます」

男は店の戸を開け、さっと走って行ってしまふ。

開けたままの戸を閉め、他のものも検分すると、いずれも唐の初めから玄宗皇帝の時代にかけて書かれた価値あるものばかりだ。なぜこのような品が、何もわからぬあのような男の手に渡ったのか。黄巢があちこちで没収しているという邸宅から出たのだろうか。破綻の憂き目に遭ったのはどの家なのか。

顔真卿の書に力付けられると同時に、逆に、己の卑小さに恥じ入らされるも

する。一人の妓女のために思い乱れているときではなく、唐の再興のために戦うべきときであるはずだ。

だが、己は武人ではなく、官人でもない。皇帝は早々に逃げ、豪傑といわれた張直方は真っ先に黄巢に跪いた。己一人が何をするのか。光武帝のような大英雄になれるはずもなく、我が一族を守る力もない。阿枉一人の幸せも守れず、そして銀犁も如何ともできない。この上なく無力な男だ。貢挙に受かって唐のために尽くすと言った心意気はどうしてしまったのか。ただの虚言だったのか。そうであったかも知れない。二十年振りに貢挙に挑むとは、まことは己に過ぎたことだったようだ。都にきて試験が近づくにつれ、知らず知らずに心がその重みに耐えがたくなり、たまたま銀犁と出会ったために、その愛に溺れ、現実から逃れようとしたのではないのか。一時の快樂に身を任せられるのだったら、それは銀犁でなくてもよかったのではないか。

銀犁はどうだったのか。己をどう思っていたのか。嫋嫋の身代わりとして、愛してくれているような素振りを見せていただけなのか。あるいは、崔婆の

言いなりで、金のためにだけだったのか。そんな不実であるにも拘らず、足繁く通う韋荘に申し訳なくなり、もうこないようにと戸を鎖したのか。

そのようなことは断じてない。己も銀犁も真に愛し合っていたのだ。そのことを確かめ合うためには、やはり仙水楼にいくしかないと決めかけて、卓の上の顔真卿の書に目をおろす。うじうじとした己の心と、気迫のこもった墨痕と、恐ろしいばかりの相違に、打ちのめされたように足の力が抜ける。

蘭が帰ってくる。

「何をしているのですかな。兄貴も妙なときに勇気を奮っておられるのですな。それは顔真卿の書ではありませんかな。よりによってそんなものを広げてしげしげと眺めているとは。黄巢に逆らうと、名乗り出ているのと同じではありませんかな」

「たまたま売りにきた者があっただけだ」

ややしどろもどろになって、先ほどあったことを告げる。

「売れたので、そいつはさぞほっとしたでしょうな。顔真卿の書など持って

うろろうろしては、どんな咎めを受けるかわかりませんからな」

「いや、あの男は、何を持っていいのかまるでわからぬようだった」

「それにしても、顔真卿の書ですか。普段ならその値で買ったのは兄貴の手柄だとほめて差し上げるのですが、この御時勢、売れますかな」

「唐の御世に戻れば、ぐっと高くなるだろう」

「いつそうなりますかな」

「志ある者は事ついに成る、だ」

「光武帝ですか。顔真卿に光武帝とは、兄貴は勇ましいですな」

「そうあるべきと思うだけだ」

韋荘は書を巻き戻す。

「兄貴に払っていただいた分は、早速これで」

蘭は銀を出す。

「市では商売になったのかい」

「表向きはいつものままでしたな。人も大勢出ていました。率土大將軍さま

のお恵みを懐に買いにくる者もあれば、この店にきた男のように、俄に手にしたお宝を売ろうとする者も大勢いるようでしたな。倉から持つて出た品も、どうにかこうにか捌くことはできましたが、足元を見られて、数分の一の値にしかありませんでしたな」

「売り買いがなされているのならまずはよいではないか」

「楊臆にいま奥に持つていかせた野菜や乾し肉は、表では普通の値でも、実際に買うとなるとほぼ十倍でしたな。差し引き残ったのも、顔真卿の書ではぼ消えてしまいましたな」

「これは、私を買ったことにしようではないか」

韋荘は銀を押し返す。

「いやいや、店番を頼んだのは俺ですからな、ここは兄貴に損をさせる訳にはいきません。それはそれとして、実は悪い話がありましたな」

「どうせいまの都は悪い話ばかりだろう」

「これは平康坊の色街のこと。早速、兄貴の顔色が変わりましたな」

「そのようなことはない」

「聞けば、黄巢がすっかりあそこを買い上げてしまったようすな」

「買い上げたとは」

「紅の絹で髪を結んだ黄巢の兵士しか入れなくした。つまりですな、黄巢が平康坊の妓女を全て買い上げ、兵士に与えたのです。どう思いますかな」

「どうと言われても」

韋荘は目眩を覚える。

「崔婆の目論んだ通りですか。なかなかどうして、黄巢は大した男なのかも知れませんか。崔婆の言っていた通り、兵士がまずほしいのは金と女。賊が街に入れば、手当たり次第に金を奪い、婦女子を犯さすのが常。黄巢は長安にきて、それを防いだのですから、これはただ者ではないようすな」

街の女を救うために平康坊の妓女があてがわれているのか。銀犁もその一人で、黄巢の兵士の誰かの慰みものにされているかと思うと、居ても立ってもいられなくなる。しかし、平康坊はいまは黄巢のものになってしまったのだ。

顔真卿のような英雄が現れ、いますぐにも黄巢を追っ払ってくれないかと、夢想するしかない。己自身では何もできないのだから。

翌日、夜中に目が覚め、そのまま眠れずにいると、太鼓が鳴るにはまだかなり前、こつこつと戸を叩く音が聞こえてくる。莠の店の方だ。

楊臆が起きていった心配がして、武大人が一人でやってきたと蘭に告げる。韋荘も追って店に行く。中庭を突っ切ると、空は厚い雲に覆われている。

灯りに照らされた武大人の顔は腫れぼったく、しきりにまばたきをしている。

蘭たちの挨拶に武大人は言葉を返さず、

「よもやそのようなことはないと思うが、もしもこの家に唐室につながるお方がおられたならばしかるべく対処しておくように。あるいは、もしもそのようなお方の御所在を知っておられたなら、よろしいか、即刻忘れるのだ」

絞り出すような声だ。

蘭は口を曲げて渋い顔、無言でいるので、韋荘が答える。

「おっしゃられることで思い当たるところは何もございません。家には常と変わるところはありません」

「ならば結構。今日は決してここから出ませんように」

武大人はすぐに去る。何故かと尋ねるのは憚られる。

路地に細かい雪が舞い始める。

「いよいよなのか、早くもなのか」

戸を閉めた後、蘭がぼつりと言う。

「何がだい」

蘭は答えず、壁にもたれ何やら考え込み、

「残された手はお狐さまに祈るだけですかな」

蘭は店を出て、祠に祈りを捧げる。この前もこのようなことがあった。

朝の太鼓が鳴り、食事をとり、いつものように店を開ける。雪は時折舞う

程度、街の様子は取りあえず普段と変わりがない。

蘭は、倉から木を持ち出し、楊臆とともに何やらつくり始める。

「こんなものが役立つかどうかわかりませんが」

門や戸や窓を嚴重に鎖すために木の枠だと言う。

韋荘も少しばかり作業に手を貸していると、珍しく西周くんと東呉くんが訪ねてくる。

二人ともまだ三十にならずで、血気盛ん、とくに東呉くんは大いに憤慨した様子で、都には誰一人として黄巢と戦う者がないと嘆く。

皇帝が逃げた翌日、二人はその後を追おうとして、門から出そこなったという。二人が皇帝の脱出を知ったのはその日の午後になってからだだったので、門に達したときには、張直方の命令で嚴重に鎖されていた。「忠義の士を無理に止めるのか」と、東呉くんが怒鳴っても、兵士に押し返されるだけだった。東呉くんは黄巢の大行列に石を投げ込もうとして西周くんに止められ、もう一度、都の脱出を図って、黄巢兵士に殴られた。

「随分と危ないことをしたものです」

韋荘は、東呉くんの額の傷をのぞきこむ。

「心ならずも都に残り、一矢報いてやろうと思つても、武器はなし。仲間もおらず、どうにもなりません」

東呉くんは髭を捻つて苦笑する。

そんな二人を勇気づけようと、

「よいものが手に入りました」

と、昨日の顔真卿の書を見せる。

東呉くんは、いよいよ悲憤慷慨し、

「いまここに顔真卿に匹敵するお方が現れるのならこの身を捧げるのを何も惜しみはしない」

と、泣かんばかり。

阿枉が茶と菓子を運んでくる。

「このような結構なものが頂けるのも、いつまででしょうか」

西周くんがしみじみと言う。

「そこなのですが」

東呉くんが急に神妙な顔になって切り出したのは、都の脱出に失敗し、残り乏しい手持ちの銀子では米も手に入れるのが難しくなってきたと、頭を下げる。

「それくらいのことなら」

と、韋荘は米一袋を二人に持たせる。

二人はしきりに恐縮しつつ、小雪の舞う道を去っていく。

見送る道の遠くどこかからか、普段は聞かれぬ低い音が伝わってくる。何であるのかわからぬが、武大人の言葉が気になり出す。

二人が宿にまで無事に着けばよいかと案じつつ、表の戸を閉め、中庭にいくと、蘭たちの作業はまだ続いている。外で聞こえた音は、他所でもこのようなことをしているだろうと考えて、己を安心させようとしようとする。

阿枉がいつものようにお狐さまに祈っている。韋荘もその後ろに立つ。今

日はこれで二度目だ。

楊爺も狐潭で同じように祈っているだろうか。都と虢州と互いに離れ、様子を知らることができない。お狐さまは両者の思いを同時に受け止めてくれていると信じたい。

また妙な音が聞こえてくる。人の声も混じるようだ。

「どうしたのでしょうか」

阿枉が怯えたように振り返る。

「案じることはない」

韋荘は阿枉の肩の雪を払ってやる。随分と長いことここに立っているのだろう。すっかり青褪めた顔をしている。

阿枉は韋荘の親切に驚き、池の橋を渡って、奥へ行ってしまふ。

後を追うように奥の部屋にいき、火にあたって、姪甥の勉強をみてやる。

はつきりと大きな音がした。東隣の屋敷だ。どたんばたんと、尋常ではない何かがおこっている。

韋莊が立ち上がると、柳氏が剣をもつて入ってくる。

娘を呼び寄せ、

「これは韋家に参る際、亡き父上の形見として母上より頂戴しましたもの。もしも事ある際にはこれだと、母上の教えです。そなたもよく覚悟をしておくように」

柳氏は剣を抜いて娘に見せる。

韋莊は表の店にいく。蘭が突つ立っている。

「俺はとんだしくじりをしたようだな。いまさら間に合わない」
蘭はつくりかけの木の杵を蹴飛ばす。

「もともとは私のせいだ。都から逃げなかったのがいけないのだ」

「黄巢に少しでも期待した俺が間違っていたのですな」

その言葉が終わらぬうちに、戸が激しく叩かれる。

扉の脇に立つ楊臆が見返る。

「いまさらどうにもならぬ」

蘭は開けさせる。

兵士の一隊がなだれ込む。全員が白刃をむき出しだ。楊臆は隅の壁に飛んで下がる。

頬に髭を垂らした隊長らしき者が進み出てきて、

「皇族に連なる者を匿っていないか。隠れている場所を知っていないか。正直に言え。嘘を言うただではすまぬぞ」

蘭と韋荘の目の先で剣を振るう。二人は手を垂れ頭を下げ、

「ここには私ども一家の他には誰もおりません。おっしゃられるようなことは何も存じません」

蘭が答える。兵士の一人が臆を突き倒し、どやどやと中に入ってくる。

「抵抗すれば斬る。おとなしく外に出れば、危害は加えぬ。よいか、女たちも一人残らず、外に出るのだ」

隊長は怒鳴りながら蘭の前を通って踏み込んでいく。腰に当てた後ろ手に、蘭が銀の塊を滑りこませる。隊長はそれを握り、

「おまえが先にいって、中の者を連れ出してこい。わしは、庭の方を見てくる」

と、蘭に顎で指図する。蘭は柳氏たちを外に連れ出す。

「手を頭の上に載せておくのだ」

兵士が怒鳴る。

雪の舞う中、皆が外に並ぶ。莠が路地の方から出てくる。

中ではたばたと戸を開けたり、壁を叩いたりする音がする。

隣の医者の家でも同じことが始まっている。太遅先生は戸口のところを右往左往し、兵士に小突かれ、手を上げ騒ぐのを蹴飛ばされる。中から美しい着物をまとった女が次々と連れ出される。噂に聞いていた愛妾たちだ。兵士は女の頬をつつき、尻を撫ぜ、淫らな言葉を浴びせる。医者はその前でおろするばかり。

隊長が出てきて、

「ここはすんだ。おまえたち、中に戻ってよいぞ。こんどは向かいだ」

兵士の一団は荒々しく官人の屋敷へと入っていく。

東隣で女の悲鳴がする。外に並んでいるのは召使たちだけ、才媛と名高い三姉妹の姿はない。唐室とのつながりもある名家、厳しい詮議がなされているのか。

柳氏たちを先に中に入れて戸を閉める。今度は官人の家で女の悲鳴が上がる。どうすることもできない。

後はひたすら息を潜めているうちに、街の騒ぎは次第に遠くへと移り、夕刻までにはどこもおさまって、太鼓の音が陰々と響く。

雪は大した降りにならずに止む。

次の日は雲が残って朝から暗い。

昨日の騒ぎで街がどうなったのか気にはなるものの、さすがの蘭も外に出るのは躊躇され、時々店の口から覗いてみるだけである。

道は静かで、西隣も東隣も物音一つしない。次にどのような不幸が襲ってくるのか、それまでの間を、息を潜めているしかないのか。

昼少し前になって、驚くことに、向かいの官人が従者を引き連れ馬に跨って皇城から帰ってくる。

「外の道は通じているようですな。ならば、ちと市にでもいってみますかな」

「よした方がよいだろう。まだ何かあるかも知れないぞ」

「いまなら手立てがあるのかも知れませんが」

「手立てとは」

「取り戻せぬかと思いましたが」

「何をだ。悪いのはこの私だ。そなたに無理はさせられぬ。武大人さまがお見えになって、都の様子が知れて、安心とわかるまではここにいたるのがよいだろう」

韋荘に止められて、蘭は渋々店に留まって、昨日の作業の続きを楊臆と始める。

しばらくすると、官人の弟がやってくる。

「御心配をおかけしましたが、幸いにも兄は無事で帰ってきました。皇城の仕事は何かと忙しいようで、今日一日だけの休みが頂けたとか。母も姉もひとまず安心したところですよ」

礼を言う弟はほっとした表情である。

「それはよかった」

「さすがに兄は疲れているようですが、もともと丈夫な方ですから、一晩、休めばきつと大丈夫でしょう」

「皇城の中は変わらぬのでしょうか」

「兄は何も話せぬと申しています。兄のように官位の低い者は、どうやら元の役職のままとどまっているようです」

「なるほど、それはそれは」

「よいのやら、悪いのやら」

韋荘と官人の弟はやや複雑な表情でうなずき合う。官人の兄は、はからず

も黄巢に仕えることになってしまったようだ。

「ところで、昨日はお宅の方から悲鳴のようなものが聞こえてきたように思いましたが、何かあったのではありませんか」

「お耳に入ってしまったか。あれは姉でして。いえ、傷付けられたりとかいうことはなくてすんだのです。姉が嫁ぐことになりそうだった先の家が、皇室と遠い繋がりがありまして、兵士はそれをどこから聞いたものか、その点を手厳しく追及されて、恐怖の余り叫んでしまったのです。母が、咄嗟に、破談になったと言ひまして、どうにか納得してもらいました」

弟はそんなことを言いつつ、申し訳なきように、帰ってきた兄に精を付けさせたので、肉か魚の持ち合わせがないかと尋ねる。蘭が昨日買ってきた乾し肉があるのを分けて持たせてやる。

昼になって、薄日も差し出し、外を歩く人もちらほら見られるようになる。

己の部屋で本を読んでいると、蘭がやってきて、

「こんなものまで出回っているのですな」

いま店に売りにきたのだと見せるのは、精巧な象牙細工。

「しかも、ここに札までついておりますな」

宮中に所蔵されていた南蛮諸国からの貢納品だ。

「どこから手に入れたのだろうか」

「尋ねても、むろん答えませんでしたな。手元不如意で、よほどのものではないと買わぬつもりでも、これはまさしく逸品。この屋敷を十や二十、束にしても手にできぬもの。それがただ同然ですからな。道で廃れさせるのも惜しいと、買いました」

「また、お客さまで」

臆が呼びにくる。

「買ってくれる客ならよいが、買う金はありませんのにな」

蘭が出ていき、韋荘は象牙細工を手にする。皇女の誰かの手にでも触れたであろうか、己ごときの掌に載って良い品ではない。

これ一つで、国を傾けるような宝。仙水楼も軽く買えよう。そうなら銀犁

も請け出せるとあらぬことを考え、しきりに嘆息する。

蘭が大きな包みを抱えて戻ってくる。

「何だい、また買ってしまったのかい」

「このまま焚きつけに使っても惜しくないくらいの値でしたからな」

蘭は荷をほどく。

「書画の類なのかい。まさに乱雑に束ねた反古紙か」

「いや、上の方に、一つ面白いのがありますな、これを見たら、兄貴だつて買いましょう」

蘭が抜き出したのは一枚の羅漢図。一目でわかる。この独特の筆使い、貫休のものだ。

「これは懐かしい。どうしてここに」

「巡り合わせの妙というものでしょうかな」

詩が添えてあり、洛陽の僧に贈ったものであるらしい。

「婺州が賊に襲われたとの噂を聞いたのは夏であった。遠くお上人さまの身

を案じたものだが、今度はこちらが賊に囚われの身。そこにこの画が巡ってくるとは」

「この世ではもはや会うことはないのです、せめて画でとのお上人さまの心遣いでしようかな」

「妙なことを言うでない」

「風任せの俺が風を読み誤り、手も足も出ずにいるので、この世の迷妄を払って後の世を思えとの、お上人さまの有難い教えかも知れません」

「珍しく弱気なことを言う」

「俗気の強すぎる俺ですからな、教え導こうとしても無駄と、お上人さまは知っておられるはずでしょうに」

蘭は弱々しく笑う。

揚州の仏蕃の堂で、迷妄の底に達してこそ初めて迷妄の外に出られると言った貫休の言葉が甦ってくる。それで嫋嫋と別れる決意をしたのに、またこうして銀犁を思っている。まだまだ迷妄の底に達していないからなのか。銀

犁と出会ったのは、迷妄の底へと達するための試練なのか。

貫休の画に見入る間に、蘭は店に戻っていく。

昼過ぎになって店に出てみると、蘭は浮かぬ顔でぼんやりしている。

「後世を思うしかありませんかな」

「どうしたのだ。またそのようなことを言って」

「先ほど臆を街にやって聞かせてきたところでは、昨日は安邑坊ばかりでなく、都全体で一斉に搜索が行われ、皇族の方々が多数捕縛されたとか。千人は下らぬという話です。安邑坊では、武大人さまがうまくはからってくださったので、あれくらいですんだようですが、別の坊では、かなりの数の死人も出たようです。あの夜に、皇帝とともに逃げたのは四人の兄弟と、幾人かの妃だけ、皇族のほとんどは逃げ損ない、宮城に残っていた者は幽閉され、民家に潜伏していた者も昨日で根こそぎ囚われの身。哀れなものですな」

「つい数日前までは人に羨まれる御身分であったのに」

「いまは皇族に生まれたのを恨んでおりましような」

「世の変転とはこのようなものであるのか」

「たぶん、これで終わりにはならないのでしような。皇族の次は由緒正しい家系を誇る名家の面々ですか。俺たちも京兆杜陵の韋氏、そのうち順番が回ってききますかな」

蘭は笑う。

「わざわざ捕まえるほどの家ではあるまい」

「京兆杜陵の韋氏でも、その中の我等にまで行き着くには、長安の民の半分くらいを捕まえないとなりせんかな」

「黄巢が長安の民を根こそぎ殺すつもりでいるのなら、そうなるだろう」

「長安には人が多すぎますかな。黄巢に期待しかけたのは俺の失敗でしたな。こうなる前にどうにかしておかねばならなかった。遅すぎましたな」

「それは私がいけないのだ」

いつもと同じこと繰り返す。

蘭はふと遠くを見て、

「兄貴、覚えていますかな、最初の旅で、虎の刺青をした劉赤虎とかいう男に会いましたな。威勢のよい若者でしたな。俺たちもあのころは若かったですな。あの旅からあのまま虢州には帰らずに、劉赤虎と一緒に蜀にでもいったら、どうなっていましたかな。いまごろはあちらで皇帝を迎えることになっていましたかな」

「そうであった。あんな男もいた。懐旧の情に浸るほど我らも齡をとったよ
うだ」

「汴州で貫休どのに会ったのは二度目の旅の初めでしたな。あのとき、貫休どののは、兄貴が官人になると言いましたが、あれは大きくはずれましたな。南山で貢拳を受けると兄貴が言ったとき、俺はそれを思い出し、ひよつとしてそれが当たるのではないかと思っただけですが、黄巢が先にきてしまっただけじゃなかったですな」

「貫休どのもあれでなかなか処世の術に長けたお方だ。人の気を引くようなことをおっしゃってみただけなのだろう」

「それに廬山の愚笠子も、叔母上の前で、兄貴が宰相になると予言しましたな」

「あれは、助を使って、そなたが言わせたのだろう」

「いやいや、俺は何もしていませんな」

蘭は笑う。

「いずれも、いい加減な予言だ」

「まだ当たらぬと決まったものではありません。来年の春に貢筆を受けて、黄巢のもとで宰相となるのなら大いにあり得ること。きっとそうなのですか」

「黄巢に期待したのが失敗だったと言ったばかりで、またそのようなことを言う。逆賊に仕えたりしては、あの婆さんと一緒にやってきた少年にさえ顔向けできない」

「しかし、世の中がおさまってくれるのが一番ではないですか。向かいの官人も、黄巢に仕えて、それでことなきを得て、よいではありませんか」

蘭は何が本気なのかわからない。

阿枉が顔を出して、武大人が莠の店にきていると告げる。

中庭を過ぎると、淡く日は傾いている。

例によって武大人と莠は碁盤をはさんでいる。武大人の背中がここ数日で小さく縮んでしまったように見える。顔を見ると、こちらは逆に膨らんでいるかのようで、変な具合に赤い。

蘭と韋荘が座ると、

「いまごろは西の市で処刑が行われているでしょう」

武大人はぼそりと言う。皇族のことを言っているのだろうと、容易に推測できる。

莠が石を置くと、蘭は、

「では、見にいけますかな」

武大人はじっくり考えてから石を置き、

「いまからいつでも間に合いませんでしょう」

莠が沈思し、次の手を打つのを待って、蘭は、

「千人もいれば、今日中に終わりますかどうか」

武大人は大きく溜息し、しばしあつて石を置き、

「今日はこれくらいといたしましょう。もしまた続きができるようでしたら、やってきます」

武大人は、途中で切り上げ、どことなくおぼつかない足取りで出ていく。

太鼓が鳴り、食事を終えての夜、韋莊は一人、紙を広げ、墨をする。

迷妄の底に達しなければその外に出られぬとの貫休の言葉がしきりに思われる。まだ己はそこにまで至っていない。

銀犁を思う心も、浅かったのか。だから、平康坊に置いてきてしまったのか。命を懸けて我が元に連れてくるくらいのことをしなければ、迷妄の底には達しないのか。

銀犁への思いは嘘偽りのないものであった。いま顧みて、そうだと思う。

銀犁はこの心をきつとわかってくれている。いま一度でよいがそのことを確

かめ合いたい。

会えぬのなら、せめて手紙でなりとも伝えたい。己はいまも変らぬと。

手紙は書いても渡せる手立てがない。それはわかっている。しかし、心の証しとして、書いておきたい。

墨をすり終わる。

白い紙を見つめ、銀犁に伝えるこの思い、ではどう書くのか。

わからない。己の思いと言っても、何を書くのか。

筆を置き、部屋の内を歩く。

右に左にいき、この心をどうにかして伝えたいとの思いがまた募る。いまのこの思いをそのままに書いておきたい。

座って筆を取る。墨を湿らせる。紙に向かう。

心の思いはあっても、頭の中に一つの文字もない。

筆を置き、部屋の内を歩く。

幾度となくそれを繰り返す。ものを書くのにこれほど苦勞したことはない。

意を決し、無理やり筆を下ろす。筆先が紙に触れる。黒い墨が紙へとにじむ。ここから筆をどう動かすのか。

わからない。眼を閉じる。頭に文字はない。

すでに筆は紙に触れている。腕が動くものなら、勝手に文字をつくつてくれと念じる。

目を開くと、そこに「人」の文字がある。

筆は何を書こうとしたのか。「人」の文字を凝視する。

耳に聞こえてくるものがある。銀犁の琴の音だ。最後の夜に歌った詞が聞こえる。

人人尽説江南好　人は江南のすばらしさをたたえ

筆は「人」の文字に続く字を書く。

遊人只合江南老　漂泊の人は江南にこそ老いるべしと言う。

なぜ己はここにいたのか。

揚州に留まるべきであった。嫋嫋がいて、桂覓がいて、自分がいて、三人

で笑いつ泣きつ、そのままに世の外に出ていくべきだったのだ。

詞を記し終わると、必ず相逢うときがあるうと、書き添える。

韋莊は筆を投げ、床に横になる。

虚しいことをしてしまった。

何もかも忘れて、迷妄の外に出てしまいたい。

届けることのない手紙を書き、ほとんど眠れぬままに夜を過ごし、翌日、奇妙な暖かさを感じて、戸を開ける。

ほんのりと明るさのさす空に、軟らかな、あたかも春のような風が吹いている。この風が冬を終わらせてくれると思わせ、しかし、冬の最も寒い時期はこれからくるのである。

長安に春はもうこないのではと、銀犁が言っていたのが思い出される。

中庭に出ると、お狐さまの祠の前に阿枉の姿がある。こんなにも早くから

祈っているのだ。いつものことなのか。あるいは、皇族千人が処刑されたと聞いて、不安が増して、祈らずにはいられないのだろうか。

季節は必ずや巡りきて、長安に春のこないことはないだろうが、その春を自分たちは迎えられるのか。春にはもう逢えぬ定めであるから、せめて春を思わせる風を、天は吹かせてくれているのか。この風に銀犁もまた春を思っているだろうか。

何もできぬこの己には、お狐さまに祈りを捧げる資格もない。一心に祈って微動だにしない阿枉を妨げないようにと、そつと部屋に戻る。

銀犁への手紙を畳み、書物の下にすべり込ませる。

太鼓が鳴っていつも通りの朝になる。

蘭は東の市へいこうと、楊臆と準備を始める。そうなら、市にまで同行して、そこから一人で平康坊までいけぬものかと考える。銀犁のことは思い切ろうと考え、それでも手紙を書き、平康坊の遊里には黄巢の兵士しか入れぬとわかっていながら、仙水楼に行くことを思ってしまう。思っても実行でき

るはずはないとわかっている。我武者羅にいつてしまうほど無分別ではない。「これだけ暖かいと、西周くん、東呉くんでも誘って、どこか伽藍でも巡り、気を散じてみたくもなる」

韋荘は、己にも外に出かけたい気持ちがあるのを蘭に示す。

「それにしても妙な風ですな。何かの凶兆でしょうか。大事をとって、ここは出るのを控えておきますかな」

蘭は作り終えた荷を置き、外に出ようとしない。

そうなると韋荘も留まるしかなく、夜眠れなかった分を、うつらうつらと、一足早い春の転寝で補う。そんなふうには呑気に過ごしてよいようなときではないとわかっていても、韋荘の緊張を緩めるだけの暖かさが今朝はある。そうこうするうちに、外が少々騒がしくなる。辻々に役人が立って何か大声で触れている。臆を聞きにやらせると、処刑した皇族の死骸を東の市の門前に並べるから、必ず今日のうちに見に行くようにと、命じている。

「必ずと言っていたのか」

蘭が確かめると、臆は、

「二十歳以上の男子は必ずいくようにと。後日、いつていないとわかると、どんなお咎めがあるかわからないと、脅してもいました」

「入城のときと同じですな。唐の御世が終わったと、都の人間に思い知らせてやろうとしているのでしような」

「あざといことだ」

短い眠りで、少し頭がはつきりしてきた韋荘が言う。

「命令とあれば、いきますかな」

「そんな気にはなれない」

「このような時期に都に居合わせてしまったのを、身に沁みて知るには、見しておくものよいのではありませんかな」

「我が身の失敗を思い知れとか」

「それもよいでしょうな」

「愚かで無力であるのをつくづくと思うのだろう」

気は進まないが、韋莊は蘭と連れ立って出ていく。ついでに東の市の用事をすませようと臆も同行させ、ひとまず莠は店に残る。莠もいったのでは、店に残る男は莠の息子だけになってしまう。

役人の命令が効いたのだろう、街に人が大勢出てきていて、顔を合わせるのは久しぶりであると挨拶を交わしている者も見かける。

ぞろぞろと安邑坊の北門を出ると、皇族が晒しものになっている場所はすぐそことわかる。東市の南東側の門へと人の流れができています。

この物見高い連中の己も一人かと思うと、おぞましい気分になる。

韋莊は足を止める。

「ここまできてやめてしまうのですかな」

蘭が背中を押す。

「見て何になるのだ」

「ここで止まっては、人の邪魔になりますな」

「やんごとなき方々が、晒しものになっているのを見るのは忍びない」

「兄貴が見ようが見まいが、事実としてはすでに晒されているのですから、世の変転と、しみじみ見ておくべきではありませんかな」

蘭は韋荘の腕を取る。

「あつしは一足先に市にいつてきます」

臆はさつと向こうにいつてしまふ。

「臆だつて見たくないのだらう」

「あれはまだ二十歳になりません。見ねばならぬ義務はありませんからな」
韋荘は蘭の腕をほどこうとするが、

「ここはありのままに見ておきましょう」

蘭は強引に引つ張り、人の流れに再び乗る。

十重二十重の人の輪がある。蘭は巧みに人々の前へと進み出る。

塀の前に細長い壇が設けられている。壇の両端に太い柱が建ち、その上に梁が横に渡されている。梁から縄が垂れ、胴を縛られた遺骸が幾つとなく吊り下げられている。だらりと首も腕も足も垂れ下がった遺骸に、ことさら

しく美々しい服が着せられている。腰に大きな木札が結わえてあり、その者の姓名が黒々と記されている。

鞭を手にした役人が声を張り上げる。

遺骸の一つを叩き、その者の名と罪状を、見物人の前に明らかにする。韋荘も名だけは知る皇族の一人だ。

役人が鞭で叩くたびに見物人の間から歓声が上がる。

韋荘はぞつと寒気を覚える。気がつけば、日はいつのまにか雲におおわれ、朝の暖かさはすでに失せてしまっている。

韋荘たちが壇の前に来たのは、二十余体を順に鞭で打つての終わり近くであつたようで、役人は端の柱にまできて、

「こいつらはすでに明らかになつたよう、いずれ劣らぬ大悪人どもである。

汝ら民衆は、このような連中にこれまで苦しめられてきたのだ。よいか、黄王さまが皆に代わり、積年の恨みを晴らされたのだ。この者たちを憎いと思わぬ者はいないだろう。さあ、許すぞ、存分に石を投げつけてよい」

役人が壇から離れて号令をかけると、現物人の中から石が一つ飛ぶ。うまい具合に皇族の顔に命中し、遺骸がぶらぶらと揺れる。人々の間に喝采が起る。それが誘い水となって、石が次々に投げ込まれる。

「やはり憎まれておったのですな。俺たちが杜陵の韋氏であったのは幸いでしたかな。今日のところは、こうしてまだ縄に吊り下げられずに、こちらから見ていられるのですからな」

蘭のささやきに韋莊は何も言わない。

権勢を誇った皇族が石礫に曝されるとは少し前までは考えられもないことだった。このようなことがおこりうるものなのか。現実において得そうになることがおこってしまうのが、世が変わると言うことであるのか。

民衆が石を投げるのに飽きるころを待って、太鼓が大きく叩かれる。

「静まれ」

役人たちが、先ほどから見物していた者たちに移動を命じる。

「最初に戻ってまた見ますかな」

「いや。もう十分だ」

韋荘は蘭の袖を引き、壇を離れる人々の中に混じる。

「兄貴も市にいけますかな」

「そんな気にはなれない」

「では東呉くんのところですか」

「いや、帰る」

できれば平康坊にしようとの思いも失せてしまい、うなだれて西へ道を戻っていくと、

「もしや旦那さまではございませんか」

声を掛けてくる者がいる。

誰かと見返ると、赤い布で髪を束ねた黄巢の兵士である。その姿にぎくりとするが、「旦那さま」と呼ばれた声には聞き覚えがある。

「やはり旦那さまでございました。私でございませぬ」

真黒に日焼けした顔に、蘭が先に気づく。

「おまえなのか。伍七か」

「左様でございます」

頭を下げる伍七に、韋莊は驚き、これも現実であるのか疑わしくなる。

伍七は死んだ伍武爺さんの孫。莊園にいるはずの人間だ。

蘭は伍七の両肩に手を置き、

「確かに伍七だ。どうしてこんな姿をしているのだ」

伍七は恥ずかしそうに赤い布に手をやり、

「仕方なくつけさせられています」

「ごく小さな声で言う。」

「そうか。ちよつとこい」

蘭は人の流れから離れた場所へと伍七を連れていく。

聞けば単純な話である。二十日ほど前、虢州の莊園に黄巢の手の者がきた。

それまで、莊園には特に変わったところはなかったのだが、その日、莊園の

若い男が一斉に徴発され、長安攻めの兵士になれと命じられた。伍七は仲間

とばらばらにされ、黄巢軍の服を着せられ、いつしかここにまで来た。

「叔父上と叔母上は御壯健であるか」

韋莊が尋ねる。

伍七が莊園を出た時点で、薛未亡人に変わりはなく、しかし、韋韜は安心できない状態にあった。

「ずっと臥せっておられました。私どもが連れ出されるのをお聞きになって、大変心配なさったようです」

「親父どのはきつといまごろはもう生きてはおりませんでしょうか。唐が滅びるのを見ずに死ぬのが願いでしたからな」

「長安にきて、おまえはどうしてここにいるんだい」

「今朝、初めて都に入りました、もしや旦那さまにお目にかかれることもあるうかと、闇雲に歩いてきまして、あそに大層な人の集まりが目についたものですから、もしやその中にとお思いまして、運よくお会いできて本当によかったです」

「おまえは、長安の店がどこにあるのか知らなかったのか」

「都は初めてで、坊の名前も何もわからないのです」

「それでよくまあ偶然に会えたものですな。兄貴、気が進まぬながらも見物にきてよかったですな」

「おまえ、今日は自由に行きまわられるのかい」

「夕刻までに門外の陣に帰還せねばなりません。一日だけ都で遊んでこいと、銀子とこれを頂戴しました。黄王さまのお恵みでございます」

伍七が首からさげた札に、韋荘は眼を凝らす。

「おまえ、それを使って遊里にはいかぬのか」

札には、これを携行する者は平康坊への出入りを許すと記されている。

「部隊から一緒に来た仲間は真っ直ぐに平康坊に走っていきましましたが、私はそれよりも旦那さまのところをと思ひまして」

「主人思いの殊勝な奴と言いたいところだが、おまえ、店にいきたい本当の用があるのだろうか」

蘭がにやにやしなから言う。

「いえ、旦那さまにお会いできてこんなに嬉しいことはありません」

伍七は顔を赤らめる。

「店はすぐ近くだ。おまえがいったら、阿枉が喜ぶぞ。兄貴もそう思います
でしような」

韋荘は別のことを考えていたが、まずはそれが先だ。

「その通りだ。阿枉を喜ばせてやってくれ。あれは悲しい日々を送っている
のだ」

伍七は顔を曇らせる。

訳を話しつつ、急いで店に戻る。

「阿枉、おまえが会いたいと思う人がきているぞ」

蘭が大きな声を発しながら奥へと向かう。阿枉は飛ぶように出てきて、

「兄でしようか」

その前に、

「ほら」

伍七を押し出すと、赤い布を巻いた姿に、阿枉も眼を見張って後ずさりする。

「どうした。忘れた訳ではないだろう。ほら伍七だ」

阿枉は遠のいたところで、からだを斜めにして顔を伺い、

「あっ」

と、叫び、手を胸の前で合わせ、体をそのまま硬直させる。

伍七も阿枉を見つめたまま立ち尽くしている。

蘭は伍七の後ろにさがり、韋荘に目で合図して、二人はその場を離れる。

「狐潭で舟に乗ってから、互いの心は同じだったようだな」

中庭に出た蘭が言う。

「そのようだ」

「こうして二人が会えたのは強い絆のせい。あるいは、阿枉の信心にお狐さまが応えたのですかな」

「それもあるだろう」

「兄貴は、二人の再会があまり嬉しくないのですかな」

「そうではない。しかし、こうしていまは会えても、次がまたあるかと思うと、悲しくなってくる」

「すぐに先の心配をするのですな。今日会えた幸いだけを喜んでやればよいではありませんか」

「そうではあっても、二人がこれですぐにまた別れ別れになるのを、私にはどうしてやることもできない」

「伍七は黄巢の兵士。黄巢の新しい世がこれからくるのなら、伍七はまたすぐに都に戻ってきましょう」

「本当にそうなると思っているのかい。都は明日にはどうなるかわからない。都の外の部隊に属するという伍七が、どこでどのような戦いに連れていかれるのかわかったものでない」

「兄貴の心配はもつともだとして、先がなくてもそれはそれでよいのはあり

ませんか。今日ここで会えたのと、会えなかったのと比べたら、会えた方がよいに決まっているのですからな」

「会えば別れがある。その別れの悲しみがあるくらいなら、もとより会わぬ方がよいこともあるだろう」

「ならば、別れなければよいですな」

「どうするのだ」

「二人で逃げるもよし、祠の前で刺し違えるのもよしですな」

「それが本当によいものならば」

「いずれにしても二人が自分たちで決めるでしょうな」

韋荘は阿枉のことを言いつつ、もう一つのことを考えている。蘭もそうなのだろう。自分の決意のほどを尋ねられているような気がする。

「自身の運を自分で開いていける世の中であるのなら、そうなのだろうが」

「いまは厳しいと兄貴は言うのですな。それはそうですな。風任せの俺にも、望む風は吹いてきませんな。俺ができるのは、お狐さまに二人の運を祈ること

とと、姉さんに、何か旨いものでも作ってやってくれと頼むことぐらいですか
かな」

蘭は祠で短く祈ると、柳氏に簡単な物でよいからと頼み、伍七と少し話してから莠とともに店を出ていく。

外は見る見る天気が変わり、朝と全く違って冷え冷えとして、いまにも降り出してきそうな気配である。

柳氏はあり合わせの材料で、莊園の祭の日に配る棗の菓子に似たものを作る。それを伍七と阿枉はお狐さまに供えて長いこと一緒に祈る。

「もうお越しくださいませ。別れを惜しんでも時には限りがあります」

阿枉に促され、伍七は韋荘に挨拶をして店より出る。

「必ず無事でいるのだぞ。またここにか、それともなければ莊園に戻ってこい」

伍七はうなづく。

伍七にそう言っても、己がここにいられるの、莊園に帰れるのか、その方

がわからない。むしろたくましい若者になった伍七は、いかなる困難も乗り越えることだろう。

道に迷わぬように坊門まで送っていかうと、韋莊は同行する。

「お願いがあります」

阿枉が店先に出て呼ぶ。伍七は振り返り、

「俺にできることがあるのなら」

「もしもどこかで兄と会いましたら、たとえ敵と味方でも、決して戦いはなされませんように。せめてものお願いです」

「わかった。必ずそうしよう。おまえの兄なら俺にも兄だ。戦いなどせぬ」

「ありがとうございます。私がいなくなってもそうなさってくださいませ」

「何を言うのだ。いずれ三人で会える日がくる」

阿枉は店の内へと消える。

伍七は無言で歩く。

安邑坊の北門を出て、韋莊は伍七に道を示し、いよいよ別れるとき、

「そなたの祖父を杖で打ったのは間違いであったといまでは思っている。申し訳ないことをした」

韋莊は頭を下げる。

「急に何をおっしゃるのですか」

「私は、人の上に立つような立派な人間ではない。そなたの祖父のおかげで私はこの世に生を享けることができた。その恩に酬いずに、私は杖で打った。

そなたの祖父は、この私を恩知らずと罵ったが、まことにその通りだったのだ」

「いいえ、あれは祖父が明らかに悪かったのです」

「そうではない。私はいまもって、そなたの祖父によって生かしてもらっただけの価値のある人間になっていない。それを重々承知している私は、恥も知らずに、そなたに頼みたいことがある。こんな私の頼みなど聞けぬと思うのならそれで少しも構わない。そなたに頼める義理などないのだから」

「何のことでしょうか」

「愚かしい私の願いだ。仔細は聞いてくれるな。時を計れば、太鼓が鳴るまでに城門を出るのには、若いそなたの足なら、まだ十分に間がある。それで頼むのだ。平康坊は北曲の仙水楼にこれを届けてはくれぬだろうか」

昨夜書いた銀犁への手紙を懐より出す。

伍七は渡されて困ったような顔になる。

「仙水楼の場所を知らぬのですが」

「北曲で一番大きな妓楼だ。人に尋ねればすぐに教えてくれるだろう。いかに捨ててしまっても構わない」

「旦那さまのお申し付けにどうして逆らいますようか」

「いや、この愚かな男を主人と思ってくれるな」

伍七は韋荘の言葉にますます困惑の表情。

「そなたが阿枉を思う心には及ばぬが、私も一人の女を思っているのだ。こんな年にもなつて」

苦笑しながら言うつと、

「必ずお届けします」

「くれぐれも無理はするな。もしも、必要ならこれを使ってくれ」

「韋莊は銀子を伍七に握らせる。

「かしこまりました」

伍七は一步踏み出そうとして、何か言いた気である。

「阿枉のことは心配するな。お狐さまもきつと守ってくださる」

伍七は頭を下げ、すぐに走る。平康坊の方へと向かう後姿に韋莊は目礼する。

銀犁への手紙は書いた。銀犁にそれが渡ることがあるとは思っていないかった。銀犁に届けるのがよいことであるとの確信もない。己の思いを銀犁に伝え、銀犁にとってそれがよいことであるのか。もちろんそうであつてほしい。届けられる機会がこうして巡ってきて、それを逃してしまったなら大いに後悔するだろう。機会があるとは、すなわちよい結果を生むのかもわからない。

大路を西へ走っていった伍七が、角で北に曲がるのを見届けてから、門の

内側に戻る。雨が降り出している。

急に寒さを感じる。身を震わせると、伍七の祖父が酔っ払ってばかりいたころのことが思い出される。無性に懐かしい。

所構わず酔い倒れる伍武の爺さんをあのころは嫌悪し目を背けていた。伍武の爺さんがあのようになんかできたのは、莊園が二度と戻らぬ佳き日々であったからだろう。伍武がいたからこそその日々も存在した。叔父の韋韜は伍武を一度も叱責しなかった。それが伍武を増長させたところかと思っていたが、叔父には己の及ばぬ深い考えがあったのだろう。

己は叔父に遠く及ばない。伍七自身のことを考えてやるよりも、己のために伍七を使った。銀犁のことを考えているようで、実は、己の気持ちを伝えることだけに性急なのではないか。あの手紙は渡さない方がよいものであるのかも知れない。しかし、嫋嫋に対してしたことを決して繰り返してはならない。

冷たい雨の中をしばらく歩いていくと、湿った足音が後ろから近づいて、

蘭たち三人に追いつかれる。

「伍七は戻ったのですかな」

「ああ、門まで見送って、道を教えてやった」

「東に真つ直ぐに突き当たって、北にいけば春明門。初めての都でも迷うことはありませんな。太鼓の鳴るよりは早くに門を出られましょう。いましばらく店にいてもよかったですように、いくら別れを惜しんでもきりがないと言うことでしょうか。伍七の奴、いまごろは、会ってしまったために辛さもひとしおでしょうかな」

「会えただけでもよかったのだらう」

「そう言っていたのは俺の方でしたな」

蘭は笑い、韋莊は伍七に銀犁への手紙を託したことは言わない。

「それはそうと、伍七が言っていたことで、俺は考えたのですが、ひよっとすると何か面白いことがおこるかも知れませんな。伍七は、帰ることになつている部隊の指揮官の名を、朱温と言っていましたな」

「そうだったかな」

「思い出しませんか。揚州の裸の男、あれは朱温と名乗っていましたな」

「手のない絵描きの少年を助けた暴れん坊のことかい。なるほど朱温であったかも知れぬ。同じ名でも、たまたまだろう」

「まあ大概はそんなところでしようが、あれと同じ朱温でも不思議ではありませんでしょうな」

「あの暴れん坊なら賊の仲間になるだろう」

「あの朱温がいま長安の外にいるのだとしたら、面白いことになりはしませんかな」

「どうしてだい」

「朱温は皇帝になりたいと言っておりましたな。その夢をいまも抱き続けているとしたら、長安の外で部隊を指揮していることに何かしら意味をもつきやしませんかな」

「黄巢の命令に従っているのだろう」

「俺が野心あふれる朱温だとしたら、やはり長安の外におりましような。黄巢が都でしくじつてくれれば、外にいる朱温にも皇帝になる機会が巡ってくるかも知れませんか」

「そうかな」

「黄巢が率いるのは流賊どもの集まり。大街で俺たちに見せつけた大行列だつて、一枚皮を剥けば、伍七のように、あちこちから連れてきた寄せ集め。伍七に銀子を与えたり、色里で自由に遊ばせたり、とかく兵士を厚遇しているのは、黄王さまのお恵みというよりは、配下の者の歡心を買うのに黄巢が汲々としている証しではありませんかな」

「そなたはいつも妙なことばかり考える」

「しかしながら、俺自身のこととはさっぱりわかっておりません。市では少ししか売れず、買おうと思っていたものは半分も手に入らず、出ていく錢ばかりが多くて、困ったものです」

「こんなことになって、先のことかわかる人間はいないだろう」

韋莊は自分だけが無力なのではないと、己の言葉で慰めようとする。

そのようなことを話をしているうちに、店の近くまできて、蘭は臆に向かつて、

「そう言えば、おまえの兄貴に子が生まれたと伍七が言っていたぞ」

「胆兄さんにですか」

「詳しくは聞けなかったが、難産の末に女が生まれたようだ。銀にとっては初孫だ。どこかにいれば知らせてやるのに。会いたいだろうからな」

「あんな罪を犯した親父。胆兄さんだって会うものですか」

「胆はおまえ以上に一途なところがあるからな。しかし、親子の情は大切だぞ。銀が正しかったのは、こうして証明されているではないか。これから何がおこるのか皆目見当のつかない都にいて、銀と出ていかなかったことを、そなたは悔やんでいるのではないかな」

臆はそれには答えない。同じような話を何度もしていて嫌になっているのだらう。

表の戸はすでに鎖されている。柳氏が用心のためにそうしたのである。三人は路地より莠の店に入る。

雨は静かに降り続き、柳氏がつくった菓子に莊園の日々を懐かしむと、太鼓の音が重く聞こえてくる。

夜が更け、一人になると、思うのはまた銀犁のことばかりである。伍七は手紙を届けてくれただろうか、銀犁は読んだだろうか。あれこれ思ってもわからぬこと。依然として迷妄のうちにあるのは情けなくても、どうにもできないことである。

明ければ十二月十三日。

雨は夜更け前に止み、ことの他冷たい風が入ってきたのだろう、朝は震え上がる寒さ、濡れた地面が凍りつく。

真青に晴れ上がった空に日が昇っても、暖かくなるどころかかえって寒く

なるほどで、蘭も出かけることなく、莠の店で、韋莊と三人、火を囲んで交互に碁を打っている。

このように遊んでいるときではなからうと思いつつも、他に何かできることもない。こうして時間を空費するだけである。蘭と莊は順に莠に負け、蘭と莊が勝負する。蘭のいつもの変幻自在な打ち方に、今日は莊も敢えて合わせてみて、盤上は石がとつちらかつて收拾がつかない。

「莠くんは、この先、どちらを持ちますかな」

蘭の尋ねに莠は笑い、

「ここはお二人に任せておきます」

蘭はまた妙なところに置き、

「俺たちは莠くんに見限られたようですな」

つい無難なところに置きそうなるのを、

「そなたはともあれ、この兄はとつくに見限られている。何をやっても成就せぬ。今度こそはと貢拳を受けにきてこのありさまだ。何と不器用なことだ

はないか」

笑いつつおよそ打つべきとは思えぬところを選んで置く。

店の戸が、初めは風かと思つたほど、ことごと弱々しく叩かれる。

「客ですか」

蘭はつまんだ石で鼻先を押さえながら思案し、

「黄巢の恵みがゆきわたり、借りにくる者はいないでしょうに」

莠が立つて戸を開けると、武大人である。

「この前の続きをと思ひまして」

入ってくる姿はさらにやつれ、前屈みで肩が落ち、足も引き摺り加減である。ふつくらとしていた頬はすっかりこけて、目の下に黒い隈がある。

蘭と韋荘は盤上に散らした石を壺へと片付け、椅子を武大人に譲る。武大人は身を折らんばかりの姿勢で腕を卓へと伸ばし、崩れ込むようにして座る。

蘭は阿枉を呼びに奥にいく。

「この前の続きでよいでしょうか」

「莠の言葉にわずかに微笑み、

「最初は確かここでした」

武大人はいつもの黒を、韋莠は白を置いて、この前の碁を再現していく。

「そうこられては、ここで対応するしかないと置いてみたのですが、あまりよい手ではなかったようです」

「いやなかなかどうして」

武大人の顔が次第に生き生きとしてくる。

「これが三十六手目。鄧艾開蜀の勢であれば、ここで九目の勝ちと、私が宣言いたすところ。凡人にはまだ勝敗の帰趨は見えませんが、私の方がむしろ不利でしょうか」

莠が言うと、武大人は、ほっほうと笑い、

「王積薪に勝るとも劣らぬ師匠のこと、本当は勝敗がもう見えておられるのでしよう」

ここで韋莠が、

「王積薪とは、もしかして、玄宗皇帝が蜀に向かわれたときの話でしょうか」と、口を挟む。

「その通り。碁仲間には良く知られた伝説です」

武大人は羨の置いた石に首をかしげ、碁盤の脇をとんとんと叩いて、次の石を置く。

王積薪は当時の碁の名手。安祿山の反乱で都を追われた玄宗皇帝に王積薪も従った。一行は蜀の山道にさしかかり、皇帝以下の主だった者は街道沿いの人家に宿りを求めた。辺鄙な山の中、王積薪のような地位の低い者の泊まる場所が残っておらず、道を離れ谷川沿いに入ってしまった。遠くに小さな人家をようやく見つけ、いってみると老婆と嫁の二人暮らし。女だけの住まいに遠慮し、夜露をしのげればと軒下を借り、水と火をわけてもらった。旅の疲れにかえって眠れずにいると、東西の部屋に分かれて寝に就いた老婆と嫁が壁越しに話している声が耳に入ってきた。老婆が一局打とうと誘い、嫁がそれに応じた。初手を東五南九と口で告げる。久しく考えて応手が告げられ

る。明け方近くに三十六手まで進むと、老婆が「その手ではそちの九目負けになります」と言った。嫁は「おっしゃる通りです」と、それきり声は止んだ。わずかにまどろんで、王積薪は衣冠を正してから老婆に会い、碁の極意を尋ねた。老婆は「どれくらいの腕前か、少し置いてみなさい」。王積薪が平生の妙手と思うところを披露した。老婆は「並の手を教えれば十分でしょう」と、嫁に言った。嫁は、攻守殺奪救応防拒の法のあらましを王積薪に教えた。その説明ははなはだ粗略で、より詳しくと王積薪が尋ねると、「人間界ではこれくらいで敵なしでしょう」と老婆は笑うばかり、それ以上のことは教えようとしなかった。かくて王積薪は誰も及ばぬ碁の名人になり、三十六手目で終わった局は「鄧艾開蜀の勢」と呼ばれ、なぜ老婆が九目の勝ちになるのか、王積薪は終生解くことができなかった。

「もしもかの老婆の子孫がいまもいるものなら、私も蜀の山道にいつてみたものです」

莠が言うつと、武大人は、

「折りしも、お上は蜀に向かわれていましよう。中に碁の心得のある者がいれば、王積薪のように極意を聞いてくる者もありましようか」

「私ではないのが残念です」

「師匠は碁のことだけを考えておられ、羨ましい限りです」

蘭が阿枉とともに戻ってくる。

「では、ここからです。気持ちを新たに始めることにしましょう」

莠は次の手を考え始める。

「気持ちを新たにと言えば、都もいよいよ新しいことになります。明日は御即位。新しい御世の始まりです」

武大人は蘭と韋荘に向かって言う。

「黄巢が皇帝か。最初の旗揚げから六年、盗賊も辛抱の甲斐がありましたな」

「これ、言葉を慎まれよ。皇帝になられるお方を呼び捨てにして、私でなければ、そなたは獄に入れられるところだ」

「獄に入るべき者が皇帝になる。世の中の変わり方とはこのようなものなの

ですな。都の民にとってそれが幸いとなればよいが、どうなりますことやら」

莠が石を置くのをじっと待ちながら、武大人は、

「これでよくなつてもらわねば困る」

と、つぶやく。

茶の仕度をする阿枉はいつもにも増して悲しそうな顔である。

莠が置くと、武大人は手にした石でこめかみを叩き、

「ここは難しいところです」

阿枉は茶を武大人の脇に置く。

武大人は一度置きかけて手を戻し、次にはぼろりと指先からこぼすように

置く。

「そこでしたか」

莠は予想していた通りとばかりに即座に白を置く。

武大人は茶をすすり、

「そこにきますか」

中空に目をやる。

韋荘と蘭は少し離れた卓で、阿枉の入れてくれた茶を飲み、

「この旨さを味わえるのもいつまでですかな」

「即位がすめば落ち着いたりするのではないかい」

「どうですかな」

「都の門も開かれないだろうか」

「そうなたらどうしますかな。 莊園に帰りますかな」

「思うようにはならないだろう」

阿枉は何も言わずに出ていく。肩を落としてうなだれたさまは寂しげである。

「門を開けたら、皆一斉に逃げてしまえますかな。 それでは皇帝になった意味がありませんでしょうな」

「都の外はどうなっているのだろう。官軍はどこかで戦っているのだろうか。黄巢に齒向かう者は誰もいないのか」

「わかりませんな。外の様子は全く聞こえてきていませんからな」

二人でささやき合っていると、軒が聞こえてくる。武大人である。

「余程お疲れなのですかな」

三人で静かにしていると、武大人は急にがくつと動き、

「これはいけない」

茶を一気に呑み干し、

「もう帰りませんと」

と、立ち上がる。その途端にくらりとするのを、蘭が脇から支える。

「家まで送ってさしあげたらどうかい」

韋荘が言うのを、武大人は断るが、蘭はそのまま武大人と一緒に路地を出

ていく。

その蘭が戻ってきたのは昼過ぎのこと。

蘭が町で聞いてきたところでは、黄巢は田令孜の屋敷にずっと滞在していたが、今朝になって、初めて朱雀門をくぐって皇城へと足を踏み入れた。皇

城の役所の集まる場所を順に見てから、北の承天門を通過して皇帝が政治を執り行う宮城に入り、今夜には皇帝の住まいである大明宮に入るらしい。大明宮には三千人の宮女のいる後宮がある。宮女のほとんどは、皇帝に置き去りにされたままであるようだ。

「即位の準備で、武大人さまも忙しいのでしような。疲労を和らげる薬を渡しておきました、芯からの疲れに、どれほど効力がありましたでしょうか」

韋荘は武大人とは全く異なる理由で夜眠れぬことが多く、疲れている。武大人を気の毒に思うだけのゆとりがあるのはまだましなのだろう。

結局その日は、一日家で凍えて過ごした。

黄巢が即位する日。

星がまだ残る早朝、役人が町を回って、正午までに全ての者は正装して道に並ぶようにと触れていく。

太鼓が鳴り、朝食をすませると、柳氏は皆の衣類を用意する。

日が昇ると、寒さが和らいで暖かくなっていく。あたかも黄巢の即位を祝うかのようなのである。

ざわざわと道が騒がしくなり、韋莊たちも表に出る。

「太鼓が鳴り響いたら、大黃王陛下万歳、大齊国万歳と叫ぶのだ」

役人が声を囁らして叫んでいく。唐に代わる新しい国号は齊であると知れる。

向かいの官人は即位の礼の準備のためにか、泊まりが続いて帰ってきておらず、母と妹と弟と、召使いたちが門の外に出ている。東隣は今日も門を鎖したままだ。西隣の太遲先生は女をなるべく人目につかぬように並べ、その前に弟子や小者を立たせ、先生自身は見回りの役人にしきりにおべっかを使う。

太遲先生が役人から聞いたところでは、黄巢は昨夜初めて後宮に泊まり、多数の女を前に、「夢のようだ」と泣いたと言っ。

「私も一度でいいから、三千人の女を自由にしてみたい」

と、艶福家の太遲先生は笑う。

貢挙の落第生が、皇帝の以外の男の入れぬ後宮に足を踏み入れたのだから、夢のようだと思うのは当然だろう。

遠くより地をどよもす音が低く響き渡る。攻め太鼓が撃ち鳴らされているようだ。どこかからか号令がかかり、長安の民は歓呼の声を上げる。

「大黃王陛下万歳、大斉国万歳」

人々に合わせ、韋莊も連呼する。そうせねばならない。新しい大斉国の民として皇帝に従順に振る舞うことしか、長安の民には許されていない。

それでも、阿枉は口だけを人と同じくし、しかし、声は出さずにいる。

本気かどうかはわからぬが、民衆の熱狂的な万歳がいつまでも続く。

その後、安邑坊でも皇帝の即位に伴ういくつかの儀式が行われ、着飾った兵士の列が、武具を輝かせて練り歩く。

静かになったのは夕方近く。宮廷ではさぞ厳粛な儀式が執り行われ、豪奢

な夜宴が開かれようとしているのだろう。傾きゆく冬の陽を眺め、明日からの日々を思う。今日はこうして即位を祝ったが、明日はどうなるのか。大斉国はこれから長く続いていくのか。唐は落ちゆく夕日、大斉国は昇りくる朝日なのか。

そうではあるまいと、明日の先には明るい陽光は戻ってこないのではないか。熱狂的な万歳は今日一日限りのことではないのか。

ならばと、急に一つのことを思う。それは心を捉え、次第にそれ一つその他にはないと考えるようになる。

それは、明日は、銀犁に会いにいくと言うこと。明日の先はないのだから、その前にやっておくべきことは一つしかないからだ。銀犁に会うことその他に何かあるうか。これまでは明日が限りとは思っていなかったから、取りあえず封印してきた。しかし、このままであってはならない。

そのように思い始めると、その一つのことから頭から離れなくなる。

即位の祝いで今日は浮かれ、明日は必ずや緩むに違いない。ただ一日の隙

がここにできることだろう。そのときに平康坊にいかずして、いついけるのか。

その推測にさしたる根拠はなくても、明日が限りであって、明日しかないのなら、明日にいくしかない、いよいよ強く思えてくる。

己の身を破綻させても、あるいは身勝手すぎるが、一家の者を破綻させても、銀犁に会いにいく。そこまで思ってしまう。黄巢が即位して、すでに韋一族は破綻してしまっているのだ。

冬の陽を見送り、あるいは全てはうまくいくのではないかと、それこそ根拠のない樂觀を抱く。銀犁との幸せな日々が明日の先にあるのかも知れない。夜は同じことばかりを考えて眠ることなどできない。

翌日、太鼓の鳴る時分に韋莊は蘭の部屋を訪ねる。

起きたばかりで大あくびをする蘭に、

「あの象牙の細工を、貸してくれないだろうか」

蘭は大きく腕を伸ばしたままで韋莊の顔を見つめ、その手をぽんと打ち、

「いよいよそのときなのですか」

「何のときだい」

韋莊はとぼける。

「もしもこの前るときにあれをもっていれば造作なかったでしょうが、いまはどうですか」

「無理だろうか」

「抱柱の信を貫かせてさしあげたいと思っていました。悔しいことに、ものを言わせる金が俺にはなくなりました。兄貴はそれがわかっていいるから、黙っていたのですな。俺も何も言えませんでした。しかし、いつかこのときがくると、俺は思っていました。それでこそ兄貴ですから」

「弱いだけだ」

「そこが兄貴なのですか」

「思い切ろうとした。しかし、できなかつた」

「象牙の細工はよい思いつきですが、崔婆はうんとは言いませんでしょうな」

「崔婆などは一生かかっても見ることできぬものだ」

「それをただ同然で俺は手に入れた。崔婆にもそれくらいはわかりましょう」

「やはり無理か」

「まあそれで、もしもまんまと騙せたとして、ここに連れてくるおつもりですかな。姉さんにはどう話すのですかな」

「先のこととはわからない。とにかく、銀犁に会うことその他は考えられないのだ」

「それでこそ、抱柱の信は本物ですな。では、出かけるとしますか」

蘭は立ち上がる。

「今日は一人でいくつもりだ。そなたを巻き込むようなことではない」

「崔婆とどうやり合うつもりですか。それに途中の道で何があるかわかったものでない」

「もし危険があるのなら、それこそ私一人でいかねばならない。楊銀たちが金を持ち出して逃げてしまったのは私のせいだ。この上、この店や莠くんたちに迷惑をかける訳にいかない。そなたにはここを守ってもらいたい」

「何があつても貢挙に合格するまでは面倒を見ると俺は約束した。長安にきたいと言う楊爺を抑えて、俺が守ると偉そうに言った。それを果たさなければ、楊爺に顔向けできません」

「貢挙と何の関係もないこんなことにそなたを巻き込んで、それこそ、私が楊爺に顔向けできない」

「どうですか」

「いまのこの姿を見たら、楊爺はあきれかえるだろう」

「いや、昔から楊爺は変わりませんからな、兄貴のこととなると、命に代えてもと一生懸命ですな。俺や莠くんや藹くんに対するのと、兄貴に対するのとではまるで違う。いまの兄貴を見たら、すぐに平康坊に飛んでいき、崔婆を殺してでも銀型を連れてくるでしょうな、きっと。俺は、さすがに、そこ

「まではできませんな」

蘭は笑う。

「いくら楊爺でも、そんなことはしない」

「楊爺は兄貴のためなら命を惜しまない。俺とは違いますな。俺は、自分のために兄貴をうまく使ってやろうと企む男ですから。それで、兄貴に申し訳ないことをしてきましたな。兄貴、どうなんですか、嫋嫋とのことがあったからこそ、銀犁を深く思っているのでしょうか」

「そなたには何も隠せぬようだ」

「揚州から無理に連れ帰ったのは失敗でしたな。あのころはまだ兄貴の心がわかっていなかったのですな。いまだって楊爺ほどにはわかっていない俺ですから、十数年前ならなおさらのこと。まして惚れた腫れたはとんとわからぬ俺、抱柱の信を曲げさせ、兄貴に間違ったことをさせてしまったのですな」

「もとより女に惚れたりせぬのがよい。苦しむだけだ。無縁なそなたがうらやましい」

「だが、なぜに今朝なのですかな」

「昨日まで耐えたから今朝なのだろう。私もわからぬ」

「そう言うものなのでしょうか、抱柱の信とは」

「そうなのだろう」

「いまさら遅いでしょうが、揚州での失敗を少しは取り戻すため、今日は楊爺になりきりましょう。早速、平康坊へといくとしますか」

「まだ早すぎるだろう」

勢い込む蘭を韋莊が止めるのは当然で、太鼓が先ほど聞こえてきたばかり、こんな時刻に遊里に行く者などどこにもいない。

とりあえず昼までは家にいようと、姪甥といつものように書を読むが、むろん気はそぞろ。

ひと区切りついて莠の店にいくと、中庭で、陳婆やが落ち葉を掃いている。

一枚も残さず丹念に掃き集めようとして、仕事がはかどらないようだ。阿枉がお狐さまの祠の前で祈っている。遊里の女よりも先に、この者たちの幸を

考えるべきではないかと思ひもする。

「ごつと掃いておけば十分なのだから」

韋荘は声をかけるが、一生懸命な陳婆やの耳には入らない。

店では武大人がきていて碁を打っている。蘭もいる。

武大人の顔を見ると、むくみがいくらか取れたようだ。

「雀蛤先生の薬が効きまして、体が軽くなりました。できることなら、碁の強くなる薬も処方していただきたいものです」

武大人に聞けば、大斉国の新しい元号は金統で、黄巢の妻の曹氏が皇后となり、唐の官人の三品以上はことごとく任を停めるが、四品以下は元のまま大斉国の官人とされ、大赦令によって唐朝時代の罪人のほとんどは許されるようになると言う。

「この分でいけば、正月は静かに迎えることができましょう」

武大人の体調がよくなってきたのは薬のせいばかりではなく、落ち着く見通しが出てきたことにもよるのだろう。そうなら平康坊に行くのにも希望が

もてる。

「三品以上の方々はどうなるのでしょうか。皇族と同じようになるのかな」

「あのような手荒なことにはたぶんならないでしょう。帰順を誓えば許されましよう」

「唐のお歴々がおめおめ流賊上がりに頭を下げますかな」

「これ、言葉を慎まれよ」

「世の移り変わりの早さについていけぬ者は滅びるばかりですか。大斉国の朝廷にはどのような御立派な方々がおられるのでしょうか」

「第一は宰相の尚讓さま。第二、第三は、お上の御兄弟や長年労苦を共にされてきた方々がおられ」

と、武大人が挙げていく名は韋莊の知らぬ者ばかり。武大人もそのことを意識したのだろう、

「都の人にもいくらか名を知られるところでは、例えば、翰林学士になられ

た皮日休（ひじつぎゅう）さまがおられます。御存知でありましょう」

蘭は一考して膝を打ち、

「皮日休さま、成るほど、それならば、大斉国の朝廷もなかなかのようすな」

ここで莠が石を置き、武大人は身を乗り出して応手を思案する。

韋荘は小声で蘭に尋ねる。

「皮日休とは誰だい。聞いたような気もするが」

「お忘れですか。かなり前のこと、都に面白い詩があると、兄貴に教えてさしあげましたでしょう。橡媪の嘆きの詩に、こんなくだりがありましたな」

狡吏不畏刑　　狡猾な吏は刑にひっかかる悪事も恐れななし

貪官不避贓　　貪欲な官は贈賄を避けようともしない。

「そうか、あの詩か」

韋荘は思い出す。

貧乏な老婆を描いた詩だ。精出して米を作っても自分の口に入らず、橡の

実を砕いて得られるわずかな粉で命をつなぐ。役人たちは民衆の苦しみを他所に悪事も賄賂も平氣の平左、捕まるはずがないと勝手放題。

「こんな詩を書いたために、皮日休は都のお偉いさんに嫌われ、江南のあたりを流浪していると、噂に聞いたのはだいぶ前のこと。黄巢の幕下に入っていたのですな。皮日休が心を寄せているのなら、黄巢にも期待がもてるのかも知れませんか」

蘭は髭をしごいて思案する。

黄巢に対する蘭の評価は日によって変わる。断片的にしか伝わってこないのだから仕方がないが、都が安心なのかまだまだ不確かである。

武大人は莠に負けたものの、久しぶりにゆっくり碁が打て、満足した様子で帰っていく。

その後で韋莊と蘭は店を出る。柳氏には、蘭は東市へ、韋莊は東呉くん、西周くんを訪ねると、嘘を言っておく。遊里にいくとはさすがに言えない。もしも、銀犁を連れ帰ることになったら、それはそのときのことだ。

黄巢が即位したからと言っても、町の様子はもとのままである。

「何も変らないでいてほしいとの願望が、一見して何も変らない人々の振る舞いを生むのでしょうか。それを見て、やはり変らないと人は思い、変らずに過ごしていられるのでしょうか。そのような日々がずっと続けば、それで当たり前になりましょうが、さりながら、唐の皇帝がまだいた日と今日との間には、厳然たる差があるはずなのですが」

東の市の通りを歩きながら蘭が言う。

ここを歩くのは、この前、平康坊に向かって以来のことで、そのときは都に唐の皇帝がいたのである。町は幾分か道ゆく人が少ないだけである。こうも変りがないと、以前と同じように銀犁と会い、琴の音に合わせて歌えるような気もしてくる。

市を抜けて大街を横切り平康坊に入る。以前の遊里通いのところと同じような気分になっていく。平康坊の大きな屋敷は黄巢に接収されたと聞いていたが、町には荒れた様子は何も見えない。十日ばかり前と今日とがそのまま繋

がっているようだ。

無論そうではない。前と同じ日の続きがここにあるのではない。黄巢の大行列を見たのは現実であり、銀犁に二度とこないようにと言われたのも現実である。

それなのに今日ここにまた平康坊にきたことに何の意味があるのだろうか。銀犁に会いたい、銀犁を己の元へと連れていきたい、それは切実な思いである。だから、何があっても構わぬとここにまで来た。

黄巢がきて平康坊は変わってしまったかも知れない。今日も、黄巢の兵士以外は入れないのだろうか。それならそれでどうにかしよう。問題は、銀犁がどう思うかと言うことだ。銀犁は変わっていないはずだ。銀犁は喜んでくれるかと思いはするが、確信はない。

銀犁がどう思うとも、己の思いは伝えたいと、それで手紙を書き、伍七に託したのだが、それにはどのような意味があったのか。ただ己のことだけを考え、銀犁の心を深く考えて為したのではない。

いまここにきたのだって銀犁の心を考えてではない。ひたすらに己の思いに押されてだ。思い切ろうとしてそれができず、己の感情のままにここにきた。

この行為がどのような意味をもっているのか。確かな答えがないからと言って、それでいくのを止めることもできない。

色里には許可証をもった兵士でないと入れないと聞いていたが、南曲の手前に入りを阻むようなものはなく、誰にも見咎められたりしない。

「まだ早いのですかな」

色里の昼間は夜とは違うものだ。それにしても閑散としている。南曲、中曲、北曲と、わずかな人の影を見るだけである。

拍子抜けするほどやすやすとここまでくると、かえってよくないことが待っているような気もしてくる。

「遊里はお取り潰しになったのですかな」

「いや、街並みは元のままだ」

韋莊は己に言いきかせるようにつぶやく。

「そうですか。くすんだように見えませんか。ほら、軒の飾りが一つ残らずなくなっていますな」

蘭は道の左右を指差す。日暮れ時から眩く輝き出す飾りが消えている。胸騒ぎがし、自ずと足が早まる。

「どこも店じまいですか」

遊郭の内に人の気配が感じられない。

仙水楼の前に立つと、ここも扉がぴたりと合わさって、いつもの様子とまるで違う。

蘭が扉を叩く。こつこつと打って、しばし待って反応がない。強くどんと叩く。静まり返った北曲にその音が反響する。

「遊里はもぬけのからですか」

韋莊も叩いてみるが同じである。

「裏にいったみますか」

誰もいない道をしばらく東に歩いて路地に入り、くねくねと細い道を回つて、

「ここが仙水楼の裏木戸ですな」

さすが妓楼相手の商売で店を築いてきた蘭である。木戸に吊り下げられた木鐸を叩く。やはり物音一つしない。

「これは、死に絶えたってことですか」

「不吉なことを言うな」

蘭は木戸を揺すり、動かぬと見て、ひらりと乗り越え、内側から開けて韋荘を入れる。

蘭は日の当たらぬ狭い塀際を横手に入り、庇の下の窓をほとほと叩く。

「ここらあたりが遣手婆さんたちの寝場所。きっと誰かいましたよ」

叩き続けてようやく中で初めてかすかな物音がする。ここぞとばかりに窓を強く揺する。「誰なんだい、壊れちまうよ」

皺喰れた声がある。

「俺だ。開けてくれないかい」

内側から窓の覆いが細く持ち上げられ、

「いったい誰なんだい」

薄暗い隙間にちらりと見下ろす顔。

「だから俺だ」

眩しそうな目。

「おやまあ、旦那さまでございましたか。こんなところへどうされました」
仙水楼で一番年かさの遣手婆さんだ。

「どうされたかもないものだ。表で呼んでも誰も出てこないし、ここだって、腕が折れるほど叩いてやっつた。どうされたかとは、こっちが訊くことだ。皆はまだ寝ているのかい」

「いいえ、誰もおりませんので」

「誰もとは、崔婆もなのかい」

「一人切りで、この際、とことん寝てやろうと思っていたら、夢の中で、遠

く何か音がして。何とまあ旦那さまでございました」

韋荘は蘭の肩越しに、窓の隙間をのぞき、

「銀犁もいないのかい」

「おやまあ、挙人の旦那さまも御一緒で」

韋荘は窓の隙間に手を入れ、

「ああ、銀犁に逢いたくてきたんだ」

「まあまあ、あいにくでございますか、今日は本当にこの婆一人だけです」

「皆はどこにいったんだい」

遣手婆さんは返事をしないで窓を閉めようとする。そうさせまいと蘭が覆いを押さえ、

「どうしたのか、言ってくれてもよいだろう」

遣手婆さんしぶしぶ顔で、

「あたしが言ったことは内緒でございますよ」

「ああ、わかつている。誰もいないのだったら、俺たちが言わなければわか

らないことだ」

「じゃあ、言いますが、どこかはよくは知らないのですが、御即位のお祝いだとか。うちばかりではありません、平康坊はどの店も空っぽの
はずでございます」

「それで静かだったのか」

蘭が納得したように言う。韋荘はもちろんそれですむはずがない。

「いつ帰ってくるんだ」

口調がついきつくなる。

「どうなのでしょう、たぶん二、三日はお帰りにはならないでしょう」
遣手婆さんは韋荘の真剣な様子に少し怯えたような声になる。

「二、三日したら帰ってくるのか」

韋荘はますます厳しい言い方だ。

「この婆は何も知らないの」

遣手婆さんは窓を閉ざそうとし、韋荘は腕をぐいと差し入れ、手首を掴む。

「銀犁はどうなんだ。変りはなのか」

遣手婆さんは掴まれた手を離そうとしつつ、

「この婆は何も申せません」

「変りがないかどうかどうかくらい教えてくれもよいだろう」

「言ってはならぬと」

遣手婆さんは必死にもがく。韋荘も力の限り手首を掴み続ける。

蘭が肩越しに銀の粒を中へ投げ入れる。ちやりと音が耳に達して遣手婆さんは、

「あれは、この婆にでございましょうか」

「もちろんだ」

遣手婆さんは足元を見る。韋荘は手を放さない。

「実は、この婆には、こう見えますしても一人の娘がおりまして、ここより離れた坊に別れて暮らしております。こんな御時勢でございましょう、娘の様子子が気がかりで気がかりで、夜もろくろく眠れないのでございます」

「それは心配だろうな。夜は眠れずに、いま昼寝をしていたってことか。娘には何か旨いものでも買って届けてやったらよいだろう」

韋蘭は銀の粒をもう一つ投げ入れる。

「ありがとうございます。御恩は一生忘れません。それと、こんなことを申しては何なのですが、実は息子も一人おりまして」

「わかった、わかった。甥とか姪とか、いったい何人いるのかな」

蘭は銀をばらばらと足す。

「旦那さまにはいつもいつもすまないことです」

遣手婆さんは品なく笑う。

「で、銀犁はどうしているのか、聞かせてくれないか」

蘭の問に、

「この婆が申したとは内緒でございますよ」

「わかつている」

遣手婆さんは少しだけ顔を出してちらりと韋莊に視線を送り、

「旦那さまには大変にお気の毒な話なのでございます」

韋荘の胸が早く鳴り出す。

「構わぬ、教えてくれ」

声が少し震える。

「では、申し上げましょう。銀ちゃんは、旦那さまがいらしていたときの銀ちゃんではもうないのです」

「どうしたんだ。まだ十日ほどしか経っていない。まさか、死んだりしたのではあるまいな」

韋荘の体も震え出す。聞かない方がよかったことを聞くために今日はここにきたのか。そうだとしても、ここで聞かずに帰れはしない。

「いえ、そうではありません」

「では、どうしたんだ」

「驚かれませんかように。実は、旦那さまが最後にいらした日から数えて二日目か三日目からだったでしょうか、平康坊は黄王さまのお侍さま方の遊び場

となりました。この婆などはどうなることか、おろおろするばかりでしたが、案ずるより生むが易しでございませう。これまで見たこともなければ聞いたこともない大賑わいとなりまして、お客さまはくるはくるはで、しかもお金をたっぷりお持ちくださいました。うちばかりではなく、平康坊はどこもかしこも、お客さままで溢れ返ったのでございませうよ」

「崔婆の思惑が当たったのですな」

「空前の賑わいです。この婆も休む間なしでしたが、ある日のこと、お若くて御立派なお方がお見えになりました、宿世の縁とでも申しましょうか、そのお方が銀ちゃんにひと目惚れをなされたのです」

韋莊は顔をしかめる。

「それは誰なんだい」

蘭が尋ねる。

「お名前は存じません。黄王さまが頼りにされている將軍さまのお一人とか。そのお方は、それから毎日欠かさずお越しになりました、他の客には会わせ

てはならぬと、銀ちゃんはすっかりそのお方の思いのものとなったのです」

韋荘の力が抜け、遣手婆さんの腕は自由になる。

「どうせ盗賊上がりのむくつけき暴れん坊なのでしょうな」

「いえ、それはもう見るからに颯爽としたお方でございます。しかもお優しくて、この婆にもとてもよくしてくださいます」

「羽振りもよいのか」

「それはもういつもたくさんの御祝儀をくださいます」

「俺たちには及ばぬ上客だな」

「いえいえ、旦那さま方には本当によくしていただきました。あのころは、それはそれは有難く思っていたのでございます」

「そうかい。あのころはな」

蘭は軽く舌打ちする。

韋荘は口を開く力をすっかり失い、うなだれている。

あのころの己は、貢拳の受験生として世間から一目置かれる存在だった。

受かれれば出世が約束され、羨望の眼差しを一身に受ける。そのような己であったからこそ、崔婆婆も下にも置かぬ扱いをしてくれた。しかし、いまは何もない。金はなく、力はない。世の中が変わってしまった、将来に期待されるものはない。

懐に象牙の細工がある。昔は大した価値のあるものだったが、いまでは、せいぜい遣手婆さんなら珍しがらせることもできようか。己などはこの象牙以下である。そんな己のために、ここでまた蘭に貴重な銀を使わってしまった。くるのではなかった。

韋荘は窓に背を向ける。

「もうこれでよろしゅうございますか」

遣手婆さんが窓を閉じようとするのを蘭は止め、

「では何かい、銀型もその將軍とやらにはまんざらでもないのかい」

追い討ちをかけるようなことを尋ねる。

韋荘は背を向けたまま、思い切るためには、酷いことを耳にした方がよい

に違いないと考える。

「銀ちゃんの気持ちまではわかりません。難しいところのある娘ですから」
遣手婆さんは遠慮がちに小声で、

「もつぱら將軍さまが御執心でして。黄王さまから戴いた大きなお屋敷に、銀ちゃんをお内儀さまとして迎えたいと、そんな話も出ているようでございます」

「そいつは、崔婆はさぞほくほく顔だろうな」

韋荘はそのまま立ち去ろうとして、不意に思い立って振り返り、窓辺に手をかけ、

「知っていたらでよいのだが、一つだけ教えてくれないだろうか」

そう口にし、いや、やはり聞かずにおこうかと思う。

「何でございましょうか」

手を下ろし、しばし考え、聞かずにいたのでは思い切れぬ気がし、

「四、五日前のことだ、もしかしたら、若い兵士がここにきて、銀掬に手紙

のようなものを届けなかっただろうか。ひよっとしておまえ、知っていないかい」

遣手婆さんは微笑み、

「あのことでございますか。あれは旦那さまのお手紙だったのですか」

「おまえ知っているのかい」

「うまい具合にこの婆が受け取って、ちゃんと銀ちゃんに渡しました」

「あれは読んでくれただろうか」

「読まずにおくものですか」

「何か言っではいなかったかい」

「そこまでは。旦那さまのとわかっていたら、聞いておくのでした」

「いや、いいんだ」

そうつぶやくと、急に頭がほんやりし、窓が歪み始める。何が己におこったのか、地面が勝手に顔に迫ってくる。それを振り払おうともがき、

「あっ」

と叫んで、目の前が真暗になり、どうなったのか、蘭の腕の中におさまる。その後、どこをどのようにしたのか、店にまでは帰って、部屋に寝かされる。

ふと目を開くと、薄明かりのなかに阿枉の青白い顔がある。この子にすまないことをしている。なぜかそのように思う。

それから四ヶ月近く経った四月の初め。

昨日は細い雨のうちに暮れ、夜中は激しい風雨、戸を打ちつける音が長く続いて、あるときぱたりと止み、夜明けとともに黒雲は跡形もなく流れ去った。

朝はこのごろの決まりとなった薄い粥を、陳婆やが椀によそう。ほとんど湯と同じように喉から胃袋へ注ぎ入れる。これで腹がくちくなることはないが、床下の蓄えをできる限り食い延ばすにはこうしなければならぬ。どれ

ほど薄い粥でも食べられるだけましである。

太鼓の音が聞こえる。いつも通りの朝だ。

「蘭兄さんはどこにいかれたのでしょうか」

あつさり流し込んだ莠が言う。

「昨日は帰ってこなかったか。また市の方に泊まったのだろうか」

蘭は忙しい。生き抜くために懸命である。時折食べ物をどこかから調達してきてくれる。減るのを補うに足る量はなく、しかも法外な値だ。その分の金を稼ぐのは容易でない。

「あんなに動き回っていらして、お疲れにはならないでしょうか」

柳氏が湯を夫と韋荘の椀に注ぐ。茶は貴重品となり、普段は飲めない。

「あれは大した男だ。何もできないこの兄弟とは違う」

韋荘は笑う。己がもどかしく、悲しい。

最後に平康坊にいったあの日から家に籠ったままだ。

朝食を終えると、とりあえずすべきことはない。己の部屋に入って書物を

広げ、黒い文字をぼんやり眺める。何が書いてあるのか、頭に入ってこない。そのうちにとろとろと眠ってしまふ。

筆でももってみようかと思う日もある。墨をするうちに気持ちが悪くなる。

たまに、西周くん、東呉くんが訪ねにくる。口を開けば、世を嘆くばかり、気が晴れるようなことはない。二人は韋荘が分けてやる穀類だけで食いつないでいるようで、だいぶ痩せてきた。

今日も、何の書を読んでいたのか、それもすぐに忘れて、部屋からふらりと出る。

ふと、今朝ばかりはどこかこれまでと違うようだと感じる。

明るく中庭に日が当たり、まぶしいばかりに輝く板壁から、湯気がもうもうと立ち昇る。日の光がまだ及んでいない池のほとりの草は、水滴をこぼしつつ低くうなだれ、水の上にごく淡い気がゆらりゆらりと揺れる。

見上げれば、光溢れる初夏の青空。

韋荘は唸るように深く息を吐く。それと入れ違いになるかのように、腹の

底から、言い知れぬ焦燥感が湧きあがってくる。

己一人がここに取り残されている。季節は春から夏へと足早に変わり、己はまだ遠い冬のままだ。

空の明るさに目を細め、そして、瞼を閉じる。

この好天、かつてであれば、浮き立つ陽気に誘われ、時分の花を求めて遊びに出る都人が、そこそこに見られたことだろう。長安のあの春の華やかさがこの地上にまた戻ってくる日があるのだろうか。

瞼の裏に、かつての長安が、そして莊園の春が浮かんできてくる。

韋荘は首を振る。懐旧に浸っている己が情けなく、大きく目を開く。

庭を満たす白い蒸気の向こうに、お狐さまに祈る阿枉の後姿がある。見慣れたいつものその様子が幻のように見える。

阿枉は幻影になってしまったのか。いや、己の方こそがきつと幻なのだろう。

あれから己は何もせず、心は虚ろ。その脇を通り過ぎていったのもまた幻

だったのだろうか。

明かる過ぎる現実から目を逸らし、莠の店へと歩む。

麗しいこの天候は、少なくとも今日のこの一日だけは、地上において幸せでないことはひとつもおこらぬと見える。しかし、穏やかな光を投げかけてくれているお日さまは、もしかすると違背行為をしようとしているのではないかとも思えてくる。

阿枉が祈り続けているのは、同じ予感を抱いているからではないのか。いやそのようなことはないと考えを改める。莠と碁を打って、妙な思いを消すことにしよう。

日に日に望みは薄れても、阿枉は兄の無事を祈り続ける。

阿枉の兄が潼関の守備に向かつてから四ヶ月、阿枉のように家族の無事を祈る者が都に溢れている。息子を思い、孫を思い、夫を思い、兄弟を思い、父を思う。そのような者がどれほど増えたか。若い男のほとんどは黄巢の兵士に取られ、どことも知れぬ戦場へと連れていかれた。

幸いにも、店の男たちは変らない。韋荘も蘭も莠も兵士になるほど若くない。莠の息子は十五に足りない。楊臆は兵士になってしかるべき年齢であるのだが、西市に住む人間であるからと、武大人は臆の名をお上に届ける書類に記載しないでくれた。お蔭で臆は徴発を免れ、人目につかぬよう店の中で暮らしている。

臆を助けてくれた武大人であるが、武大人はすでにこの世にいない。最後に見たのは、黄巢の即位から七日、韋荘が仙水楼にいつて六日目だった。ひどくぼんやりとしまっていた韋荘には朧な記憶しか残っていない。

あの日は、いつものように武大人は莠と碁を打ち、一局終わったところで、「近頃まことに無心ではありませんが、褚胤の棋譜の註解をお貸し願う訳にはまいませんでしょうか」

褚胤は遠い昔の碁の名人、その棋譜と言われるものをおかして蘭が手に入れ、莠が研究して詳細な注解を施した。その原本は莊園に置いてきたが、写しが長安の店にもあった。

「あれはだいたい以前に書いたままです。いま見直せば改めるべきところが多々あるに違いありません。御覧に入れるべきものでもないのですが」

莠はそのように言いつつ、棚の高いところから取り出し、

「そんな代物ですから、おかしな箇所をぜひ御指摘ください。返却は御無用です。お貸しするものは返さずとも結構と言うのがうちの店のいつもの方針です」

武大人がそれを嬉しそうに抱えて出ていったその日、黄巢は、趙璋（ちようしょう）の邸宅に名銜（めいけん）を投じた者は官位を復するとの命を下した。趙璋は黄巢の朝廷の重鎮の一人、名銜は名前と履歴を記した札、名銜を趙璋に提出するとは新朝廷に忠誠を誓うのを意味する。黄巢は四品以下の官僚は元の地位に留めるとしていたが、三品以上の者にも朝廷に残れる道を開いた。ただし、宰相級の重臣は除外され、唐を危機に陥らせた罪を問うとして獄に投じた。宰相の一人であった盧携（ろけい）は、唐の皇帝が脱出した夜に自殺していた。その遺骸が土から掘り起こされ、改めて刑罰が加えられた。

唐の重臣だった者は、盧携のように自害し、あるいは捕縛され、あるいは町に潜伏した。驚くべきことに、幾人もの高官が張直方の屋敷に匿われていた。張直方は黄巢のもとに最初に馳せ参じた男で、唐の罪人を厳しく詮議する立場にあつた。張直方の屋敷の壁と壁の間に秘密の部屋が設けられ、大勢の者がそこに潜んでいた。黄巢は激怒し、張直方も、匿われていた者も、張直方に連なる者も、即座に処刑された。武大人も連座して殺された。

狐を大量に虐殺した張直方は終わりをよくしないと言っていた。それは的中し、張直方と疎遠になっていった蘭には何らお咎めは及ばなかった。蘭も韋荘も単純に喜べはしなかった。張直方は都を黄巢に手渡した無節操な男であると思っていたのは、蘭や韋荘だけではない。それなのに、実は唐の再興の機会を秘かにうかがっていたのだ。張直方は皇帝の恩義を忘れずにいた。やはり皇帝の恩を受けてきた韋家の歴史を思うと、韋荘は内心忸怩たるものを覚えないわけにはいかなかった。

それでも、人はその日その日を生きていかなければならない。唐朝への信

義にこだわっていたのでは命を保てない。町の治安が急に悪化し、盜賊が横行し出した。張直方の一党が一扫され、町の無法者に睨みをきかせる者がいなくなったからだ。黄巢の手下は、媚び諂う者は助けても、都の一般的な治安維持には無頓着だ。蘭は店の表側を嚴重に鎖した。

年が改まり、黄巢は元旦の礼を盛大に行った。新朝廷のもとで生きるために、安邑坊の富裕な者たちは、それぞれに新朝廷への接近を試みた。向かいの官人は新朝廷の官僚として真面目に仕え、西隣の太遲先生は、医者としての腕はまずくても世間を泳ぐ術には長け、若い妾の一人をどこかの有力者に献じて、それからは、輿に乗って威張ってあちこちの病家を見舞うようになった。東隣の旧家の母と娘は鳴りを潜めていたが、親類筋とともに新朝廷への接近を図り、時折、立派な車馬が出入りするようになった。

蘭は皮日休を狙った。皮日休が昔の信念を保ったままにいるのなら、新朝廷に期待をもてなくもないと考え、また、商人としては、時の権力にうまく擦り寄るのも腕の見せ所であると、うまい手づるを探し、「兄貴、ちよつと借

りますな」と、韋莊がかつてつくった一篇の詩を清書して皮日休に献じた。世の不正を嘆いた、皮日休の好みに合いそうな詩だ。氣力を失った韋莊は、特段の考えもなく、蘭の好きなようにさせた。

しばらくすると、出仕を勧める皮日休の手紙が韋莊に届けられた。皮日休は、宦官が政治を支配していた長安では受け入れられず、黄巢に身を投じた経験から、才能がありながら唐の時代には日陰者となっていた人間を新朝廷に迎え入れようと努めていた。

「どうしますかな」

蘭に問われて、真先に韋莊が考えたのは、これで新朝廷に出られれば、銀犁に惚れ込んだと言う將軍と競えるかも知れないと言うことだった。その思いが浮かんだ瞬間、心の底に沈めていたものが噴き上がってきてしまった。まだ思い切れていなかったのだ。

韋莊は全く裏腹の返事を蘭にした。

「先祖に恥じることはできない」

蘭はうなずき、

「では、いまは病気と言うことで、当たり前障りのない返事をしておきますかな」

「そうしておいてくれ」

韋莊は仕官の機会を見送った

蘭は皮日休と細いつながりができたことから、商売の足がかりを少しずつつくっていき、黄巢の新官僚に倉の品を売り込み、得た銀で食糧などを調達した。

二月になって、向かいの官人の弟がきて、正月にもらえるはずの給与米がまだ支給されていないとぼやいた。もともとの唐の官僚だった者はいくら地位が保全されても、黄巢の旧くからの手下とは処遇に格段の開きがあるようだった。官人は妹を有力者のところに嫁がせようと動き始めていた。妹は、唐の皇族の遠い縁者のところにいくはずだったのだが、その者は生きているか死んでいるかわからなかった。

そのころに一つの騒動が持ち上がった。ある朝、尚書省の門に、宰相の尚讓を愚弄する詩が掲げられた。尚讓は黄巢の知恵袋として新朝廷で最高の地位にある。しかし、生半可な学問しかなく、唐の旧官僚の洗練された人々の前で時折失態をさらしていた。ろくに文章も書けないのを揶揄する詩に尚讓は激昂し、「何を見張っていたのだ」と、門衛の目を刮り抜かせ、詩を書く人間を全て捕まえてこいと命じた。これには困まった。詩を書く人間など長安には何千人もいて、貢挙を落第した黄巢だって詩を書くのである。尚讓は腹いせで、出鱈目に捕まえてきた三百人余りを処刑して街にさらした。

三月になると、蘭はわずかな物を手に入れるのでも、相当に苦勞するようになった。市では厳重な統制のもと価格は据え置かれていた。むろんそれで買おうとしても、「売りたいくても品物がないので」と断られるだけだ。裏に回ればそれなりに品物が存在することもあり、値は何十倍である。蘭でさえ困るのだから、普通の民は当然困窮する。莠の店には、黄王さまの賜りもののお蔭でしばらくの間は借り手がほとんどこなかったが、春の深まりとともに、

錢をほしがる者が数多くくるようになった。貸す元手はわずかしかなく、稀に返しにきた者があつた場合に限って融通できた。以前に錢を返してくれた餅売りの爺さんも「粉が買えなくては商売ができません」と、憔悴した顔で錢を借りにきた。例の老女の方は、葬儀屋の商売が繁盛しているのか、あれから顔を見せない。

今朝の明る過ぎる日差しを避けるかのように、韋莊は莠の店について入り込む。

碁盤を挟んで、静かに打ち始める。蘭がいないと、兄弟二人では話すこともない。

戸が叩かれ、乳飲み子を抱えた女が入ってくる。細い顔を斜めに、伏し目がちに、消え入るような声で、

「ここでお金を貸してくださいと聞いて参りました。ほんの少しでよいのですが」

莠はのっそり立って、

「貸したくても銭がないのだ」

いつものように断る。

「この子に飲ませる乳さえ出なくて。わずかでも」

女は青白い顔を歪める。

髪は乱れ、衣類は垢にまみれ、真黒な素足。それでも赤ん坊をくるむのは牡丹柄の絹の布、元は良い暮らしをしていたと思わせる。

「そう言われても、本当にうちには何もないのだ」

「ここが最後の頼みとやってきたのです」

女は赤ん坊を前に差し出し、

「この子のために」

と、言う。莠は同じ返事。赤ん坊は泣く力もないのかぐんなりしている。

「どうあつても無理でしょうか」

「そうだな」

女は放心したような顔で、へなへたと壁際にしゃがみ込む。

「もしも誰か返しにくる者でもあれば貸せるのだが。そこで待つてみるかい。しかし、ここ数日、誰も返しにきていないのだが」

女は黙ってうなだれて動かない。

莠は首を左右に振りつつ碁盤の前に戻ってくる。

韋荘は、女の様子が気になるが、何かしてやれることもなく、碁盤の方に向きを直し、次が自分の番なので石を置く。

莠はその手を予想していたらしく、すぐに石を置く。たちまち難しい局面となる。韋荘は応手を考える。珍しく頭が働き出してきたと感じる。

頭の中のものもやが晴れて、すつと見通しがよくなったようだ。しばらくこのようなことはなかった。

いままで己は何をしていたのだろうか。先ほどの焦燥感が戻ってくる。虚しく季節が移ってしまった。

思考は碁を離れ、これまでの日々を巡り、はっと気づいてまた石を置く。

次に莠の手を待つ間に、先程と同じことをまた繰り返し、湧き上がってく

る痛みに耐える。

気配に振り返ると、女が立ち上がっている。

「どうしたんだ」

韋荘の声に、女はすつと両腕を伸ばし、赤ん坊を頭上に高々と掲げる。

「何をするんだ」

韋荘の声に、女の形相が一変する。

「どうせ死ぬだけ。いっそこここで」

女は両腕を突き上げたまま、壁際からつかつかと寄ってくる。

「ううっ」

低く呻き声を立てる。

「どうした」

「そんな碁盤、この子の血で真っ赤にしてやる」

女の腕がわなわなと震える。

韋荘は立ち、女の腕に掴みかかる。女は身をよじって振り払う。韋荘はよ

ろける。女は片手で赤ん坊をわしづかみにする。赤ん坊が激しく泣く。女はそれを投げようとする。

莠が碁盤をまたいで飛び出し、両手を伸ばして受け止めようとする。

女はそれを見ると、体をひるがえし、赤ん坊を掴んだまま腕をぐるぐると回す。赤ん坊は火の付いたように泣く。

「この子がいれば私は生きられず、私が生きられねばこの子は死ぬ」

「やめろ」

韋荘は、女の腕を押さえようとする。女は韋荘の腹を蹴り上げる。その激しさに韋荘はのけぞる。

莠はどうにかして女の二の腕を捉える。

「死ぬ」

女は赤ん坊を中空に投げ上げる。牡丹の模様が広がる。泣き叫ぶ赤ん坊は天井をかすめて落下する。韋荘は足がもつれて駆け寄れず、赤ん坊が壁に激突するかのとき、いつ入ってきていたのか、蘭の胸へとおさまる。

女は床に崩れる。

「阿枉はいないか」

蘭は赤ん坊を抱いたまま中庭へと出ていき、しばらくして一人で戻ってくる。

放心状態の女に向かって、

「いま重湯を吞ませている。この店には銭が残っていない。俺からこれを貸してやろう」

蘭は小さな袋を、女の膝の前に置く。

女ははだけた着物を胸の前で合わせ、

「これは」

「干した米だ。赤ん坊と二人、三日分くらいにはなる。当座の飢えをしのぐうちに、がらりと世の中が変るやも知れぬ」

女は袋を前に押し、

「こんな哀れな女、三日を生きるところで、どうにもなりません。ここにも

こないで、死んでいた方がよかったです。すでに終わってしまったのだから。なぜここにきたのだろうか」

「世の中、悲嘆するばかりではない。よいことを教えてやろう。官軍が都のすぐ近くにまでできている。だから、世の中ががらりと変わるかも知れない」

「まことか」

女は顔を上げる。

阿枉が赤ん坊を抱いて入ってくる。腹が満たされたのだろうか、おとなしく眠っている。

「確かなことだと聞いてきた。官軍は長安を目指して進んできていて、日を置かずして、城壁の向こうに姿を現すに違いない」

「兄も帰ってくるでしょうか」

阿枉が尋ねる。

「そこまではわかりませんな」

「官軍を指揮するのは誰だろう」

韋莊が言うと、

「それもわかりませんな。ただ、官軍はなかなか強いようで、黄巢軍は各所で敗北を重ねていたようですな。都の者には全く知られぬようにしていたのですが」

「黄巢はどうするつもりだろう。籠城して官軍を迎え撃つのかい」

「そうなれば、俺たちは黄巢の民として官軍と戦わねばならなくなりますな」

「それはとんでもない話だ」

「兄と戦うことはできません」

「俺が思うに、黄巢も唐の皇帝と同じことをするのではありませんかな。実は、もうそうなっているかも知れないと思つて、急いで帰ってきたのです。」

何しろ、兄貴をすぐに連れていかなければなりませんからな」

「私を、どこへ連れていくのだ」

「その前に、その赤ん坊を返しておきましょう」

蘭は阿枉から赤ん坊を受け取り、

「そなたも聞いていたように、官軍がくる。黄巢は恐れをなして逃げ出すだろ。官軍がくれば都は昔に戻っていく。この米で命をつなぐ間に、よい巡り合わせもあると思って、生き延びろ」

女は赤ん坊を抱き、阿枉は米の袋を女の腰に結わい付ける。

女は赤ん坊の顔をじっと見つめ、

「女一人で生きていかれるとは思えませんが、この子のために、旦那さまのお恵みでいましては、お天道さまの光を浴びる身でいることにします」
女は出ていく。

蘭は碁盤を見下ろす。

「面白くなりかけていますな」

「これは項でしょうか」

莠が言う。

「どこですか。項にはなりそうなところがここにありませんか」

「いえ、都のことです」

蘭は手を叩いて笑い、

「なるほど項ですか。黄巢がくれば唐の皇帝が逃げ、官軍がくれば黄巢が逃げる。そしてまた黄巢がくれば官軍が逃げてと、碁の項と同じ、いつまでも結着がつかない。そうなつては面倒ですな」

韋荘は、

「黄巢は都を追い出されたら、もう戻つてはこないだろう。安祿山のときと同じで、唐朝は再びの隆盛を取り戻す」

「何とも言えませんな。黄巢は案外都で孤立しているのかも知れず、そうなら兄貴の言う通りになりましょう。大行列を組んで長安に乗り込んできて威勢を見せ付けはしたが、あれが全てだったのでしようかな。略奪しては次に移ることを繰り返してきた黄巢ですから、都の次に移っていくところがなく、この先どうしてよいのか困っていたのではないですか。とするとすな、官軍に追われて都を出ても、いくところがなければ、そのうちまたここに戻ってくるしかない。三千人の美女を抱えた宮殿に一度住めば、その味は

忘れられないでしょうしな。そうになると、やはり莠くんの言うように項で、取ったり取られたりでの勝負がずっと続きますかな」

「そんなことになったら、都は滅茶苦茶にされてしまう」

「とすると、利巧な人間は、この際、都を出るしかありませんかな」

「黄巢と一緒に逃げるのか」

「黄巢とは付き合わず、いけそうなどところにいけばよい」

「いまは外には出られるのだろうか」

「まだわかりません。逃げられるとわかったら、逃げるのでしょいな」

「同じ失敗は繰り返さないようにしたいものだ」

「そうだとすれば、いつでも逃げられるように、いまやっておくべきことがありはしませんかな」

「何だい」

「それで兄貴を連れていかなければと、あわてて帰ってきたのですな」

「連れていくとはどこへだ」

「決まっております。平康坊ですな」

「何を言ひ出すのだ」

「この前、都から出られなかったのはなぜですか。同じ失敗をしないためには、どうしたらよいか、答えは簡単でしょうな」

「しかし」

「都を出ていくときに、一緒になくてよいはずがありませんか」

「いや、もう思ひは断つたのだ」

「本当ですか」

今朝からの焦燥感はこれであったのか。

やるべきことをやれずにいた。やれるはずがないから、虚ろな心で過ごしていた。

俄に情勢が変わつたのだ。このままでよいはずがない。いましかない。

「仙水楼にまでいけるだろうか」

「いつてみるしかないでしょうな」

「いますぐにか」

「遅くしてよい理由がありますかな」

「わかった」

韋荘の心は決まる。

「平康坊にいつてくる。大切な用事だ」

韋荘は阿枉に向かって言う。銀犁とよく似た目の阿枉に、己の心の真実を告げるのにいまはためらいはない。

「お出かけくださいませ。一人の女性を不幸にしないために」

「ありがとう。全てが必ず元に戻る。そうでなくてはならない」

もう一人の不幸な女性がここにいる。

「このような日々は、必ず終わると信じています」

阿枉を兄に会わせてやりたい。しかし、黄巢が敗れたら伍七はどうなるのか。

蘭は莠に向かって、

「俺たちが出ていったら、ここの戸は閉めてもらいますかな。表は臆に言っ
ていつも以上に嚴重に塞がせてください。うまくすれば昼までには帰ってき
ましょう。それまでにはきつと何もおこらないでしょう。唐の皇帝が出てい
った日と同じですな。それでも、姉さんにも、念のための用心して下さいと
言っていたいただきますかな」

「万事心得ました」

莠と阿枉を店に残し、韋莊と蘭は路地に出る。

韋莊の心は平康坊へと飛ぶ。

道はぬかるんでいて、着物に泥がはねあがるが、気になどしていられない。
蘭よりも前に立ってずんずん進む。あの日から初めて外に出た。

「平康坊に着いたらどうしますかな」

蘭が背中から聞いてくる。

「銀犁を連れて戻ってくる。それだけだ。力ずくだろうが何だろうが、どう
にでもする」

「大した心意気ですな。抱柱の信を貫くに命も投げ打つ覚悟ですな」

「その通りだ」

「意気軒昂、まことに結構。幾分かの軍資金はここにあります。ここのとこる運が重なって少々の儲けがありましたからな」

「そなたにはいつもすまない」

安邑坊の北門から大通りに出る。至って静かである。昨日の雨が日光によつて蒸され、道は白い靄に包まれている。遠くわずかな人影が淡く幻のように見える。

「あの朝と同じですか。唐の皇帝が逃げた後、何も知らぬ官人たちが皇城にいくと、その後、町は奇妙に静まり返りましたな。俺の思った通りに、黄巢は夜中の嵐にまぎれて逃げてしまったのでしようかな」

「我々には好都合だ」

「そうではあっても、少し妙な気もしますな」

「何がだい」

「どうもおかしな具合。そう感じるだけで、何がどうとはわからないのですが」

ともかく急ごうと、東の市の中を抜ける道順を選ぶ。

「やはりおかしいですな」

蘭に言われるまでもなく、韋荘も異変を感じている。道に誰もいない。どの店もぴしゃりと鎖されている。東の市で一度だってこのような光景は見たことがない。

それでも、

「うちも戸を閉めてきた。どこも同じように用心しているのだろう」

と、ことさらに何でもないかのように言って歩き続ける。

おかしなことがおこっているのならなおさら、平康坊へ早くいかねばとの思いが強まる。

「しかし、この静けさは妙ですな。市の連中は消えてしまったのですか。黄巢が逃げ出したのではなく、市の連中がいなくなったのか。それも妙な話

ですな」

「そのようなことがあるものか。そなた、昨日は市に泊まったのではないのか」

「あいにくと安善坊で。耳の早い市の連中が何かを聞いて、どこかにいったのか、尋ねる相手がいればよいのだが、これでは」

蘭は、人影のない道を見回す。韋荘はいよいよ気がはやり、蘭より先に立つて北へと進む。その袖を蘭が引き、

「兄貴、これはいけませんな。何かわからぬが、これは尋常ではない」
韋荘は振り返らず、

「どういふことだい」

「とにかく、戻った方がよきそうですな」

「ここまでできているのにかい」

「危ないことがあるに違いありません。でなければ市がこんなになっているはずがありませんからな」

「危ないとはどんなことだ」

「それはわかりませんな」

「ここからなら、戻るよりいった方が近い」

蘭の手をほどき、さらに早足で進む。

危ないことがおこるのなら、なおのこと銀犁に会うしかない。三ヶ月余り抑えていて火の付いた気持ち、いまさら元に戻せない。

「兄貴、だめだ」

呼び止める蘭を置いて韋莊は走る。

四つ角でぬかるみに足を滑らせてつんのめると、右から走ってきた男と衝突しそうになる。

「気をつけろい」

飛びのいて、拳を挙げて怒鳴る男、すぐに蘭に向かって、

「これは若旦那さまではございませんか」

「ああ、誰かと思つたら、おまえか。泡食つてどうしたんだ」

蘭に会釈する初老の男、余り良くない面体を韋荘は見たことがない。

「どうしたって、若旦那さまこそどうなさったのです。ぐずぐずこんなところだ」

「別にぐずぐずはしてはない。むしろ急いでいる」

「何言っているんです、みんなとつくに逃げちいましたぜ」

「逃げた、どこにだ」

「都の外に決まってましよう」

「どうして逃げるのか」

「若旦那さま、何も御存知ないのですか」

「官軍がくるのだらう」

「わかっているじゃないですか。だからですぜ」

「官軍がくるのにどうして逃げるんだ」

「黄巢たちは夜の嵐の間に雲隠れ。それも官軍が無茶苦茶な連中だからで。」

とにかく性質が悪いとか」

「そんなにひどいのか」

「真つ先にここが狙われるだろう。とにかく逃げるしかない、皆消えちまいました」

「おまえはどうしたんだ」

「あつしは、ちよいとよくない遊びをして、太鼓に間に合わずに友達のところへ転がり込んでいたら、みんな逃げるといふ騒ぎになって。旦那さまが心配で、見に戻ったのですが、どうやらどこかにもういかれた様子。それであつしも逃げよう」と

「武鈞ぶ きんさまは御無事なのか」

「人に知られない場所で、あつしらがお世話してまいりました」

武鈞とは武大人の息子。この男は武鈞の店の者だろう。

「で、どっちに逃げようとしているんだ」

「官軍は東からも西からもくると言いますから、とりあえず南に逃げるのがよいと、みんな南へいきました。若旦那さまも早くしませんと」

「わかった。俺も逃げよう。武鈞さまに会えたらよろしく言ってくれ」

「若旦那さまもくれぐれも気をつけて」

男は走り去る。

「兄貴、聞きましたな」

「市の連中はおかしな噂に惑わされているだけだ。くるのは官軍ではないか」
韋荘は努めて冷静さを保って言う。仙水楼にいかずに帰れはしない。

「いや、官軍にもごく性質の悪い連中がいるのは以前から。黄巢は堂々の隊列を組んで長安に乗り込んできましたが、今度の官軍は、金や女を手にしよ
うと、目を血走らせて入ってくるのでしような」

「そんなことあるものか」

「市の連中の言うのが最も確かでしょうな」

「そうならそれで、戻れるものではない。いかねばならない」

「平康坊へですか。抱柱の信を貫くために、兄貴は官軍に殺されてもよいと」

「その通りだ。何としてでも銀犁を連れて帰る」

韋莊は進む。

「待ってくれ」

蘭は韋莊の背を掴む。

「駄目だ」

「いや、いく」

「兄貴すまない。まだ時間があると思っていたんだ。兄貴のためにと連れ出したが、これは失敗でした」

「まだいける。何事もおこっていないではないか。平康坊はすぐ道の向こうではないか」

韋莊は振り切る。蘭は飛びついて両腕で抱える。

「いや、もう間に合わない。兄貴、もう始まってしまったんだ」

「始まった」

「ほら」

蘭は抱える韋莊の体を東に向け、

「聞いてくれ」

耳に神経を集中させると、遠くから何か音が聞こえてくるようだ。韋荘は走り出そうとして、蘭に押さえ付けられる。

「駄目だ、兄貴」

「いかせてくれ。銀犁なしには帰れない」

「それはわかるが、しかし、もう駄目なのだ」

「放せ」

「兄貴にとつて銀犁がどれほど大切なのは、俺もわかっています。しかし、俺にとつて、兄貴はもっと大切なのです」

「私を大切と思ってくれるのなら、銀犁のところにかかせてくれ」

「莠くんにも、藹くんにも大切な兄貴だ。兄貴を虢州に連れて帰らねば、俺は莊園の誰にももう会えない。顔向けできない」

「銀犁のためならこんな命など惜しみはしない。銀犁がいなくて莊園に帰ってどうしようと言うのだ。莊園などどうでもよい」

「それが兄貴の本当の思いだと俺にはわかる。だが、俺は兄貴をここから連れて帰る。兄貴にもしものことがあつたら、楊爺に俺は会わせる顔がない。俺が守ると、俺は楊爺に言つて莊園を出てきた。楊爺を悲しませるようなことだけはしないでくれ、頼む、兄貴」

楊爺の顔が心に浮かぶ。韋莊の体の力が抜ける。

楊爺を喜ばせるためにも貢奉に受かりたかつた。何もかもが駄目になつてしまつた。

蘭は韋莊の両脇を抱え、

「さあ、兄貴、どれほど不本意であろうとも、ここから帰つてくれますか。

ここまできてしまつたのは俺の間違ひでした。兄貴の心を乱してしまつた。申し訳ない」

「そなたが謝ることはない。いつもそなたにはすまないと思つている」

そのように言いながらも、西にいく思いを完全には捨て切れず、道の中央でなお行きつ戻りつを繰り返す。

「いけない、本当にいけなくなった」

蘭の声に、韋荘も周囲の変化に気づく。遠くにわずかに聞こえていた音が、それが何であるのかはつきりとわかるまでに大きくなっている。

音は一つではない。一つは馬の蹄の響きだ。一つは人の叫び声だろう。一つは剣と剣がの当たる音か。何かを崩す音。倒すような音もある。それらが交じり合って異様な響きを作り出している。

悪寒が韋荘の全身を貫く。

「何がどうなっているのか」

「兄貴、見てくれ」

蘭の指差す東の方に、細く煙が立ち昇り始めている。雨上がりの淡い靄を衝き抜けて、灰色の煙が上がっていく。

「しかし、銀犁が」

韋荘は弱々しくつぶやく。

「ここは俺の言う通りにしてくれ」

蘭は韋莊の腰を抱えるようにして南に向き直る。有無を言わさぬ蘭の必死さに、韋莊は身を任せる。

いまきた道を戻る。

「間に合えばよいが」

どうにか東市の南の門にまでたどり着く。

二人の足がここで止まる。

門の外の大通りに地をどよもす響きがある。人馬が東の方から押し寄せてきているらしい。足が震え出す。

「通りを渡れますかな」

蘭は門の脇からそろりそろりと顔を出していく。

韋莊は己の膝を押さえる。わなわなと勝手に動くこの足で、道をつっ切つて安邑坊の北門までいけるのだろうか。

蘭はすぐに顔を引っ込める。

「だめだ、もうすぐそこまできている」

蘭は拳で己の頭を叩く。

「何という失敗を俺はしてしまったのだ」

「そなたのせいではない。これも私のせいだ」

そういう韋荘の背中を蘭が押し、

「あそこしかない。兄貴、走ってくれ」

いま戻ってきたばかりの道をまた駆ける。

門外に風が起こる。道を馬が疾駆していったようだ。

「あいつらはこつちにきますかな」

蘭は韋荘の手を取り、角を曲がる。坊の東の縁まで遠く一直線に見渡せる。

靄の彼方に黒い影が動く。

「あちらからこちらも見えますな」

蘭はすぐまた角を曲がり北向きに走る。

東西に走る道にまた出て東に走る。背後にいやな気配が生じる。

「あの連中、入ってきたようだな。兄貴、急いでくれ」

韋莊の足がもつれる。

地面を震わせる蹄の音。こつちにはこないでくれと祈り、ちらりと振り向く。騎馬武者が角から飛び出してくる。

逃げねばならぬと思って、ころぶ。泥が飛ぶ。もがいてからだか滑り、立ち上がれない。ぎらりと光るは剣の影か。

蘭が戻ってきて馬に向かって投げつける。首に当たって、きらきらと銀の粒が四散する。敵はそれに目を奪われる。

「兄貴、立つんだ」

蘭に手を取られて立ち、走る。

左に折れ、右に折れ、また左に折れて、その先の細い路地に飛び込む。

息が切れる。

「こつちだ」

奥の隙間へとからだをすべりこませる。板塀と石壁の間に、一人の人間がおさまるだけの幅がある。懸命に息を鎮めようとする。路地の向こうで馬が

駆け抜ける音がし、去っていく。

「かろうじて命拾いしたようですな」

大きく息を吐く。全身から汗が噴き出す。

二人は板塀と石壁の間をいましばらく進み、蘭は石の壁面に手を滑らせ、何かを探っていく。黒光りする艶々の板塀に対して、石壁は灰色ででこぼこである。蘭は出っ張りを見つけ出し、そこ手を掛け、膝の高さにある凹みにつま先を入れ、ぐいを身を引き上げる。あとはするすると上へのぼっていく。壁が梯子代わりになっている。

「兄貴もきてくれ」

韋荘も真似をする。

板塀の上端に移る。そりそりとその上をたどって奥へと進む。左側へと回りこむと、板塀にぴったりくっついた建物の窓がある。窓に付けられた横棒がやはり梯子代わりになっていて、それをのぼると屋根の上に出る。

「見てくれ」

先ののぼって屋根に座す蘭が空を指さす。一本だった煙が幾筋にもなり、灰色から黒に変じて、高く昇って北へと棚引いている。

日はいつの間にか高々と南の空にあり、眩いばかりの初夏の光を地上に降らせている。それも見る見る広がっていく煙によって遮られてしまうのだらう。

韋荘も屋根に座る。体ががたがたと震えている。よくここまで逃げてこられたものだ。

「長安は燃えているのか」

「見ての通りですな」

「火を放ったのは官軍なのか」

「たぶんそうなのでしような」

「どうしてだ。黄巢が入ってきて何も変らなかつたのに、官軍が都を焼いているのか。どうということなのだ」

「わかりませんな」

屋根の上は、地上よりも遠くの音がよく聞こえる。馬が走り、怒声が飛び交い、建物を破壊する。時折、耳をつんざく悲鳴。

蘭は腹はいになって屋根の上を探り始める。手を滑らせて行って指のかかるところを見つけ、金具の頭をつまみ出す。引くと紐が伸びてきて、ぐいと力を入れると、屋根に四角い窓が開く。中に木の取っ手がある。それをがたがたと揺すって下に押しすと、ぽっかりと小部屋のぞく。ふんと黴臭さが鼻を突く。

「ここはどこなんだい」

「武大人さまの店の裏のまた裏ですな。ここのとっておきの隠れ場所を、昔武大人さまに教わったのを思い出しましてな」

「ここに入るのか」

「その前に小便をしておきましようかな」

蘭は屋根の縁にしゃがんで放尿する。

その態度に感心させられる。この従弟に何度も助けられてきた。

二人は屋根裏の小部屋に入り、蘭が慎重に窓を閉じていく間に、悲鳴がまた耳に達する。

「いまのは近かったようすな」

誰もいないと見えた市だが、まだ人は残っていたようだ。

窓がぴたりと閉じられると真暗闇になる。二人は並んで横になる。自分の胸の鼓動が聞こえる。恐ろしいほどに速く鳴っている。

目が慣れてくると、ぼんやり白く二つの円が見えてくる。息抜き用の穴だろう。武大人の用意周到さに感謝する。

「火さえこなければどうにかなりましような。暗くなるまでここで生きながらえることができれば、安邑坊に帰れますか」

「あそこも同じようなことになっているのだろうか」

「わかりませんが、東から入ってきた連中はまずここを狙って、次に皇城へいくのではないですか。安邑坊にはいかずに」

「そう望みたいものだ」

市の隣の平康坊はどうなるのか、気がかりではあっても、それは口には出さない。

銀犁はいまこのときにどうしているのか。

外の騒ぎが周りに広がりに、そして近づいてもくる。

壁越しに聞こえる音だけでは、どこで何が起こっているのかわからないが、尋常でないことが行われているのは確かだ。

いまの響きは路地の口あたりか。

「ここにもきますか」

少し落ち着きかけていた鼓動がまた速くなる。

音は近くでひとしきり続く。ここにはこないでくれとの願いが叶ったのか、一つ大きくどすんと響いて、次第に遠のいていく。

「ひとまず終わりか」

「どうですか」

外はどうなっているのか。安邑坊は無事なのか。平康坊はどうか。

銀犁を連れ出す一心で来たのだが、町の破壊が始まったいま、銀犁はすでに平康坊にはいないのではないかと、韋莊は思い始める。

黄巢の若い将軍が銀犁を妻にしたがっていると仙水楼の遣手婆さんは言っていた。もしかしたら、すでにそうなっているか。いままでは考えたくもないことだったが、いまこうなってしまった都に銀犁がいると思うよりは、その若い将軍のもとに銀犁がいて、都の外に出ていてくれる方がまだよい。

銀犁の心はわからぬが、無事であるのが何よりだ。もしかしたら、銀犁はその若い将軍を愛するようになっていくのかも知れない。それならそれで全てはよい訳だ。

「単純な話だ」

韋莊はつぶやく。

「どうかしましたかな」

「いや、何でもない」

己はひどい思い違いをしていたようだ。この身さえ守れぬのに銀型を守れるはずがない。何のために今朝は平康坊へと急いだのか。

急に店のこと荘園のことが気になってくる。

いったんは遠ざかった音であったが、今度は別の方角から近づいてきつつあるようだ。

地響きを伴って、はつきりと迫ってくる。どすんばたん建物壊される音。ぐらりと、この家も揺れる。

「ここもだめですかな」

蘭が言う。

叩き壊すような音。がたがたと家が揺さぶられる。思わず腕に力が入るが、屋根板を押さえたところで揺れがおさまるものではない。

武大人の店にも誰かが入ってきたのだろうか。立派な店構えであるから、見逃すはずがない。

「もしも煙がきて、尻が熱くなったら、外に飛び出すしかありませんかな。

下から槍で突かれて、逃げ惑って、兄貴も俺もおしまいですかな」

蘭はさも楽しいことであるかのように言う。

「追い回され、痛い目にあって血を流して死ぬよりは、ここで横になったまま煙に蒸されて死んだ方がよくはないか」

「横着な死に方ですな。暗闇で窒息するのは、いただけませんな。どうあっても死なねばならぬのなら、外がどうなっているのか見てからの方がよくありませんかな」

「見たところで嬉しいものではあるまい」

「隋、唐の二代の都が壊されるのですからな、なかなかの見ものでしょうかな」

「己が殺されるときに、見ものも何もないものだ」

ぐらりと揺れる。人の声がすぐ下にある。韋荘も蘭も口を閉じる。

ぶすぶすと、嫌な音がする。槍で壁や天井を突いているようだ。

韋荘は一切の心配を消そうと体を硬くする。

喚いている声が真下にある。

ぶずぶすと迫ってきて、背中のすぐ脇に衝撃が走る。体を丸める。腹の横に槍の先が出る。思わず叫びそうになるのを、どうにかこらえる。

下で何か言い合っている。

不意に、すっかり忘れていた左足の古傷を思い出す。かつて韋慍に刺されたものだ。今度は体のどこを傷つけられるのか。

しばらくどたばたして、槍はもう突かれず、真下の声は聞こえなくなる。ここを出ていったようだ。

ほつと息をついて体を伸ばす。

「これで終わりとはいきませんか」

蘭がささやく通りに、またしばらくすると、階下で男たちの声が不気味に低く響くようになる。何を言っているのかわからない。

それが聞こえなくなると、それほど遠くないところで、甲高い女の悲鳴が轟く。どこかに女が潜んでいたのだろう。槍で突いていたのは、自分たちの

ような男ではなく、女を探していたのだろうか。女の叫び声は何を意味しているのか明瞭であるが、どうすることもできない。

遠くから近くへ、そして遠くへと、波のように騒ぎが押し寄せては引いていく。それは幾度繰り返されたのか、どれだけ時間が経ったのか、いつしかあたりは静まり、次の騒ぎが迫ってこなくなる。

「そろそろよさそうですか」

蘭は身を起こす。息抜きの穴が明るさ失っている。

窓がわずかに開けられる。外からの空気が流れ込み、肌の上をひんやりと滑る。外の音も入ってくる。

「まだ終わったのではなかったですな」

それでも蘭は屋根に手を掛け体を外に出す。

「大丈夫か」

「この界限はおさまっていますな。音は遠くからのものだけです」

蘭が手を伸ばしてくる。それにつかまってこわごわ外に出る。

黴の臭いに慣れた鼻を焦げ臭さが襲う。日はすでに西の低いところにまで落ちていて、空は気味悪いばかりに赤い。

「ここが焼かれずにすんでよかったですな」

「戦とはこのようなものだったのか」

「まだこれは大したことないでしょうな」

「たぶんそうなのだろう」

蘭といった揚州への旅の途中で、徐州兵士の反乱で破壊された町や村を見た。東の市はまだたった半日、戦にさらされただけである、かつて見た町や村のようにするには、どれだけのことが為されなければならぬのか。

「そのうちこんなことも見慣れてしまうのでしょうか」

「叔父上の願いは正しかった。見ないで死ぬのが一番よい」

「親父どのはきつととつくに死んでおりましような」

「それでよいのだろう。たぶん」

「俺たちは不幸にも生きておりますな。で、どうしますか。安邑坊に戻りま

すか」

平康坊へとの思いもあるが、それをすべきときではむろんない。

「可能なら戻ろう」

蘭は屋根に立って周囲を見回し、下の様子を慎重にさぐってから、窓枠に足をかけ屋根を降りる。韋荘も続く。板塀から元の路地にはなく、屋敷の内側に降りて、井戸で喉を潤す。蘭には勝手知ったる武大人の屋敷であるらしい。

「兄貴はここで待っていてくれ」

蘭は、叩き壊された戸を乗り越え、薄暗い建物の中へと入っていく。

待つことしばし、

「うまく見つけ出しました」

白い布をひらひらさせて出てくる。

蘭は布を二つに裂くと、韋荘の被りものを取り外し、頭を布で包んで後ろに結び、端を左右を長く垂らす。残りの一枚で蘭自身の頭を包む。

「何の真似だい」

「兄貴は見えていなかったですか。奴等は皆こうしていましたな。黄巢の兵が赤い布をつけているので、白が官軍側の目印なのでしょうな」

そう言われると、襲ってきた騎兵の頭は白かったような気がする。

「暗くなってきたので、これくらいでもうまく誤魔化せるかも知れませんな」
路地に出ると、すでに日は落ちてしまい、足元の方から暗くなってきている。

「そこ気をつけて」

蘭に腕を引かれて扉際に寄る。道の中央に人がうずくまっている。死んでいるようだ。

広い道に出て、誰もいないのを確かめて南に向かう。

大きな商家の前に物が散乱している。

「ここらに火が付けれなかっただけでしたかったですな」

また一つ死骸がころがる。着物を剥ぎ取られ、白い背中が剥き出しだ。

「女ですな」

韋荘は見ないようにして脇を通る。

遠くに人影がある。

ぎくりと、どこかに逃げ込もうとする。

「なるほど、こうなると頭の白い布ばかりが目立ちますな」

蘭は平然と道を歩いていく。その後ろにくつついて、

「大丈夫なのか」

「おどおどするよりは、堂々といけば何とかなりましたよ」

「度胸のよい奴だ」

向こうに見えていた人影はこちらに注意を払う様子もなく角を曲がっていく。

先ほど出損なつた坊門。いつもなら太鼓が鳴つてとうに閉まっているはずの時刻にも開け放つたままだ。こんなときに閉める者などいるはずがない。

門に向かつていこうとすると、前方からどやどやと兵士の一団が入つてく

る。

韋莊は蘭の蔭に身を隠すが、蘭はかえって前に進み出て、

「怪我をした者はおらぬかな。いれば治療して進ぜるぞ」

蘭が兵士に声を掛ける。蘭は雀蛤先生として医者のなりをしている。

兵士たちは笑う。

「敵など誰もいないのに怪我などするものか。取り放題、殺し放題。こんな

楽なことはない」

分捕った品物を見せびらかし、

「宮城にはよいものがたくさんあるらしい。早くいかないと先に取られちま

う。先生も療治などよして俺たちと一緒にいくがよい」

「いや、残念ながら、これが某の役目でしてな」

「気の毒な先生だ」

一団は笑いつつ足音高く北へといつてしまふ。

「よくあんな大胆な真似ができたな」

「あれは太原、それとも定州のあたりからきたのですかな」

「誰がいったい指揮しているのか。官軍でありながらこんなことをするとは」

「町に入ればこうするのが戦の定め。黄巢一人が例外だったのですな」

「ここは唐の都だ。官軍がそこで略奪、強殺をしてよいものか」

「よくはなくても、兵士はそうしないと気がすみませんからな。とにかく、いまはこうなっているのです。さあ、兄貴も度胸を決めていただきましょう。

門の外には何があるかわかりませんからな」

韋荘は気を引き締めて蘭とともに門の外に出る。薄暗がりには包まれ、煙と土ぼこりがまぜ合わさって、何もかもが濃い灰色に朦朧としている。白く包んだ頭が遠くあちらこちらに点々と見えている。

「威張って道を横切るしかないでしょうな」

人馬の大きな響きが東から近づいてきている。

「あれがくる前に急いで渡ってしまいますかな」

朝のぬかるみが凸凹のままに固まっていて走りにくい。

「どけどけ」

馬の集団がたちまち迫ってくる。

どうにか蹄にも蹴られず、誰何されることもなしに、大通りを渡り切る。

道の縁を東へと歩むと、三々五々兵士の集団が向こうからやってくる。

下品な笑い声を立てながら、兵士たちは二人とすれ違う。

「我先にと皇城を指しているのでしょうか。人間とは所詮このようなのなのですか」

皮肉な笑いをする蘭の足が、その先でぴたりと止まる。

「あれは、いけませんな」

蘭は唸る。

安邑坊の北門がすぐそこに見えている。門の脇に何やら大きなものが存在している。西空に残った淡い光と、沈みつつあるごく細い月の光で、黒々とした輪郭がかるうじて見えている。太く大きな柱のようでもあり、しかし奇妙な凹凸もある。今朝ほど門を出たときには、もちろんそのようなものはな

かった。

何かが積み上げられたものだろうと気づくと、韋荘にもその正体がわかってくる。

「どうしてだ」

ぶるつと体が勝手に震える。

「門から入るには、あの前を通らねばなりません」

「わかっている」

韋荘と蘭は手を取りあつて進む。

黒い物の脇までくると、微かな呻き声が漏れてくる。奇妙な凹凸と見えたのは人の手と足だ。先に進むうとしてもその場で体が竦んでしまう。

どうしてここにあるのだ。これは京観である。勝利の記念に敵の死骸を積み上げて築く塔だ。なぜそれが安邑坊の北門になければならないのか。

耳は聞くまい、目は見まいと、京観の脇をどうにかすり抜けて、門の中へと入る。

「兄貴、覚悟はできていますかな、ここから先、どのようなことがあっても驚かぬとの」

「いや、無理だ」

「俺も自信ありませんな」

韋莊は、ぬるつと足を滑らせる。からだが傾いて、門の柱に手を付くと、下に首がころがっている。蘭が韋莊の体を両脇から支える。

見れば死骸だらけだ。

「これはいけませんな。恐らく、坊から逃げ出てくる者を、ここで待ち受けて、殺しまくったのでしような」

蘭の声も震えている。

「中で何があったのだ。店は」

蘭はそれには答えようとしない。

蘭に身を預けるようにして門をくぐって坊の中へと入る。焦げ臭さが鼻を突く。火の手が向こうに上がり、ぱちぱちと木の爆せる音がする。

「市よりもひどいではないか」

韋莊がつぶやく。

「いきましよう」

とにかく店へ急こうとする韋莊の足を引く物がある。女の髪だ。死んでい
るのか生きているのかわからぬが、髪をほどいて立ち去るしかない。

もう何も見まいと、目を塞ぐようにして角を折れ、木の下をくぐると、額
に冷たく触れるものがある。顔を上げると、月の微かな光に、白く垂れ下が
る。目を凝らすと、赤子の手だ。その上を見ると、鴟の早にえのように背中
から腹が枝に貫かれている。

「朝のあの女の赤ん坊かも知れませんか」

「嫌なことを言うな」

韋莊は否定するが、蘭は木の幹にひっかかっている布を検分する。牡丹の
模様があるようにも見える。

韋莊は目をそむけ、道を歩む。

暗がりにあると見えるのは死骸ばかり。歩いているのは二人だけ。左右の人家には微かな人の気配が感じられるところもあり、押し殺したような泣き声が聞こえてくるような気もする。

朝のあの麗らかな陽射しのもとにあつた安邑坊と、この違いはどうしたところか。

「なぜだ」

店へ早くと思いつつも、足は前に進み難い。

「問うたところで意味ありませんな」

蘭は韋荘の背を押す。

がらがらと崩れる音。光が走り、裂くような悲鳴。建物が燃え崩れて炎が立ち上る。

「どうしてだ」

「殺し始めたら止まらなくなるのでしょいな」

我が店ばかりは違ってほしいと願うが、それは虚しいものと判明する他は

ないのだろうか。しかし、万一の望みがあるのならば。

安邑坊でも裕福な屋敷の集まる通りは、巨大な虎の群れにでも襲われたかのような。暗くて見え難いだけまだましなのかも知れない。

すでに人の住む町ではない。鬼が彷徨う地の底の世界であるようだ。この先へは進まずに避けて逃げたくなる。しかし、店はもうすぐそこだ。

医者の門にうづくまる人影がある。また一つの死骸であろうかと前にさしかかると、ゆらりとそれが揺れる。鬼であろうかと韋荘が身を竦めると、

「きや」

と、叫んだのは鬼の方。太遅先生だ。先生は門の内に逃げ込もうとして、足がもつれ地面にばったり倒れる。

「隣家の雀蛤でございます」

蘭が声をかけても、太遅先生は両手で頭を押さえ両足をばたつかせている。蘭はその脇に膝をつき、背中をさすりつつ、

「どうぞ御安心されよ、私です」

医者は奇妙な声を発し、こわごわ顔を向けてくる。

「あいや、あなたさまでしたか。でしたら、命ばかりは、どうぞどうぞお助けください」

太遅先生は拝む。

「私が先生に何かするはずありませんでしょう」

「いやいや、その白い布。いつの間にあいつらの仲間になったのです」

「これですか。これは目をくらませるため」
蘭は頭の布を取る。

医者は地面に座り直し、頭を下げ、

「雀蛤先生、お願いでございます。中の者を救ってやっていただけませんでしようか」

「どうされましたか」

「若いのはさらわれ、残ったのは切られ。無傷なのは、古井戸に隠れていた某ばかり」

「あなたさまも医者ではありませんかな」

「血を見るのが苦手です」

韋莊は蘭の袖を引く。

「家の方が先だ」

その声が耳に入ったのか、太遅先生は蘭の足にすがり、

「さっきはまだ息がありました。先生のお力で、いまなら助かるかも知れません」

「御自身で診ずに、お得意の手遅れとなさってから、私に頼まれても」

「そのような皮肉をおっしゃらずとも」

蘭は医者 of 腕を振り切る。

隣がこれで店だけが無事であるはずがない。

路地からすぐに入っていこうとして、わずかな月の光、表側が開け放しになっっているのが目に入る。そこは出掛けに臆に嚴重に閉めさせたところだ。

「こちらでも手遅れでしたかな」

蘭がつぶやく。

表に回ると、店の戸が全て倒されている。あるものは外側に飛ばされ、あるものは内側にへし折られている。その上を踏んで、月明かりの下から闇の中へと入ると、つま先から氷のように冷たいものがすつと忍び上がる。得体の知れぬ臭いがある。

「臆」

蘭が小さく言う。

返事はない。

「莠」

韋荘の乾いた唇の間から声が出る。

蘭は奥へと進み、韋荘は脇の戸から出て莠の店に向かう。

中庭は物が散乱し、踏み場もない。倉から手当たり次第に持ち出し、不要な物を投げ捨てていったのだろうか。

「兄貴、だめだ。臆が死んでいる」

蘭の声が奥から聞こえる。臆がだめなら他の者は。

せめてこちら側はと、莠の店の方に望みを託すが、戸が開け放しになつて
いる。

「莠」

机や椅子が倒れている。暗闇を足で探り、いつも碁盤の置いてある場所へと進んでいく。

「莠」

もう一度呼ぶ。返事はない。

棚に手をかけ、首を左右に動かして透かし見る。碁盤がある。その前に腰掛けているらしき影がある。

「莠なのか」

棚の横に体を滑らせて、椅子に座る影に手を掛けると、肩から上がない。

「莠」

弟の首は碁盤の上どころがる。

中庭へと飛び出る。

奥にはいくまでもない。今朝までは皆がこの家にいたのに、いまはこうだ。

「ぐっ」

漏れるのは嗚咽か。涙は出ない。

ふらりふらりとお狐さまの祠へと歩き、その前にへたりこむ。

店はこうなってしまった。店で何があったのか。その間に己は何をしていたのか。

両手で顔を覆う。

家の者は殺され、己はこうして生きている。己が生きていられるのは蘭がいてくれたからだ。その蘭がここにいなかったために、家の他の者は殺されてしまった。蘭はなぜここにいなかったのか。己が銀犁に会いたい一心でいたからだ。

四ヶ月前に断ち切っていればこうはならなかった。今朝、俄に銀犁が思われたのはなぜだったのか。これこそが己の真実の心であったとそのときは思

い、そのために皆を死なせてしまった。そして、自分ばかりが生き残った。平康坊に向かったこの己が殺されるのなら仕方がない。それなのに、己は救われて、弟たちが殺された。どうしてなのか。そんな理不尽を、ここにしながらお狐さまは許したのか。

祠を見上げる。扉に刀が突き刺さっている。お狐さまもやられたのか。お狐さまは自分の身さえ守れぬ無力な存在だったのか。楊爺があれだけ祈り、阿枉も拝んでいたお狐さまには、実は、何の力もなかったのか。

お狐さまを責めて何になる。己がいけないのだ。己がこのざまであるから、お狐さまに見捨てられたのだろう。そうなら、この己が真先に殺されてしかるべきなのに、どうして弟たちが殺されねばならないのか。お狐さまは無力であるばかりか間違ったことをしたのか。

突き刺さった刀の柄を握る。立ち上がりざまに抜き取ろうとする。びくともしない。

観音開きのもう片側の扉を開く。手を差し入れて探ると、刀の先はお狐さ

まの像のわき腹に達している。

「お狐さまもやられてしまわれたのですか」

どうしてわざわざ祠を剣で突いたのか。

お狐さまがこうなつては何もかも終わりになるのも仕方がない。

細い月は見えなくなっている。

祠にもたれて座る。見上げると、どこからか立ち昇る煙が隠すのである

う、星の光が明滅する。

一望秋山静 望み見る秋の山は静まり返り

簫条形跡疎 人の踏み入った跡は稀である。

方願沮溺耦 願うべきは古き二人の隠者のように

澹泊守田盧 田を守りつつ淡き日々を送ること。

不意に思い起こす。貢奉を受けると南山で決意を告げたとき、叔父が歌った韋応物の詩。叔父は受験に賛成しなかった。

叔父に従っていれば、いまごろは莊園にいて、蘭や莠も都から避難してい

て、皆が狐潭の祠の前で無事にいられたかも知れない。

いくつもの過ちを重ねてしまった結果がこれなのだろうか。
音もなく蘭が歩いてくる。

「だめでしたな」

ぼそりと言うなり、しゃがみこむ。

「羨もだ」

「そうでしたか」

蘭は膝を抱えてうな垂れる。

今日はどうしてこうなってしまったのか。己の過ちの故だ。

蘭が息を吐き、地面を叩き、

「どうしてこんなことにしたんだ」

立つと、

「おまえのせいなのか」

お狐さまの祠を蹴る。

「私がいけなかったのだ」

韋荘は従弟をなだめるように言う。

蘭はもう一度祠を蹴る。

「どうしてこんなことにしたんだ」

蘭は、祠に唾を吐きかけ、

「わっ」

と、叫び、そこらに散乱している物をやたらと蹴り始める。

池のまわりをわめきつつ、腕をぐるぐる回して歩き、今度はそこらの物を拾ってばんぼんと池に投げ入れる。ばしゃばしゃと水が跳ねる。

「どうしたのだ」

韋荘が言っても蘭は答えず、池をひと回りして戻ってくる。荒い息が異様に響く。

「どうしたのだ」

韋荘がまた声を掛けても、せいせいと息をはずませるだけで蘭は答えない。

荒い呼吸が少しおさまってきたかと思うと、お狐さまの祠を再びどすんと蹴り始める。

「おまえのせいか」

怒鳴ると、急に走って倉に飛び込む。何やら大きなものを担ぎ出してきて、池に投げ入れる。水しぶきが四方に飛ぶ。

「どうしたのだ」

韋荘がまた問うが、蘭は無言のまま池の周囲をぐるぐると何度も回る。突如、奇声を発し、塀際に並ぶ石碑を次々に押し倒し始める。どすんどすんと地響きがする。

「そんなに暴れてどうしようと言うのだ」

韋荘は呆然と座ったまま。

全てを倒し終わると、蘭は戻ってきて、韋荘の頭にまだあった布を剥ぎ取って放り投げ、

「兄貴は悔しくないのですかな。こんなことになってしまつて。その上、何

もできずにいるのですぞ」

「何を悔しがるのだ。全ては私が悪いのだ。こんな私でなければこうはならなかった」

「兄貴のせいではない。悪いのは俺ですな。だから悔しいのだ」

「そなたは私を救ってくれた。そなたがいなければ私は死んでいた」

「兄貴を誘い出したのはこの俺」

「それは私に執着する心があったからだ」

「それは揚州から兄貴を無理に連れ帰ったに始まった。俺がいけないのだ」

「それも元は私がいけない。こうなるともしわかっていたならば、私は揚州にもいかなかっただろう。初めから誰にもわからぬことだ」

「いや、俺はわかっていなければいけなかった。風任せの俺が、風を読み間違えてよいはずはありませんからな」

「そなたのせいではない。私がいけないのだ」

「兄貴の大事な弟を死なせた。こんな間抜けな俺は生きてはいけけない」

蘭はお狐さまの祠の戸を掴み、どしんどしんとそこに頭を叩きつける。

「やめろ」

韋莊は後ろから抱える。

「こんなへまをして、生きている気はない」

「全ては私が悪いのだ」

「兄貴にそう思わせることが、この俺のとんでもない失敗だ」

蘭は祠に刺さった刀の柄を握り、

「狐の野郎、俺をこんなざまにしてさぞおかしからう」

全身を震わせて刀を抜き取ろうとする。がたがたと祠全体が揺れ、蘭の大
声とともに刀は抜ける。蘭は地にころげ、両手で刀の柄を握ったまま、地面
をごろごろとのたうちまわる。

そのありさまを韋莊は星明かりのもとに見ているしかない。

蘭は刀を夜空に投げつける。ばしゃばしゃと池の中へと入っていき、大き
な音とともにそこで大の字になってしまう。

「天、徳を予になせり、桓魋（かんたい）それ予を如何せん」

蘭は大声で叫ぶと、がばと起き上がり、水を飛ばしながら出てくる。

蘭が言ったのは孔子の言葉だ。孔子は桓魋という男に迫害されて、命も危うくなった。徳を広める任務を天から授けられて生まれた私を、桓魋（かんたい）ごときはどうもできぬと、孔子は動じなかった。

「俺は、桓魋（かんたい）それ予を如何せん、などと慢心していたのですな。俺一人はいつでもうまくやっていけると思っていた。風任せの俺には必ずよい風が吹いてくると思ひ込んでいた。それがこのざまですな。俺が自分の失敗で死ぬのなら笑うだけ。俺が生きて、兄貴の大事な弟たちを死なせてしまった。徳のために生きる孔子を天は見捨てずとも、利にのみ走るこの俺などは、狐さへ見放すのですな。愚かな男はこのざまですな」

蘭は高く笑う。

「どうしたのだ、そなたらしくもない」

韋荘は、興奮して震える蘭の肩を抑える。

「いや、これこそが俺の本当の姿ですな。そうだ、こんなことになるくらいなら、太遅先生を助けてやればよかったですな。いまからでも手遅れとは限らない」

蘭は韋荘の腕から抜けて駆けていってしまふ。

韋荘には何が何だかわからない。

隣でしばらく物音がし、蘭はとぼとぼと戻ってくる。

「みんな死んでおりましたな。どこまでいっても役立たずな俺ですな」

蘭は祠の前に座り込む。

あたりは真暗闇。どこからともなく聞こえるのは、ぶすぶすと家の燃える音と、人の偲び泣き。

蘭の息が次第におさまっていく。

韋荘は静かに話し始める。

「いつであったか、暮れゆく章華台にそなたと二人、やはりこうして並んで座っていた。生きている間に、長安が廢墟となるのを見るかも知れぬとそな

たは言った。まさかと思つたものだが、今日このような日が巡りきた。これは廢墟となる始まりの日であるのだろうか。この先に、まだまだひどいことが待っているのだろうか。それを私は見ることになるのだろうか。

莠たちは殺された。私の過ちだ。首が飛ぶ最後の一瞬まで碁盤の前にいられたのは、莠らしい最後と思つても良いのか。碁を思うだけで、これから先にくるかも知れぬ凄惨な日々を見ずにすんだのは、まだしも幸せであったのか。死なせてしまった者を、私はどのように思いたいのだが、生き残つた我々は、死んでしまった者のために、生きていられるのがやはり幸運であると思わねばならぬのだろう。過ちは過ちとし、生きている事実がある限りは、それが幸運であると思うべきであつて、そうしないのなら死んでしまった者に対して申し訳が立たない。

長安が廢墟となるのを見られるのが幸運であるとは思わぬが、かつて、狐潭において、まだ幼い伍七と阿枉が一つの舟に乗るのを見て、この者たちの小さな幸せを守つてやりたいと考えた。あのころの莊園には、そのような小

小さな幸せがいくつもあったのだろう。それを守り、莊園ばかりではなく、少しでも唐土の民にも広げたいと思った。小さな幸せを銀犁にも与えたかった。しかし、その思いの結果がこうなってしまった。ならば、我々はこれからどうしたらよいのか」

「風はもう吹いてこぬのですな」

「そうだろうか。そなたに習って孔子の言葉を引けば、人の生きるや直し、と孔子は言われた。真直ぐに生きてこそ人なのである。この世には真直ぐでなくても生きる者は多い。むしろその方がより容易と見える。孔子は、真直ぐでなくても生きていられるのは、たまたま天の咎めを免れている間だけのことだとも言われた。果たしてそうなのか。莠は真直ぐに生きていなかったのか。天の咎を受けて無残な死に方をしたのか。断じてそうではあるまい。莠ほどに真直ぐに生きた者はいない。真つ直ぐに生きてきたとは到底思えぬこの私が、天の咎めを免れてなお生きている。天は何を見ているのか。過ち多き己に、いまからでも真直ぐに生きよと言うことなのか」

「全てを無にしてしまった俺は駄目ですな」

「非は私にある。その上にだ、人の力にはどうにも及ばぬものがあるだろう。お狐さまさえわき腹を刺される始末なのだから」

韋荘は立って祠の内に手を入れ、狐の腹に触れる。大きな傷がある。

「哀れではないか」

「俺以上にへまな狐ですな」

蘭は苦しげに笑う。

楊爺の顔が思い出される。いまどうしているのか。

初めて涙が溢れてくる。闇に己の嗚咽が漏れる。それは長く続き、次第におさまっていく。

祠の内に何やら気配がある。韋荘は涙を拭う。己の呼吸を整え、耳を澄ませると、人の息のようである。覗くが真暗で何も見えない。

「誰かいるのかい」

声をかける。返事はない。

蘭が韋荘の後ろに寄ってくる。

「俺が罵倒したので、お狐さまが怒っておられるのですかな」

韋荘はお狐さまの腹から背の方へと手を回していく。手の甲に触れるものがある。髪のようにだ。

がたりと音がする。ふうつと息が洩れる。

韋荘は、はっと気づく。

「阿枉なのか」

「そのお声は旦那さまでしょうか」

「そうだ、私だ。おまえ無事だったのか」

「どうやら」

「どうしてそこに入っているのか」

「楊臆さんがここに入れてくださったのです。刀で衝かれたと感じて、その後、何がなんだかわからなくなりました。真暗なのは、目が見えなくなつたのでしょうか」

「いや、夜だからだ。おまえ、どこか刺されているのかい」

「痛むところはどこもないようです」

韋荘は祠に頭を突っ込む。狭いこの中に阿枉の入る隙間がどこにあるのか。蘭と力を合わせてお狐さまの像をずるずると引き出す。阿枉がころがり出てくる。

「他の皆さま方はどうされましたか」

阿枉の問に蘭も韋荘も答えられない。

「まさか」

阿枉は蘭の膝にすがりつく。

「俺のへまだ」

「いや、この私がいけなかったのだ」

「どうなさったのでございますか」

「無事だったのはおまえ一人だ」

阿枉は「あつ」と叫んで地面に伏し、

「申し訳ありません。私ばかりが助かってしまいました、何ということでしょうか」

咽び泣く。

韋荘は膝をつき、阿枉の髪に触れ、

「お狐さまが守ってくださったのだらう。おまえはいつも祈っていたから」

「いえ、私などは死んでしまって、奥さまやお嬢さま、お坊ちやまが生きていなければならぬのです。私は、自分のことなどお狐さまに祈ったことは一度だつてありません」

「そういうおまえだからこそ、お狐さまは守ってくれたのだらう。いつか兄とおまえを会わせようと、お狐さまはお考えになつておられるのだらう」

「それでは、もったいなさすぎます」

阿枉は泣きじゃくる。

「おまえが生きていてくれて、どれほど私が嬉しく思っていることか」

韋荘は阿枉を背中から抱え、己の膝の上に阿枉の顔を乗せる。

「私などが」

阿枉は顔を伏せて泣き続ける。

「蘭くんだって同じように思っている」

「むろんですな」

一人残ってくれたこの阿枉を大切にし、兄や伍七に会わせてやろう。もしも己にこれからできることがあるとするなら、それくらいであろう。

狐潭での初一念を貫くということか。

そう心に思いつつ、ここにいるのが銀犁であったならと思ひもする。抱柱の信は貫けずに終わるしかなかったのか。

阿枉の背中を撫るうちに、阿枉の泣き声はおさまっていく。

笛の音が静かに始まる。池の小橋に立って蘭が吹いている。かつて章華台で聞いたのと同じ曲だ。

蘭は何を考えているのか。鬼の街となったここで己はどうしていったらよいのか。韋荘は阿枉の温もり感じ取るだけである。